司馬遼太郎

功名が辻（三）



文春文庫

著者紹介

司馬遼太郎（しば・りょうたろう）

大正12(1923)年、大阪市に生れる。大阪外国語学校蒙古語科卒業。昭和35年、「梟の城」で第42回直木賞受賞。41年、「竜馬がゆく」「国盗り物語」で菊池寛賞受賞。47年、「世に棲む日日」を中心にした作家活動で吉川英治文学賞受賞。51年、日本芸術院恩賜賞受賞。56年、日本芸術院会員。57年、「ひとびとの跫音」で読売文学賞受賞。58年、「歴史小説の革新」についての功績で朝日賞受賞。59年、「街道をゆく〝南蛮のみちⅠ〟」で日本文学大賞受賞。62年、「ロシアについて」で読売文学賞受賞。63年、「韃靼疾風録」で大佛次郎賞受賞。平成3年、文化功労者。平成5年、文化勲章受章。著書に「司馬遼太郎全集」（文藝春秋）ほか多数がある。平成8(1996)年没。

文春文庫

司馬遼太郎

功名が辻（三）



文春文庫

功名が辻（三）
司馬遼太郎
し 1 19
文春文庫
476
＋税

9784167105198
1920193004762

絢爛たる栄華を誇った豊臣秀吉の天下がかたむきはじめた。かれに老耄の翳がさし、跡継ぎの秀頼はなお幼年の域を出ない。諸大名を掌握し、じりじりと擡頭してくる徳川家康に対して、秀吉は防戦にまわった。かれが死をむかえれば大波瀾はまぬがれぬであろう……。伊右衛門・千代の夫婦は二人して将来への道を必死に探し求める。

し 1 19
ISBN4-16-710519-5
C0193 ¥476E
定価（本体476円＋税）
文春文庫

文春文庫 司馬遼太郎作品リスト

- 最後の将軍—徳川慶喜— 新装版
- 十一番目の志士 (上)(下)
- 世に棲む日日 (一)〜(四)
- 酔って候 新装版
- 竜馬がゆく (一)〜(八) 新装版
- 功名が辻 (一)〜(四)
- 故郷忘じがたく候
- 歴史を紀行する
- 幕末
- 夏草の賦 (上)(下)
- 義経 (上)(下)
- 坂の上の雲 (一)〜(八) 新装版
- 日本人を考える 対談集
- 殉死
- 余話として
- 翔ぶが如く (一)〜(十)
- 木曜島の夜会
- 歴史を考える 対談集
- 対談 中国を考える
- 菜の花の沖 (一)〜(六) 新装版
- ロシアについて 北方の原形
- 手掘り日本史
- この国のかたち (一)〜(六)
- 八人との対話 対談集
- 対談 西域をゆく
- 歴史と風土
- ペルシャの幻術師
- 司馬遼太郎の世界 (文藝春秋編)

カバー・村上 豊

文春文庫

功名が辻

(三)

司馬遼太郎

文藝春秋

功名が辻(三)

司馬遼太郎

文春文庫

文春文庫

功名が辻

(三)

司馬遼太郎

文藝春秋

目次

功名が辻
(三)

虫売り

千代は、ときどき侍女を一人かふたりつれて、東山の諸大寺や北野天神、東寺などに物詣に出かける。

信心というほど大げさなものではなく、いわば社寺にかこつけての町歩きである。

この秋のある日、清水寺に詣でた。

そのかえり、ふと参道をみると、楓の大枝三本を地にたてて、むしろにすわっている物売りがある。

「あれはなにを売っているのか」

と侍女にささやくと、虫売りだという。

なるほど、楓の小枝々々に、小さな虫籠をつるし、そのなかに松虫、鈴虫などを入れている。

「二籠ばかり、買いましょう」

と、侍女を走らせた。

侍女が青銭を出して買いもとめると、その虫売りが、茶の煮しめたような猿投頭巾の頭をかるくさげた。

「ありがとうございます。あの御婦人は、山内対馬守様のご簾中でござりまするな」

「えっ、お前はたれなのです」

と侍女がおどろいた。

むりもない。千代のこの日の行装は市女笠をかぶり、虫の垂れぎぬをたれ、顔はなかばしかわからない。その垂れぎぬをとおして、この虫売りは言いあてたのである。

「あやしきものではござりませぬ。六平太、とおっしゃってくだされればわかります」

侍女が千代にその旨を伝えると、千代もおどろき、眼をほそめて虫売りを見た。

六平太といえば、むかし、伊右衛門が織田家の下級将校であったころから唐国で千石を頂戴したころまでのあいだ、屋敷に出入りしていた甲賀者ではないか。

「望月六平太ですね」

千代は微笑しながら、歩みよった。

六平太は、おじぎもせずに、にこにこ笑っている。すこし年をとったせいか、むかしとは人変りしたほどに好人物な人相になっていた。

「そなたは、なにをしています」

「ごらんのとおり、虫売り」

「しかし、忍びは」

と千代がいいかけたとき、六平太は、大げさな身ぶりで、

「しっ」

と自分の唇に指をあてた。

「むかしのことは言いっこなしでございますよ」

「それでは、いまはただの虫売り？」

「さあね」

あいまいに微笑したのは、なかなかそんな単純ななりわいではないらしい。

「虫籠をお二つとは、おそらくお拾様と国松様のためのものでございましょう」

と六平太は容易ならぬかんを働かせた。

お拾、とは以前にふれた。長浜のころ門前にすてられていた子で、その後十歳のときに花園の臨済宗本山妙心寺に入って得度し、のちに同山でもなりひびいた若い禅客になっている。

国松、というのは、遠州掛川城の留守居をしている伊右衛門の実弟修理亮康豊の子で、まだやっと数えて五つになったばかりであった。伊右衛門、千代がもらいうけて養子として伏見で養っていた。

が、このふたりは、六平太が出入りしていたころにはむろんいなかった。

虫籠二つ、ときいてすぐその二人を連想した六平太のかんは、あいかわらずするどい。

(やはり、虫売り渡世ではあるまい)

千代はおもい、いちど屋敷をたずねてくるように言ってきかせた。

六平太が伏見屋敷に訪ねてきた。

千代が清水寺で遇(あ)ったその翌日である。老臣の深尾湯右衛門(とうえもん)が、そのよしを千代に告げた。

「どのような姿で参っています」

と千代がきくと、湯右衛門が、

「左様でございまするな、まず五百石取りの風体にて若党に槍をもたせ、馬一頭を口取りにひかせ、家来、小者あわせて供は五人、というこしらえでございまする」

（ホホ、六平太めはやる。どうせ、化けた姿でありましょう）

と千代はおかしかった。

書院で引見すると、なるほどりっぱな武士である。

千代は人払いをし、侍女たちが去ると、

「六平太、そのご様子はどういうなぞなぞですか」

とからかってやった。

六平太は、にやにや笑っている。連れてきた家来などもどうせこの男の仲間の甲賀者なのであろう。

「浮世をかように茶化してくらしております」

「その茶化した浮世師の六平太にお金をくれて仕事をさせるひともいるから、世の中はおもしろいことです」

それはたれか、とは千代はきかず、

「あれから、どうしました」

と、まず昔ばなしから問いはじめた。

「さる西国の大名にお仕え申し、さまざまと上方の御用をつとめ、こんにちにいたっておりまする」

「さる大名とは？」

「毛利家」

と六平太は声をひそめていった。言ってからおどけて口をおさえ、

「これはつい、憚(はばか)りあることを申しました。御台所さまには、六平太はいつものように軽口になりまする」

といった。六平太は、むかしから千代をひそかに慕ってきたような気配があった。だからこそ、むかし山内家がまだ家格も卑しかったころ、頼まれもせぬのに諸国の情勢などを教えてくれたのであろう。あのころは、この男は山内家に出入りしつつ、実は織田家の敵方である近江浅井家の用をつとめていたようすであった。

「御台所さまには、それがし、かげながらときどきお目にかかっております」

「わたくしはちっとも知りませぬ」

「左様でございましょう。露顕するようではわれわれの稼業はつとまりませぬ」

六平太はしばらく黙ったまま微笑をさざなみ立たせていたが、やがて、

「ところで」
といった。
「虫は生きておりますか」
「よい音で鳴きます。そなたは見るごとに化けますが、あの虫だけはほんものらしい」
「ところで」
六平太は、この男のくせで、顔をつるりとなでた。
「それがしに御用はありませぬかな」
「ない、ない」
千代は笑っている。察するところ、六平太は毛利家の用をつとめつつ、なにか千代への好意で当家のためにも役に立ちたいらしい。
「そろそろ、世の中が」
と六平太はうれしそうにいった。
「それがしのような男の役立つ時勢にもどって参りましたようで。ここ数年のうちに、天下がひっくりかえるようなことがあるかもしれませぬ」

その日、伊右衛門が下城して部屋にくつろぐとすぐ、千代は六平太のことを報告した。
「なに、六平太が？」
伊右衛門は、あの男が鬼門であった。あの男だけが、むかし、京の空也堂で思わぬ縁をむすん

だ小りんとの事を知っている。
伊右衛門のたったひとつの情事であったといっていい。
(伊吹山で最後に別れたとき、六平太は小りんのその後のことを物語っていたな)
と思いだすうち、脳裏に染めあげたように小りんの貌（かお）、髪、肢態が思いうかび、頬に血の色がさしのぼった。
「どうなさいました」
千代は、伊右衛門の様子をふしぎそうにみている。
「いや、なんでもない」
「それならよろしうございますけど」
「それで、六平太はどう申していた」
と伊右衛門はあわてて本題にもどった。
「なにやら、世の中がそろそろ騒がしくなってきて、数年のうちに天下がひっくりかえるかもしれない、と申しておりました」
「あれはあの男の稼業だ。流言を放ったり、他家の様子をうかがったり、ときには町に火災をおこしたり、いずれにしても乱がおこるのを待っている。あのような者の言葉をいちいち耳にとめることはあるまい」
「でも」
と千代は、むかし六平太についていったことばをくりかえした。

「あのような者も、役に立つものでございます。むかしどおり、当家に出入りをおゆるしになりましたら？」
「あれは出入りをゆるすゆるさぬではない。来たければこの畳の下からでも這い出てくる男だ」
「害はありますまい」
「千代は人を信じすぎる。もしわしの寝首でもかかれたらどうする」
「ホホ……」
　寝首をかかれるほど、豊臣政権のなかで重要な大名でもあるまい。律義いちずの対馬守殿、となかば馬鹿にしたような蔭口を殿中でささやかれている亭主である。
「ひとは、こちらから信じきって接してやれば、たいていの悪人も、その善い面のみで応えてくるものでございます」
「もし裏切られたら？」
「そのときはこちらの不料簡でございますもの。あきらめねばなりませぬ。六平太は毒物かもしれませぬが、毒物でないと薬にはなりませぬ」
「なるほど」
　伊右衛門は、素直にうなずいた。
「で、六平太は忙しそうか」
「どうやらかの者の口うらではしばらく中国筋などにいたようでございますが、去年あたりからまた京、大坂に出てきたらしうございます。ああいう者が、虫売りに化けたり、馬をひか

せて御槍を立ててゆく武士に化けたりするようでは、この伏見城下もそろそろ、底の流れはただごとでなくなってきた証拠でございましょう」
「太閤殿下のお身になにかあるのかな」
「御典医のかたがたに秘密のわたりをつけてお体のご様子など、手にとるように知っている様子でございました」
「ご寿命は？」
「あと数年、というような、恐れもなきことを申しておりましたが、もし万一」
「そう、もし万一」
　どの大名も、それを気に病んでいる。もし万一、太閤の身に異変があれば、豊臣政権はどうなるのか。おそらく、崩れ去るであろう、というのは京わらべでさえそう見ていた。
　この年閏七月十三日、といえば西暦でかぞえると九月五日だが、千代のいる伏見方面にすさまじい地震がおこった。
　どういうまわりあわせか、六平太が訪ねてきてなにやら予言めかしいことをいった翌日のことである。
　おこったのは、深夜の午前二時。むろん千代は寝所にいた。
（あっ）
　ととびおきたときは、伊右衛門が千代の腕をつかんでくれていた。

「千代。——」
叫びながら伊右衛門はころんだ。千代がその上に折りかさなった。
建物が鳴りわめき、轟っ、とついそばの建物が崩れおちる音がきこえ、やがて地に吸いこまれるような衝動を感じたかとおもうと、
ぐわっ
と持ちあがり、さらに沈んだ。その瞬間、天地がくずれ去ったかとおもわれた。二人は建物の下になった。さいわい、怪我はない様子であった。
千代は泣いている。
「一豊様、地震でございます」
「地震はわかっている」
「でも、地震でございます」
「千代、気をたしかにもつことだ」
伊右衛門がもてあますほど、千代は度をうしなっていた。長浜の地震でよね姫をうしなっていらい、千代は地震ほどこわいものがなかった。
地がなお激しくゆれている。
「国松殿、国松殿」
千代はあがきながら叫んだ。
五つになる養子の国松は世子として育てられているから、別屋で乳母などとともに住んでいる。

「千代、泣くな」
「でも、こわい。——」
千代は、童女にかえったようであった。
伊右衛門はこれでも、当代きっての合戦の場かずを踏んできた男だから、地震という異常に遇っても驚きはすくない。
千代の頼りなさ。
(おどろいたな)
わが妻ながら、こんなに女とは可憐なものか、と伊右衛門は千代のとりみだしようを観察するゆとりがあった。
「千代、わしがついておる」
「長浜では、一豊様はいらっしゃいませんでした」
いまさら恨みがましくいう。
「あのときは、京で御用があった。いまは千代のそばにいる」
「二人きり」
千代は、伊右衛門がばかばかしくなるほど甘ったれてきた。
「おお、二人きりだぞ」
「家来もない」
千代は、急に心にゆとりができてきたらしく、いつもの笑顔でくすくす笑った。

「なんだ、もう笑っているのか」

「でも、こうしていますと、家来もなく侍女もなく、もとの二人きりにもどったようでございますもの」

「ああ、そのとおりだ。権勢富貴などは地が一震すれば無になるものだ。いまおなじ大地で太閤殿下も揺れている。江戸内大臣殿（家康）も揺れている。みな裸か身で揺れておるわい」

「手を、しっかり握ってくださりませ」

また、激しい震動がやってきた。

地が、波の間の舟のようにゆれた。

この伏見大地震は、幕末の弘化四年三月二十四日の信州善光寺平でおこった地震とならんで、明治までの日本史上、最大の地震であったとされている。

地震の中心は、伏見鳥羽あたりで、被害はいまの京都府南郊、大阪府などにもおよび、建立早早の京の方広寺の大仏殿も倒壊した。

余談だが秀吉はあとで、この六丈五尺の大仏がもろくも崩れ去ったことをいかり、

「汝は、鎮護国家のために建てられていながら、鎮護国家どころか、おのれの身も守りえざるか」

と矢を射させたという。

この方広寺の大仏は、のちに「国家安康」の鐘銘をいいがかりにして家康が大坂ノ陣をはじめた事件で有名である。

徳川初期の寛文三年にまたまた地震があり、方広寺大仏はふたたび「わが身さえ守りえず」くずれ、徳川幕府も、

「世にこれほどの無用のものはない」

として鋳つぶし、一文銭を鋳造し、世に流通させた。

とまれ、伏見地震。

伏見、京ではほとんどの社寺、屋敷、民家は倒壊し、圧死者は数が知れなかった。

最大の崩壊は、秀吉の伏見城であろう。

城門、櫓、殿舎だけではない。天守閣が一瞬にしてくずれ去ったのである。

世に有名な「地震加藤」の逸話があったのも、この夜であった。

この夜、加藤清正の伏見屋敷も、大書院が倒れ、厩舎から火を発したが、清正ははねおきるなり腹巻をとって身につけ、柿色手拭で鉢巻をしめ、白綾の地に朱文字でもって南無妙法蓮華経とかいた陣羽織を着し、上帯に赤銅づくりの大小をさし、八尺あまりの鉄棒を小わきにかいこみ、

「われにつづけ」

と、ゆれる大地を駈けて伏見城にむかった。

つづく者は、森本儀太夫、木村又蔵、井上大九郎、加藤伝蔵、小代下総、大木土佐など物頭三十人、それに足軽二百人。物頭には手槍をもたせ、足軽にはてこや六尺棒をもたせた。

清正は、朝鮮八道に武威をふるったが、秀吉の機嫌に触れ、いまは閉門して謹慎している。

（当夜こそ、上様の誤解をとき、ご不興をなだめねばならぬ）

とおもったのであろう。

大手門はすでにくずれており、城内に入ると殿舎、楼閣は崩れ、その下に悲鳴をきくのみであった。

清正、さらに駈けまわって本丸にあがると天守閣もない。

（あはや、殿下は梁の下にやなり給いし）

と尋ねさがすうち、ふと塀中門をおしひらいてみると、庭園がある。築山のあたりに大提灯をかけ、屏風をひきまわし、上臈二十人ばかりとともに女装してうずくまっているのが太閤であった。女のかつぎをかぶっていたのは、異変につけこんで自分を害し、政変をおこそうとする者を怖れたのであろう。

秀吉のわきに、北政所、松ノ丸夫人などがいる。

「虎之助、早や来たるや」

と、もともと清正びいきの北政所がよろこびの声をあげ、秀吉もこれに和した。

千代が、伊右衛門と自邸の梁の下にいたころ、城内ではそんな挿話があった。

とにかく、すさまじい地震だった。余震が、その後、五ヵ月つづき、京、伏見はたえずゆれているようなあんばいで、庶民の不安はただごとではない。

例の伏見くずれの日からひと月ほどして望月六平太が、虫売り姿でやってきた。

門前で、

「六の字でござりまする、深尾様はいらっしゃいまするか」

とさえいえばこの男は、千代の手配りで山内屋敷には自在に出入りできるようになっている。屋敷は、まだ仮屋だった。

千代は庭さきにまわるように命じ、自分は縁側まで出て、話をした。

「地震のときは、どうしていましたか」

「へい、この姿でお城下を逃げまどうておりました」

と、虫売りらしい屈託のなさで笑った。この男は、地震といっても失うものもない気楽な身なのである。

「ところで、お買いあげくださいました虫はぶじでございましたかな」

「そうそう」

国松が持っていた虫籠はつぶれて松虫が逃げてしまいました、と千代はいった。

妙心寺の拾に送った虫籠は、あとで使いを走らせて様子をきくと、妙心寺の堂塔がぶじだったためにまだ元気であった。

「されば、これと取りかえましょう」

と、六平太は、あたらしい虫籠を千代のそばに置いた。松虫が二ひき、入っている。

「六平太どのがとってきたのですか」

「へい、宇治の山で。採って飼いそだてていると可愛ゆくなるものでございますな。さしあげるにしても、名残り惜しいような気がいたします」

「存外、心のやさしいこと」
　無駄口をたたいているうちに、六平太は、顔かたちをあらためて、
「だいぶ、百姓どもは窮迫しておりますな」
　といった。
　そうですか、と千代はくびをかしげたが、その窮乏は千代には十分察することができる。
　秀吉は、老来、英雄の気がうせ、巨大な浪費だけが残った。
　朝鮮出兵中にもかかわらず、やたらと普請をおこし、飽くことを知らない。むろん、自分の財をつかうのではなく、諸大名に手伝わせるのである。
　諸大名はその費用を捻出するのに、自分の領民をしぼりあげるしかない。民力は極度につかれはてていた。
　当時、伏見城下に朝鮮の捕虜で姜沆という学者があり、伏見城下で木下長嘯子やまだ僧侶時代の藤原惺窩と交際していた。
　惺窩は、当時ならぶ者もない学者で、家康から禄をうけたこともあった。かれが姜沆にいったという時勢批評が、姜沆の著書「看羊禄」に出ている。
「いまほど、日本の生民が窮迫しているときはない」
　と惺窩はいい、
「もし朝鮮が大明軍とともに日本を征服しようというなら、いまをおいてない。日本に上陸すると同時に日本の降伏兵をして日本文で高札をかかせ、われわれは日本人を窮乏から救うのだ、という趣旨を徹底せしめ、かつ軍の往くところいささかも軍律を犯さしめなかったならば、日本人はよろこんで、軍に参加し、たちまち奥州白河まで平定することができるだろう」
　とまでいったという。
　そういう学者まで出るにいたっている。
　とくに地震以来、秀吉の政権が、もはや浮きあがりつつあることを、千代も察していた。
　その年も暮れようとしているとき、いったん休戦状態にあった朝鮮の役が、ふたたび開始される情勢になった。
　年があけて慶長二年二月二十一日、秀吉は朝鮮再征部隊を部署した。
　先鋒は、あいかわらず加藤清正と小西行長のふたりである。
「わしは、また京都留守居だ」
　と帰邸して伊右衛門はいった。
　理由は、伊右衛門が軍人として不適格であるからではない。すべて東海道に城をもつ大名は、内地警備なのである。
　むろん朝鮮に対する警備ではなく、関東の徳川家康に対する警備であった。千代がかつて、
　――徳川殿封じこめの鍵役でございますね。
　といったことがある。伊右衛門の豊臣家における役割りが、そのたとえばなしではっきりしている。

「わしは」

と、帰邸後にいった。

「最初の唐入りに選ばれなんだときは、太閤はわしの武辺をお見かぎりなされたかと不満だった。が、こんどは選ばれなかったことをよろこんでいる」

伊右衛門がそういうとおり、渡海する諸将は暗い。なんのために戦うのか、というかれら自身の理由がなかった。

この時代の武将というものは、いかに戦国風雲のなかから生き残ってきたとはいえ、戦う機械ではない。

十数年前、羽柴筑前守といった秀吉を押し立てて山城の山崎で明智光秀を討ち、近江賤ヶ岳、越前北ノ庄で柴田勝家をほろぼし、西は九州へ遠征して島津氏をうち、四国の長曾我部氏征伐のために長途の行軍をし、東は北条氏を討ち、はるか奥州までかれらが遠征したのは、すべて秀吉を押したてゆくことによって自家の繁栄をはかろうがためであった。

それ以外に目的はない。

が、朝鮮、明国と戦さをして、いったいどういう利益が自家にもたらされるというのか。

ない。

といっていい。

最初の唐入りのときには、まだしも大明帝国を切りとって領土にするという秀吉の野望を、根っから信じている武将もあった。

が、こんどはそういう野望が、一場の痴人の夢にすぎぬことを知っている。

秀吉の一片の壮気のために諸大名は戦わねばならないのである。

しかも、戦争に関するすべての費用は、当然なことながら、出征大名の自己負担であった。かつ、武功をたてた家来への恩賞も、諸侯は身銭をきらねばならない。

（まじめにはやれぬ）

という厭戦気分が、最初からある。この厭戦気分こそ、豊臣政権への痛烈な無言の批判なのだが、天下で秀吉だけが気づいていない。

十三万の出征軍は、上陸するとほんの数ヵ月で朝鮮南沿岸地方の諸城を占領した。

が、かれらは沿岸から離れない。遠く帝都京城をつくことをせず、かきのように沿岸にはりついて守勢をたもった。

というのは、京城への満足な道路がないのと、京城付近の農村は荒れに荒れて農民は餓死寸前にあり、たとえ京城を占領してもそれほどの大部隊を養えなかったのである。

いずれにせよ、千代は、自分の夫がそういう愚劣な遠征に加わらなかったことに幸福を感じていた。

（どう成り行く世なのか）

千代は、毎日、そのことを思うと暗然としてくる。

このところ、伏見の大小名の屋敷では、天下の後継者である秀頼の話題が出ぬ日、というのは

ない。

秀頼は、数えて五つ。

この幼児自身の言動の可愛さ、才智などがまきちらす話題ではない。

幼児の秀頼が利口なのか、どうか。

千代にはよくわからなかった。おそらく日本中のたれもが、よくわからなかったであろう。

千代なども、

「秀頼さまは、どういうかたでございましょう」

と伊右衛門にきくが、何度も大坂城の御殿でおおぜいの大名とともに拝謁おおせつけられている伊右衛門も、

「さあ。……」

とくびをひねるだけで、よくわからない。

殿中ふかく、風にもあたらぬように、真綿ぐるみ、金銀ずくめで育てられている、というかっこうなのである。

子供らしい生活などは、秀頼には皆無であったであろう。

なにしろこの若君は、のち大坂夏ノ陣で没した二十三歳のころには、色白で背高い美丈夫でりっぱな青年にはなっていたが、遊びで人里に出たというのは、多勢の侍女にかこまれながら住吉の海浜に貝ひろいに一度出たことがあるっきりという育ちかたをしている。

利口かばかか、見当もつかなかった。

当時でさえ、暗愚、という人もあり、そうでもない、とささやくひともある。

余談だが、のち、大坂ノ陣の前、家康が二条城で成人した秀頼とはじめて対面した。

家康はおどろき、

（これは）

と、深く意に決し、豊臣討滅をいそいだといわれる。世間でいうような暗愚ではない、と家康はみたのである。

が、秀頼がどのような英才であったとしても、かれのように育てられたとすれば、どんな人間でも暗愚にならざるをえなかったであろう。

秀吉は、天下の富と権勢をかけて溺愛しつくした。

三歳のとき従五位上になり、五歳で従四位下左近衛少将、さらにその数日後に左近衛中将にのぼっている。

千代は、去年、秀頼四歳で天皇に拝謁するために上洛した行列の大仰さ、比類ない美々しさを記憶していた。

その愛犬には唐織の錦を着せ、行列のなかを進ませていた。

幼児のために、全国の馬のなかでももっとも小さい種類の土佐馬をえらび、その三頭を秀頼乗馬として朱と金糸の大ぶさでかざり、ほかに、幼児は小鳥をよろこぶというわけで十五歳以下の鳥刺(とりさし)の少年をびびしく着(つ)かざらせて五十人一隊にして進ませている。

秀頼自身は、華麗な釣り輿(こし)に乳母に抱かれて乗り、このあとにお供の女房衆三十一人の釣り輿

がつづく。

むろん、釣り輿にしたのは、沿道の見物衆に秀頼の顔、姿をおがませるという配慮であろう。

「豊臣家は一代かぎりではない。これなる後継者がいる」

ということを、秀吉は洛中洛外の人々に実物をもって記憶させたかったにちがいない。

行列にはむろん諸大名、旗本などが騎馬で従ってゆく。

この行列で、史上かつてなかった点は、伏見城から中宿の京都前田玄以屋敷までの二里半の沿道の左右をことごとく紅白定紋入りの幔幕ではりめぐらした点であった。

豪奢、いいようもない。

さて、秀頼ばなし、続。

四歳の幼児の上洛行列のお供の大名の音頭取りは、関東の大主、内大臣、徳川家康である。

ぬめりとした顔をしている。しもぶくれで顔にちりめん小じわがあり、眼が大きく、唇がつつましく、それに体つきが肥大し、手足がみじかいから、どうみてもたぬきであった。

かれが、秀頼につきそう。

すでに秀吉の老衰がめだってきて以来、つぎの天下を奪うことを肚にきめているはずのこの五十男が、どういう心境であったであろう。

この人物は、きまじめな顔をすると、ひどくつつましやかで律義にみえる容貌をもっていた。

その日の家康の服装は、青染めの道服に大きな黄の定紋を付け、赤絹の裏の袴をはき、かれだけは内大臣の礼により網代の車に乗っている。

太閤秀吉はこの行列にはなく、すでに御所にある。

秀頼の行列を出迎える、という形式で馬に乗って三条へ進む。

秀吉の服装は、染無しの抜き頭巾を頭にかるく掛け、広袖の羽織をつけ、襟は摺り箔で金色にかがやき、無造作のなかに秀吉らしい豪奢がある。

三条で双方落ちあうや、

「おお、参られたか」

と秀吉は馬から降り、つかつかと釣り輿へあゆみよって秀頼を抱きあげた。

秀頼は、泣きもせず、笑いもせず、どちらかといえば母系の浅井家の顔だちをひく整った目鼻だちで、じっと遠方をみていた。

と、伊右衛門が帰ってから千代に報告したことがある。

（よい風景ではない）

千代は、思ったことである。父が子を溺愛するのはかまわないが、秀吉がその子を抱きあげている場所からほんの数丁離れた河原で、去年、秀次の妻妾、こどもたちが、虐殺されているのである。

（子の可愛いのは、太閤さま一人ではない）

と千代はおもうのである。健康な神経の世の父母たちは、自分の子の可愛さを、決してひとに押しつけようとはしない。

秀吉の場合、巨大な国費を傾けて天下に押しつけ、示威している。

（淫(みだ)らな）

という言葉がうかぶのだ。そういう秀吉の無神経、身勝手さは、もはや、淫ら、という言葉をつかうしか、適当な表現がない。

千代は、長浜地震で一子よね姫をなくしていた。その霊のために妙心寺に塔頭子院(たっちゅうしいん)をたて、毎月の命日には、京、伏見にいるかぎり墓参している。どころか、晩年はその塔頭に住んで、よね姫の霊とともに暮らそうと思っているほどである。

子への愛(かな)しみは、人一倍わかるつもりであった。

それだけに、秀吉の、天下を舞台とした、淫蕩にも似た溺愛ぶりが、やりきれない。こういう感情は、千代だけでなく、多くの諸侯がもったことであろう。

一昨年、秀吉は伏見城に諸大名を召し、秀頼に対して一人ずつ、忠誠を誓う旨の熊野誓紙(くまのせいし)を出させている。

誓紙の形式の文句どおりではあるが、その末尾に、

「右の条々、違背する場合には、天罰をこうむり、生きては身動きならぬ者になり、家運も子孫七代にわたって尽きはて、死んでは地獄に堕(お)ち、未来永劫(えいごう)、人間としてうまれかわらない。よって右を誓います」というものである。

伊右衛門もむろん、誓わせられている。

秀頼は、大坂城に住んでいる。

その五歳の幼童のために、

「京に参内するときに不便であろう」

と秀吉はいい、幼童の京都屋敷ともいうべき壮大な城館を工事することを公表したのは、この年（慶長二年）の春であった。

すでに秀吉は、日本史上もっとも豪壮な邸宅というべき聚楽第を建て、それを秀次に呉れてやり、秀次の賜死ののち、

「不浄の館である」

として、ことごとく取りこぼってしまった。

取りこぼったばかりのところへ、ふたたび京に大建築をはじめるというのである。

むろん、秀吉の腹は痛まない。

その建築の手伝いを、家康をはじめ、関東の諸大名に命じたのである。家康以下関東諸大名というのは、朝鮮に出兵しておらず、その点、経済的には、戦費を自己負担して出陣している渡海大名よりもぶがよかった。

だから、損を平等にさせる、というのが当然の行政処置だったにちがいない。

が、そのしわよせが来るのは農民のほうで、日本国中、外は戦費に、内は秀吉の相つぐ土木建築事業のためにおしなべて疲弊するようになった。

——民力を痩(や)せさせれば自然、諸大名の富力も尽きる。富力さえなければ戦争はおこすまいゆ

え、自分の死後、秀頼の天下は安泰であろう。
というのが、秀吉の政策であった。すべて秀頼を愛することにかかっている。この幼児ほど、天下四民に迷惑をかけた子は古来なかったであろう。
秀頼の京都におけるあたらしい屋敷は、御所の東にあたり、東は三条坊門から四条坊門までのあいだ四丁、西は東洞院（ひがしのとういん）より東へ四丁といった広大な地域で、現在、この場所は仙洞（せんとう）御所になっている。
工事は、六月からはじまった。
しかも、秀頼の屋敷だけが営まれるのではなく、諸大名に対し、そのまわりに屋敷をもつように命じた。
「千代、また屋敷を建てねばならぬ」
と、伊右衛門はさすがに、不快そうな顔をした。
「仕方がございませぬ」
千代は、つとめて明るくいった。どうせやらねばならぬことなら、不快そうな顔をするのは、無用なことであろう。
「しかし、もはや財力が尽きたぞ」
伊右衛門はいった。わずか、掛川六万石である。このたびの地震で伏見城が倒壊したときも、復旧に「お手伝い」をさせられているし、自分の伏見屋敷も立てなおした。
その上、五歳の子のための京都城館の手伝いも内地留守居大名としては応分にしなければならない。

「それでなお、二百諸侯にそれぞれ京都屋敷をつくれ、というのだ」
——こんな政権は、おわってしまえ。
と口にこそ出さないが、伊右衛門は心の中のどこかで呪（のろ）いの声をあげていた。おそらくどの大名もそうであろう。
「あす、国もとへ使いを出す。国もとも、たびかさなる無心で、金蔵も米蔵も底をついていることであろう」
「申されますな」
千代は、つとめて微笑しようと思ったが、笑顔にはならなかった。
（たった一人のお子様のために）
太閤様は暴主である、と千代は心の底からおもった。

相変らず、虫売り六平太が訪ねてくる。
むろん、季節がすでに春であるだけに、六平太は、いつまでも虫売りの変装ではない。
きょうは、町家の隠居風のこしらえで、世を早く子にゆずって気楽に茶道でも楽しんでいるような男にみえる。
「ご機嫌うるわしく存じ奉りまする」
と六平太は、書院で平伏した。

「そなたも、お元気でなによりです」

千代は、六平太を見るのが好きであった。この男ほど、気ずい気ままに世に生き、自在に世間のどの階層にも出入りし、おもしろおかしく生きている男もいないであろう。

「六平太は気楽でいい」

「どういたしまして」

六平太は苦笑した。

「これでもひとに申せぬ悩みがあるものでございます」

「それはそれは、お見それ申しました。悩みとは、恋ですか」

「さすがに」

六平太は、意外にも首筋を染めた。

「よくお見抜きでございました」

「遊女ですか。それとも、歌女(うたいめ)ですか。ちかごろは、京の遊女どもが、河原に小屋掛けして経踊りとやらいうおもしろい踊りをみせ、枕席(ちんせき)にもはべる、とやらきいています」

「よくごぞんじでございますな」

「それが、恋の相手ですか」

「いやいや、ちがいまする。申したところで御台所様などはおわかりにもなりますまい」

六平太は、巧みに話題をかえ、さまざまの世間ばなしなどを話してきかせた。そういう世間ばなしがとぎれると、

「太閤様は」と、秀吉の健康のはなしをした。

「一時はやつれられておられたようでございますが、ちかごろはまたもとの元気をとりもどされたようでございます」

「そうらしいですね」

千代は、急に別なことをおもいだして、おかしそうに笑った。

「………?」

六平太は、変な顔をしている。

「いいえ、なんでもありませぬ。お話をつづけてください」

「なぜお笑いあそばしました」

「いいえ」

千代は、微笑した顔を横にふっている。

おもいだしたことというのは、秀吉が千代に懸想しているらしい、ということを、伊右衛門がついきのういったからである。

――そんな。

と、千代はそのときも笑ってしまった。

以前にも、そんなうわさが出たことがあり伊右衛門も知っている。

「きのう殿中で、わしをつかまえてささやかれた。内儀はお達者か、あいかわらず美しいであろうな、と。用心せねばならぬ」

「それだけでございましょう？　なんでもないではありませぬか」

「それはそうだが」

伊右衛門が口ごもった理由を、千代はよく知っている。

秀吉が、他人の妻に興味をもちはじめたとき、ときどきそんなことをいうのである。

危険信号といってよかった。

が、こまったことがある。伊右衛門が近日中、知行地の遠州掛川に出むかねばならぬからであった。

伏見の山内屋敷は、留守になる。

秀吉には、そんな悪癖がある。

とくに晩年の秀吉には物事の見さかいがゆるみはてて、臣下の女房もまた自分のものというように錯覚するところがあった。

細川忠興の妻お玉、といえば、ガラシャ夫人で高名な女人だが、秀吉はこのひとにひどく興味をもった時期もあるらしい。

すくなくとも忠興はそれを警戒し、しばしばお玉夫人に訓戒していた。

「殿下はああいうひとだ。そなたは付け入られぬように戒心せねばならぬ」

と、つねづねいっていた。忠興は文事にもあかるい大名だが、歴戦武功の男である。その夫人を熱愛する反面、異常なほどに嫉妬心がふかかった。

（殿下が自分の妻に興味をもっている）

とおもっただけでも、背筋が寒くなるほどの不快感と、怒りをおぼえるたちのおとこである。

余談だが、のち関ケ原ノ役の前後、ガラシャ夫人が屋敷に火をはなって自害するときも、彼女がキリスト教徒であるために自害を禁じられていた。そこで、家老の小笠原少斎をして、わが胸をなぎなたで突かせた。同室ではなく、少斎を隣室におらせ、シキイ越しに突かせている。そこまで配慮せねばならぬほど、忠興の嫉妬癖はつよかった。

そういう忠興だから、秀吉の自分の妻に対する態度を、常人以上に不快におもったのもむりはないであろう。

かれが秀吉の生前から家康にひそかに誼みを求めていたのも、案外、そういうところにも一因があるかもしれない。

秀吉は、美貌のほまれが高かった本願寺上人顕如の後妻にも懸想し、言い寄り、千代がきいたうわさでは、

「しとねを共にされた」

ともいう。秀吉はその本願寺夫人を愛するあまり、彼女の実子が二男であるにもかかわらず本願寺を継がせて、准如上人としている。

前夫人の子で、長子であった教如上人は隠居させられ、不遇をかこった。

家康の世になってから、家康は一つは宗教政策ということもあって、本願寺二万の末寺を二つに割り、この教如上人に別の本山をたてさせた。それが東本願寺である。

そのほか秀吉は、九州征伐の陣中、立花宗茂の妻を犯した、という俗伝がある。

とにかく秀吉は、素行がよくなかった。よくないことを自分でも知っていて、かつて秀次を訓戒したときも、その四カ条の条項のなかに、

「茶の湯、鷹野、女狂い、など一切秀吉の道楽を真似るなかれ」

という項目を入れている。

自分で自分を知っていて、しかも諸事陽気で人情ぶかい性質の持ちぬしだから、かれの女狂いはすこしも醜悪感をあたえなかった。秀吉の卓抜した人徳というものだろう。

細川忠興などの場合はべつとして、たいていの家来は、秀吉の女好きにむしろ好意をもっていた。

こんな話がある。あるとき殿中で侍臣が火鉢をかこみながら、

「上様は、女色のみにて衆道《しゅどう》（男色）をなさらぬようじゃ」

というような話をしていた。

たまたま、美童がいた。みな相談の上こっそり秀吉に対面させると、秀吉はさっそくその美童を居室へ連れこんだ。

あとで美童が出てきてから、みながとりかこんで「どうであった」ときくと、

「そちに姉はおらぬか、と申されました」

と答えた。一同、苦笑した。

そういう戯《ざ》れ話の対象になる明るさが、秀吉につきまとっている。

やがて、伊右衛門が伏見を発って遠州掛川に発向するという日になった。

その前夜、伊右衛門は千代に、

「だいじょうぶであろうな」

と真剣に念をおした。

「なんのことでございます」

「うかつな。太閤殿下のことよ。もしわしが留守中、当屋敷に微行《しのび》で渡らせられることがあっても、かまえてゆるすな」

伊右衛門の語気が、あらくなっている。

「もし」

千代は、からかい半分でいった。

「許さねば主人に切腹させる、と殿下が申されましたら？」

「ばかめ。太閤殿下のよいところは左様なことは申されぬところだ。はねつけても、その場はともかく、恨みなどは残されぬ。それゆえ、そなたさえ堅固にしておればまちがいはない」

「わかりました」

千代は、素直にうなずいた。

「でも、心配でございます」

「なにがだ」

「もし、でございますよ。太閤殿下が当家に微行なされ、千代をご覧あそばして、むかしの千代

とはちがうとお思いなされ、お戯れごとも申されませんでしたら、千代はきっとがっかりすると思いますわ」

「こいつ、不謹慎なことをいう」

伊右衛門は、コブシをふりあげるまねをした。

が、それもそうかもしれない。堅固に堅固にと用心していて、当の秀吉が、

(なんだ)

と興がうせて、そういう気振りも示さなかったなら、これほど滑稽なことはない。

(しかし、千代はむかしよりもつややかになっている)

と伊右衛門はあらためて千代の顔、胸、腰のあたりをじろじろみた。

「なにをご覧あそばします」

「いや、殿下は食指を動かされるにちがいない。わしは男だ。わかっている」

「なにが？」

「そなたぐらいの年頃の妻女が清げに暮らしている色気というものは、娘などにはないとくべつなものがある」

「まあ」

伊右衛門がそんなことをいう。朴念仁かとおもえば、存外そうでないではないか。

千代は笑いだした。

「そのような好色めいたことを申される一豊様こそ、ご油断がなりませぬ。千代の目のとどかぬ

遠州掛川では何をなさることか」

「いや、わしは大丈夫だ」

伊右衛門は、大真面目にいった。

翌日、出立した。

千代は、伏見に残り、ときどき京へ物詣に出かけたりして、気ままな日を送った。

そういうある朝、門前がにわかにさわがしくなって、取りつぎの家来がとんできた。

「太閤殿下のお越しでござりまする」

「静かに」

と、千代は迎える支度のいっさいを口早に命じた。老女にもそれを命じた。

言いおわると、千代はすぐ白洲の庭へ降り素足に草履をはいた。

すたすた歩きだした。

むろん、ひとりである。

城からおりてきた秀吉は、小姓十人ほどをつれただけの微行姿だった。

山内家の門を入ったとたん、千代の機敏なさしずで、家老以下が出むかえた。

「御内室はいるかな。突如むかしばなしがしたくなって来た」

その秀吉を、家老たちは書院に通したが、秀吉はすわりもせず、

「かような固くるしい場所では話もできぬわい。茶亭はないのか」

「されば」

と、家老は案内に立った。書院に通せば、秀吉はそういうであろうと千代は見込み、家老に意をふくんで茶亭に案内するように命じてあった。

家老は秀吉を案内しながら、千代の予想したとおりになってゆくのにおどろき、内心、

（さすがは御台所さまじゃ）

と舌をまいていた。

行くほどに、邸内に猿戸（さるど）がある。その戸をおしのけて入ると、露地。

すでに客の到来を待つように踏み石にも水が打たれていた。

「ほう。山内対州（対馬守・伊右衛門）は武骨ばかりの男と思うたに、邸内にこのような数寄をこらしていたか」

と茶事のすきな秀吉はすっかりよろこんでしまった。

かやで葺（ふ）いた待合がある。その腰掛けに秀吉はすわり、あたりの景色をみた。

箱松などがあり、茶亭の背後はほどほどに透けた孟宗（もうそう）の藪になっていた。

「これは思わぬ馳走じゃ」

といううちに、千代が庭石をつたってあらわれ、亭主としてあいさつした。

「主人対馬守がおりあしく知行地に参っておりますゆえ、わたくしがふつつかながら亭主をつとめさせていただきまする」

「ああ千代殿か、これは久しい」

秀吉は、にこにこ笑った。無邪気でなんのこんたんもなさそうである。

「ただいま、支度をしておりまするゆえ、これにてお待ちを願わしうございます」

「おお、待つとも。突如の客に、こうも早く茶亭の支度がはかどるとは、千代殿、そなたには利休、織部の徒もおよばぬぞ」

「いえいえ」

千代は、度胸よく笑った。

「お正客（しょうきゃく）は、上様でござりませぬ」

「ほう、わしではないのか」

秀吉はおどろいた。天下のぬしの自分を正客にせぬとはどういうことであろう。

「かねて隣家の堀侍従殿のご母堂さまをお招きしてあり、それがたまたまきょうでございました。もうおっつけ参られることと存じまする。上様は、お相伴（しょうばん）でございます」

「あっははは、これはおもしろい」

秀吉はむしろよろこんだ。

隣家の堀侍従というのは、かつて伊右衛門とともに小田原城を攻めた堀久太郎秀政のことで久太郎はすでに数年前に亡くなり、いまはその息子堀秀治が家をついでいる。

千代はかねてこんにちあるを思い、堀家に交渉して、先代久太郎の母堂に頼み入り、そのときにはお正客になってもらうように話をしてあった。それならば第三者がいるために秀吉も無体なことはできまいとおもったのである。

が、千代の目算ははずれた。秀吉を待たせているあいだに隣家から急の使いがきて、母堂は病いだという。おそらく堀家もいざとなってみれば、秀吉をからかうことがおそろしくなったのであろう。

千代は、一対一で秀吉を招待せざるをえなくなった。

(こまったな、一豊どの)

と、千代は胸中、伊右衛門によびかけた。

秀吉と、一対一で対座するのである。相手は当代きっての女好きではないか。

(かまわない)

と千代は度胸をきめた。

やがて秀吉は、ニジリ口から這いこんできた。

香のにおいがする。

「いいかおりだ」

秀吉は満足そうであった。

亭主の千代は、微笑したまま、わずかに頭をさげた。

やがて茶事がはじまった。

「千代殿、ひさしぶりだな」

と、秀吉は茶碗をかかえながら、往事をおもいだすような表情をしてみせた。

「北政所とも、ときどきそちのうわさなどをしている」

「もったいのうございます」

「なんの。――しかし千代、過ぎしことなど思いだして懐しがるようになれば、ひとも老いたということか」

「まだまだそのようなお年ではございませぬのに」

千代は明るく笑顔をひらきながら、秀吉の顔をみた。

六十、という年にすれば、老けすぎている。頬はこけ、皮膚に力がない。

(お若いころの御無理がたたられた、というよりも、天下を得られてからの荒淫が、このように老いさせたのではないか)

「そのほうは、いよいよ美しくなるようだ。竜宮(りゅうぐう)からきた仙薬でものんでいるのではないか」

「そのようなお薬があれば、いちはやく上様に献上いたしますものを」

「そのことよ」

秀吉は、虎の肉は精を強める薬だときき、朝鮮出陣の諸将に少々送るように命じた。ところが諸将はあらそって虎狩りをやったため、蔵いっぱいになるほどの虎肉の塩づけ樽が送られてきた。

「食ったがの、まずいものだ」

「すこしは御精(ごせい)によろしうございますか」

「わからぬ」

秀吉は、さびしそうに微笑した。

かつて秀吉気鋭のころ、信長が本能寺で明智光秀に討たれたとき、軍を旋回して山陽道を駈けのぼり、摂津尼崎まできたとき、ここで会戦準備をととのえた。それまで信長の喪に服するため魚肉をさけ、精進をしていたが、精をつけるためにニンニクを食した。

　ということを、千代は夫の伊右衛門からきいていた。その旨をいうと、

「そうそう、そんなことがあったな。あのころのわしは天下第一の元気者であったわい。いまは虎肉もニンニクも、役には立たぬ」

「ご冗談ばかりを」

　と、千代は、笑いでごまかすしかない。

「どうもな」

　秀吉は、肩をたたいた。

「筋が痛んだり、理由もわからぬ熱が出たりする。しかしきょうはすぐれて気分がよいようだ。そなたの点前（てまえ）で茶を喫しているせいかな」

「ホホ、……お上手でございますこと」

「千代、頼みがある」

　と、秀吉は腰を浮かした。

　明り障子に陽がかげった。千代は亭主の座から眼をあげ、眼を微笑でほそめた。

「なんでございましょう」

「なにをわたくしにお頼みなさいます」

　と、千代はいった。

　秀吉の顔は上気している。

「たいしたことではない。そなたがすわっている亭主の座を、わしに貸してくれというのだ」

「すると、わたくしは？」

「客」

　秀吉は、立ちあがった。

「入れかわるのでございますか」

「うむ、座興に」

　と秀吉が笑顔をみせながらいう。

　千代は、片膝をつき、やがて立ちあがろうとするところへ、秀吉の手がのびた。千代は手をとられた。

　秀吉に右手をあずけつつ、

　――こまったな。

　という表情をしてみせた。

「千代、わしはそなたを好いている」

「わたくしも。――」

　と、千代はことさらに翳（かげ）のない微笑をつくってみせた。

「千代はばかじゃな。かようなとき、左様に情のない笑顔をみせるものではない」

「ではどうすればよいのでございます」

「だまって眼を伏せているだけでよい。雨に庭のすみの花が一輪、濡れているように」

「花が一輪。……」

口のなかでつぶやいたのは、やりとりの言葉に窮してしまったのである。むげにしりぞけるのはわるいし、かといって油断しているとつけこまれてしまう。

「そら、花が、濡れている」

秀吉の手が、ふいに千代のすそを襲った。

「厭や。――」

千代は、まるで小娘のように、自分でもびっくりするくらいの声をあげてしまった。

「これこれ、声が高い」

秀吉は、千代をからかうことがおもしろくなってきたようである。

「千代、おそれを知らぬのか。わしは天下を所有している秀吉だぞ」

「でも、女は支配なされておりませぬ」

「なんじゃと？」

「女は、それぞれその愛しき者のためにある者。千代のぬしは、山内伊右衛門一豊のほかはございませぬ。女は、いつの時代でも、世の支配者に属しておりませぬ」

「これは、こわいことをいう」

「こわいのは上様でございます。上様、上様左様な。……」

と千代は、裾の前の秀吉の手をとらえた。

「上様は、馬上、天下を切りなびかせて世の男どもの支配者となられました。しかし女だけは、太古以来、劫初以来、愛しい者のほかはたれにも属しておりませぬ。上様」

「なんだ」

秀吉は、千代の肩を抱いている。

「上様の伏見城さえ、百万の兵があれば城門をあけることができましょう。しかし天下のぬしの手をもってしても、一人の女性の裾は力ではひらきませぬ」

「それほど、あの伊右衛門が好きか」

秀吉も、興ざめてしまった。

「好きとかきらい、とかというよりも、いとおしいのでございます」

「おなじことではないか」

「いいえ、おなじことではありませぬ。わかいころには好ききらいもございましょう。いまとなっては、悲しみのような、業のようないとおしみで夫を見るようになりまする。上様はそのような男女の情がおわかりになりませぬか」

「わかるとも」

秀吉は、やむなくいった。

「では、このお手をはなしてくださいませ」
「千代、いい肉付だ」
　秀吉は、不覚にも声がふるえた。それほど絹を通して感じられる千代のからだは、抱かれるにふさわしく熟している。
「千代、抱きたい。天下のぬしがこうして頼んでいる。あとで伊右衛門にはわしから頭をさげてあやまるゆえ、一度でよい。そなたの心と体をわしに抱かせよ」
「無理、でございます」
　千代は、秀吉の手からのがれるために、体をくねらせていった。
　秀吉は、のがさない。ちかごろ骨と皮に痩せているくせに、意外な力を発揮して千代の腰を右腕でだき締め、左手を遊ばせつつ、
「千代、どうだ」
　と、千代の裾に左手を進ませ、ついにからだに触れてしまった。
「厭や、厭や」
　千代は、泣きそうになっている。秀吉はさらに奥深く触れた。
「厭や、いやと申しまするのに」
　そのとき、千代の足が茶釜に触れた。がたりと傾き、たぎっている湯が、炭火の上に落ちこぼれた。あっというまに、茶室の中に灰かぐらが立った。

　秀吉は、仕方なく千代を離した。
　千代は、水屋にひっこんだ。
　布巾(ふきん)をもってふたたび炉の前にあらわれたときは、灰かぐらがしずまっている。
　秀吉は、ばつのわるそうな顔ですわっていた。千代はそれをみるとわれをわすれて気の毒になり、
「ばあっ」
　という顔をして、舌を出してみせた。
　秀吉は、とびあがって笑った。
「千代、千代」
　笑いころげながら、
「そなたは、名将だ」
　といった。人間の心理を見ぬいて好きなようにあやつることがうまい、という意味であろう。
　秀吉も、救われたような気持がした。
「名将を、射落しぞこねたわい」
「鞍壺まで馬をお寄せあそばしながら」
　と、千代も調子をあわせてやった。
「そう、一騎討までしたが」
「残念にもお取りにがしあそばしました」
「ずるいやつだ」

「そのようなことはありませぬ。この茶釜が救ってくれたのでございます。あのままでは千代はあやうく上様に討ちとられるところでございました」

「言うわ。しかしその茶釜でいま一服たててもらおうか」

千代は、はい、と声に湿りをもたせず、明るい返事をした。この場合、対座の空気を重くすることは、なによりも禁物であることを知っていた。

秀吉の前に、茶碗がおかれた。

かれはそれを持ちあげ、徐々に傾けつつ喫しおわると、

「結構であった。あれほど騒いだあとのくせに、千代の茶はみごとに澄んでいる」

「ホホ、上様が、のどがおかわきなされていたからでございましょう」

千代は微笑した。そのくせ内心、秀吉の手で汚された体を、湯あみして一時も早く流し清めたいと思う気持でいっぱいになっている。

その宵、千代は湯殿にいた。

湯殿には、三つの設備がある。左のはしに檜材（ひのきざい）でつくられた小型の館が、風呂である。湯気のみが、内側にこもる。そこに入り、皮膚を蒸し、あぶらを溶かしきったあたりで板敷の上に出、侍女にあかを落させる。

よくしぼった手拭であかを掻き、そのあとぬか袋で皮膚をなめらかにし、湯をかける。

千代は、秀吉のことを考えていた。

（憎めない。……）

とおもう。

性格としてあれほどひとに愛されて世を渡ってきた人物もすくないであろう。

千代は無理無体を受けたくせに、ふしぎと憎しみは湧かないのである。ただ少々、きたならしくて、千代は閉口したが。

（――とにかく）

とくなひとだ、とおもった。女に戯れていても、なにやら、悪童が母親にあまったれているようなふぜいがあり、ついついこちらも気をゆるしてしまう。

（あの手だな）

とおもうと、千代はおかしくなってきて、くっくっと咽喉奥で笑った。

「どうかなされましたか」

と、背中を流してくれている侍女が、おどろいて手をとめた。

「いいえ、くすぐったかったものですから」

と、千代は侍女を気の毒に思った。

「こうすれば、くすぐったくはございませぬか」

「いいえ、どうなさっても、もうくすぐったくはありませぬ」

「……」

侍女は、背を流しはじめた。

千代は、秀吉の陽気さが好きだった。いまの天下は、かろうじて秀吉の陽気な個性のために持っているように思える。

ふと思いだした。

先年（文禄三年）、秀吉が、朝鮮渡海の大本営である肥前名護屋城に在陣していたときのことだ。

六月二十八日、というから、盛夏のころである。暑くもあり、長陣で退屈でもある。名護屋在陣の将士は、ようやく士気がだれはじめていた。

秀吉は、そういう人情はいちはやく察する男である。

かといってそれをひきしめるために、むずかしい訓令などは、かれは出さない。

「なにか、遊びの趣向はないか」

と秀吉はそんなことに頭をつかった。

「わっと城内が割れかえるほど笑うような趣向が」

と、かれはお伽衆や、奥むきの女官などにきいた。

みな、ほどほどなことをいった。どの案をみても秀吉は、

「いかん、世に在ったことじゃ」

といった。すでに先例のあったような催しはやりたくない。

「奇抜な！」

といって人が手を打っておどりあがるような趣向をかれは望んでいる。

ついにかれは、思いついた。

仮装園遊会をすることであった。武将の一人々々に意外な変装をさせ、たがいに相手を笑いながら一日をすごそうというのである。

そこで、そのための奉行を臨時に置き、いっさいを準備させた。

これが、日本における仮装園遊会のはじめで、その着想が奇抜なだけではない。仮装して登場する人物も、日本史上もっともけんらんたるものであった。

徳川家康以下の戦国生き残りの英雄豪傑が、おもいおもいに仮装して出場するのである。

とにかく、秀吉が肥前名護屋城で興行した仮装園遊会（そういう呼びかたはなかったが）はたいした人気で、当時京にいた千代の耳にも手にとるように伝わってきた。

当時、千代はそれをきいて腹をかかえて笑いながら、

（なんという遊びの天才なのだろう）

とおもった。名護屋城外に、ひろびろとした瓜畠があり海岸までつづいている。

会場は、その瓜畠なのである。豊臣家の定紋を染めた紅白の幔幕が、張られた。

参加者は、諸大名、旗本、大奥女中などで、当日はいっさい無礼講とされた。

瓜畠には、急造の茶店、旅籠などがしつらえられ、ちょっとした、

町

になっている。町の住人は、この園遊会の参加者なのである。

家康などはこの秀吉のばか遊びを、

（なんと阿呆げたことを）
と家来にはひそかにこぼした。この実用主義一点張りの男には秀吉の頭の中が理解しにくかったであろう。
（やむをえぬ。わしもなにか、趣向することにするか）
としぶしぶ、準備をした。
さて、とある茶店に、店さきに大きな茶釜がすえられている。茶店のおやじは、秀吉の旗本三上与三郎であった。変装しているからちょっと見にはわからない。
おやじの女房もいる。奥女中の常夏で、派手な浴衣に繻子のカルサンをつけ、頭には南蛮頭巾をかぶって、
「お入りなされ、お茶を召せ、そこな旅人、腰をおろして茶など一ぷく召さぬか」
とにぎやかに呼ばわっている。
隣りの旅籠屋の夫婦は、亭主が茶博士の蒔田権佐、女房が美人の評判のたかい奥女中の藤壺で、しきりと客引きをしていた。
やがて街路のむこうから、ひとりの「あじか」売りのおやじがやってきた。
あじかとは、土はこびのザルのことである。おやじはそれをテンビン棒の前後に何枚もぶらさげ、腰の調子をたくみにとりつつやってくる。
大きな目。
でっぷりとふとった体。

家康であった。家康は、秀吉にこういうことをさせられる自分をどう思ったか。おそらく秀吉の目の黒いあいだだけは、なにごとも猫のごとくおとなしく生きてゆくつもりであったろう。
家康は、底ぬけの大声で、
「あじか買わし。あじか買わし」
と呼ばわって歩いた。「買わし」とは「買うまいか」という意味であろう。
蒔田の茶店で茶をのんでいた連中が、
「あれは、江戸大納言ではないか」
と大笑いし、すぐ一様に感心した。
「そっくりのあじか売りじゃの」
家康は、にこりともしない。
ボテボテと荷を振りながら、
「あじか買わし、あじか買わし」
と通りすぎてゆく。
そのあとすぐ、
「かりもりの瓜ァ。かりもりの瓜。瓜召せ、瓜召せ」
と荷を振ってくる若者がある。瓜の漬けもの売りである。
が、この男は、さきに通った家康にくらべてひどく演技がまずい。
「なんだ、丹波中納言（豊臣秀保）ではないか」

と一同は興ざめる思いでささやいた。

「やはり若いということは、諸事、板につかぬようだ」

とささやく者もあったが、家康のうまさだけは老若の問題ではかたづくまい。この男の天性の演技力であろう。

仮装園遊会は、なおつづく。

茶店で一同がみていると、むこうのあぜ道を、ひとりの偏衫僧がやってくる。

「あれは、織田常真入道ではないか」

と、ひとりがささやいた。

この男は、かつては信雄といい、信長の次男である。いわば秀吉に父の天下をうばわれ、その直後家康と同盟して秀吉と戦い、のち降伏し、内大臣にまで進めてもらったが、小田原ノ陣のとき、敵の北条氏と通じた、といううわさがあって戦後、官位も領地も没収され、いまは頭を剃って常真と名乗り、秀吉のお伽衆（お話相手）になって捨て扶持一万七千石をもらって生きている。

父には似ぬ凡庸な男で、性格も煮えきらずどういうわけか、大奥の女中たちはこの男をひどくきらっていた。

その常真が、きたならしく黒衣を着、薄よごれた手甲脚絆をつけ、文庫をあやしげな供にもたせ、修行の道中にあるがごとくしてやってくる。

ひとびとはみな、

「蛇に衣を着せたようだ」

といった。頭がわるいくせに横着ぶった感じだ、という意味であろう。

そのあとが、前田利家。

痩せた老人である。高野聖とよばれている旅の乞食行人に姿をやつし、笈を負い、いかにも疲れはてたかっこうで歩いてくる。

利家は、人気のある老人で、豊臣家では、家康とともに二大勢力をなしている。

利家は、茶店の前まできて立ちどまり、あちらを見、こちらをみて、いかにも哀れげに、

「宿ゥ、宿ゥ」

と、泣くように長く呼ばわった。宿を貸す者はないか、というのだ。

そのふぜい、謡曲にある「行き暮れて袖打ちはらふかたもなし、佐野のわたりの秋の夕暮れ」といった最明寺入道時頼の故事をおもわせ、茶店の弥次馬のひとりが、おもわず、

「ご坊、宿をお貸し申そうぞ」

と叫んだほどであった。

つぎに、弓の弦売りが来る。赤色の半帷子を上にきて、頭巾をかぶり、

「イト召せ、イト召せ。ほかにご用の物もそうろう」

と呼ばわってくる。

つぎに通りかかったのは有馬中務卿法印。摂津有馬の領主で、のちに久留米藩主の祖になった人物である。

これはなんと、有馬の「池ノ坊」のふんそうをして、しきりと、
「湯文(ゆもん)」
を読みあげてやってくる。有馬の湯の効能をのべたてた内容で、これには諸人も感心し、
「お国に人を引きつけようという趣向か。むだのないお人じゃ」
と言いあった。
この日の爆笑ものは、奉行の前田玄以の扮装である。尼になってやってきた。なにしろ肥満して憎さげなつらつきなので、いかにも海千山千の老尼に似つかわしい。
それがニコリともせず諸人をあつめ、
「ただ念仏を常に申せば、かならず仏になるぞかし。念仏もむずかしく侍(はべ)らば、昼寝して気をたすけ、心をただしく持ちなすべし」
などと説教している。
さて、当の秀吉は。

秀吉は、底ぬけにこの仮装園遊会を楽しんでいた。
かれは、瓜店を出している。
かっこうがいい。黒の頭巾をちょんと頭にのせ、あやしげな柿色の帷子を着、スゲ笠を背中に掛け、ワラの腰蓑(こしみの)をひきまわして、どこからみても瓜売りのおやじだった。
それが、地面にむしろを敷いて座り、両ひざをかかえ、

「味良しの瓜、召され候え」
などとよばわっている。
秀吉おやじの前には、こも二つに盛りあげた瓜の山があって、よく熟(う)れていた。
その売り声のうまさ、遠巻きでうれしそうにながめているお女中たちは、
(こどものころに針売りもなされたというが、ひょっとすると、瓜売りもお仕遊ばされたのではないか)
とおもったほどだった。
仮装の諸大名たちは、
「きょうは殿下もただの瓜売りだ。うんとからかってやれ」
と通りかかっては、値ぎりたおし、秀吉が、
「負からん、負からん」
躍起になってわめいているのに、
「おやじがまんせい、あいにく持ちあわせがこれだけしかないわ」
と言いすてて喰いちらしてゆく。
それをぼうぜんと見送るふぜいをして、
「これは商売にならぬ」
とこぼすと、遠巻きのお女中たちが、たがいに体をたたきあいながら笑いころげた。
そこへ、にが味走った三十半ばごろの担(にな)い茶売りがやってきた。

お女中たちは、声をひそめた。大奥の婦人にもっとも人気のある会津宰相蒲生氏郷である。利休の七高弟のひとりで教養もある。大軍の指揮をとらせては、秀吉、家康、それに蒲生氏郷といわれたほどの男で、しかも爽快な性格のもちぬしであり、この時代におけるいわば完成男子のようなおとこであった。

瓜売りの秀吉は、

「ホイ、忠三郎ではないか」

と、氏郷の通称でよびとめた。

「ちょうどよいところへきた。のどがかわいていたところだ。一ぷく、それなる茶を下っし」

「はい、ありがとうございます。じいさんもこの暑気の中を、ご精が出ますのう」

とちょっと微笑して荷をおろし、道具をとりだしてサラサラとたてた。

「ほほう、みごとな点前じゃ。さすが利休坊主の高弟だけのことはあるよ」

と秀吉はのみ干し、茶碗をかえして、

「して、代はいくらじゃの」

「金子一両、頂戴つかまつりまする」

「い、いちりょう?」

秀吉は、目をむいた。

「たかい。茶一服に一両とは無法じゃ」

「なんの、無法ではございませぬ。忠三郎がたてた茶はそのくらいはしまするぞ。いやじゃと申

されるなら、茶をかえして下っし」

「のんだものが、かえせるかよ」

秀吉は頭をかきかき、巾着のなかから金一両をとりだしてあたえた。

「ありがとうございます」

と、氏郷は道具をかつぎ、ゆうゆうと去ってゆく。

その後ろ姿と、秀吉のがっかりした顔を見くらべて、お女中たちはまたよろこんだ。

そこへやってきたのは、旅の乞食坊主にふんしている織田有楽斎である。

故信長の弟で、信長の死後は家来筋の秀吉につかえてけろりとしている脱俗的な老人であった。いまは一万五千石の捨て扶持をもらって、秀吉のお伽衆として仕えている。この有楽斎も、氏郷とおなじく利休七高弟のひとりである。

有楽斎、とぼとぼとやってきて、秀吉の瓜売りの前に立ち、しばらく物欲しそうにながめていたが、やがて数珠をつまぐり、

「おやじ殿」

と、あわれな声を出した。

「これはこれは旅のご坊、瓜を買うてくださるかや」

「なかなか」

有楽斎は、しょんぼりといった。

「われは僧の身、買えるようなぜには持ちませぬ。いかがであろう、瓜を一つ、仏に結縁するとおもうて御報謝くださらぬか」

「左様か、左様か」

秀吉は本気で哀れになってきたらしい。そういう性分の男なのである。気さくに立ちあがって手もとの瓜を二つとりあげ、

「ほらほら」

と、くれてやろうとすると、有楽斎は手を出さず、くびを横にふった。

「ご坊、どうなされた」

「いやいやそれはまだうら若いわ。そちらのほうがよう熟れているようじゃな」

と、品物をとりかえさせ、熟れ瓜を胸に抱きながら去ってゆく。

これも、見物のお女中衆をよろこばした。

瓜売りの秀吉は腹が立ってきたらしく、

「これは商いにならぬわい」

と瓜を置きすてて路上にうかれ出し、浮かれ歩くうち、例の茶店にさしかかると、おかみに扮した常夏が、

「これは瓜売りどの。お茶を召せ。蒸したてのまんじゅうもございます」

「おやおや、これはありがたい」

手をとられながら茶店に入って、茶一ぷくとまんじゅうを食べ、その店を出ると、こんどはむかいの旅籠から、おかみの藤壺が走ってきて手をとらえた。

「ご飯を参られ候え。あま酒もできております。切り麦もできております」

どんどん秀吉をひっぱる。秀吉は美人のひっぱりだこになりながら、身も世もなく相好をくずし、されるがままになっている。

この情景、「太閤記」の筆者の小瀬甫庵はこう語っている。

「ことのほかのご機嫌にて、布袋の笑めるように目も口もなきばかりに見えさせた」

遊びずきの秀吉は、遊びはじめると人もわれもなく溶けこんで楽しんでしまう。

人々はそういう秀吉を好んだ。かれはこの時代の絶対的な支配者でしかも大名以下庶民に至るまで迷惑しごくな外征をおこすような男であるのに、同時に当代きっての人気者だったのは、この底ぬけな陽気さからきている。

秀吉がお女中たちにとりかこまれて浮かれているとき、「あじか売り」の家康は、もくねんと茶店にすわっていた。

変装は秀吉よりもうまく、どうみてもあじか売りだが、それだけに油断のならぬ感じがある。

この園遊会ほど、群雄たちの性格をあらわしたものはない、と千代はおもっていた。

とにかく、千代は湯殿でその園遊会のことどもを思いだしている。

つい、ひとり笑いしてしまう。

（あの仮装の催しだけは、見たかった）

体をぬぐい、湯殿のそとへ出た。そこはよく拭きみがかれた板敷になっており、小窓の外に南天が打ち水で濡れているのがみえる。

三段あがると、化粧の間である。

千代は、トントンとあがって、鏡の前にすわった。よほどのことがないかぎり、化粧を侍女に手つだわせない。これほどの楽しみを奪われてたまるか、とおもうのである。千代は小袖をつくるのとおなじように、化粧という作業も、だいすきだった。自分の化粧だけでなく、ときどき若い侍女をひっぱってきて、

「なにもいわずにそこへすわっていらっしゃい」

といって、うむをいわさず顔の粧い（けわい）を変えてしまう。

ふしぎなことに、千代が化粧の手なおしをしてやると、若い娘たちはうまれかわったように変わってしまう。美しくなるのである。

その秘けつを、

「なんと申しても、御台所さまは堺から極上の白粉（おしろい）やべにをおとりよせになれるご身分だから」

という侍女もあり、その声も千代の耳に入ったが、千代は言下に否定した。

「ばかね」

といった。

「顔は、百人百色でしょう？　化粧も百人百色であるべきです。特徴をつかまえて、いい特徴ならそれを誇張しつつ絵をかくのよ」

そんなことをいったりした。

さて。——

化粧をおえて、居間にもどり、灯下でしばらく書見などをしていたが、やがて退屈になった。

（やはり、一豊様がいないと、一日の時間に大きな破れ目ができたようで、頼りない）

とおもった。

まだ寝るのは早いし、どうしようかしらんと文机（ふづくえ）の上で指をコトコトと遊ばせていると、背後のふすまがひらいた。

「どなた？」

ふりむいた。

おどろいたことに、匂やかな侍姿に装束した六平太が、立っていた。

「お退屈でしょう」

と、心の底を見通したようにいう。

「六平太、無礼でしょう。そなたが来たければいつ来てもよいとは申しましたが、わたくしの私室に、しかも一豊殿が遠国（おんごく）にあるときに来てもよい、とは申さなかったはずです」

「左様でありましたか」

と、六平太はいっこうに頓着せず、千代の背後にすわった。

もっとも、怒っただけではない。千代は体を六平太のほうにむけて、

「そなたは、夜気のようじゃな。いつ、どこから忍び寄ってくるかわからぬ」

と、感心したりした。

「なにか、火急のことがあったのですか」

「ございませぬ。それよりも、きょうは大茶室で、太閤殿下が大変でございましたな」

「まあ、存じているのですか」

侍女がしゃべったはずはない。千代はかたく秘密にしているつもりである。

「いや、それがしはあのとき、御台所さまの身に万一のことがあってはと存じ、天井の裏に忍んでおりました」

「うそでしょう」

千代は声をたてて笑った。そういうことができるはずはないし、第一、忍べぬように天井の仕組みができている。

「六平太、うそをついてはなりませぬ」

「いや、うそではござらぬ」

と六平太が苦笑していったが、千代はくびまで真赤にしてかぶりをふった。

「うそです。きまっています」

そうしないと、こまるのである。千代はあの茶室で、秀吉のいたずらを受けた。べつだんのことはなかったが、あんな光景を六平太に見られた、というのは、かぎりなくはずかしい。

「六平太、そんなことがあってよいものですか。あの茶室の天井裏は、うろんの者が忍べぬように、細梁(ほそはり)をタテ横ななめ蜘蛛(くも)の巣のように組んであるのです。それだのにうそなどついて、六平太はばかじゃな」

千代は、やっきになっていった。

「されば、うそと致しましょう」

と、六平太も、あまりにむきになって否定してくる千代を気の毒になってしまった。

「さればあの光景は、それがしの夢だったのかもしれませぬ」

「きっと、夢だったのでしょう」

「それにしても面白い夢でございました」

「また。——」

千代は、にらんだ。

「いやいや、太閤殿下が御台所のおん秘所に触れられましたとき、それがしも、ああいうことができるなら天下を取ってみたいものだ、とおもいました。いまでも、その光景を眼にうかべると、胸に動悸(どうき)がうちまする」

と、この男までが、変に赤くなっている。

「きょうは、なにをしに参ったのです」

「その夢を、お伝え申したかっただけでござる。いや、これはどうも」

と、手拭をとりだして首すじの汗をふき、その手拭をまるめ、不意にふすまをみて、

「ねずみが。——」

と、みじかく言い、千代の顔をみた。なるほど廊下をねずみの走る音がきこえたような気がする。そのねずみが、どういうわけか部屋にまぎれこみ、ツッと畳の上を駈けてきて、あやうく千代のひざの上に駈けのぼろうとした。

「あっ、六平太」

千代は、とびあがろうとした。その勢いにおどろいてねずみはいったん逃げ、部屋をくるくるまわっていたが、やがて全速力で千代をめがけて走ってきた。千代はねずみが大きらいだった。

「六平太、ねずみです。――」

と、もう泣き声になっていた。

そのねずみ、じつは六平太の手拭であることは、幻戯（めくらまし）にかけられている千代にはわからない。

「六平太。――」

と、腰を浮かしたとき、六平太、

「心得て候」

と千代を抱きすくめた。抱きすくめる瞬間千代の体をどうかしたのか、千代は気をうしなってしまっていた。

幻戯（めくらまし）が完成した。

六平太は、べつにいたずらをしようというわけではない。この男は、千代をひそかに想いつづけてきている。が、それよりもよりいっそうに、千代を尊敬してきた。

しかし。

あの茶室の天井から、秀吉の狂態と、あやうく難に遭いかけた千代の肢態をみてしまった。たえられなくなった。

（一度でよい）

と、六平太はおもった。自分の胸のなかで千代を抱いてみたい。

秀吉は、天下の権をもって千代を抱こうとした。されば自分は、術をもって抱きたいとおもった。

六平太の腕のなかに、千代がある。だらりと腕を垂れ、目をとじて呼吸をしているほか、もはやどんな反応もない。

唇をなかば、ひらいている。

白い小さな前歯がのぞいていた。

「千代さま」

と、六平太は千代の耳もとに唇をつけ、その名をささやいた。

呼ばれて千代のまぶたがわずかに動いた。むろん、醒めてはいない。心が、蕩然（とうぜん）として濃い藍色の天のなかを夢遊している。

「ねずみは？」

と、千代は唇だけでいった。声は出ていない。

「もう、追い申した。それがし、六平太でござる」

「ここはどこ？」

「天」

と、六平太はいった。

「千代さまは、六平太の供にて飛雲にお乗りあそばしています。天へ、高く高く駈け飛んでおります」

「ああ」

千代は微笑した。なるほど雲に乗って駈けているようであった。下界はどんどん過ぎてゆく。千代の心が、光よりも速く飛んでいる。

天は、九つあると千代はきいていた。そのさまざまな天を経めぐり、やがて金と朱と丹でつくられた竜宮のような楼門についた。

「ここはどこでしょう」

と、千代はトンと降り立って、ぼう然とあたりをみた。

天は、異様に濃い紫金色を帯び、たえず光明がきらきらと旋回している。

風が走ると、音楽がさやかに鳴った。道を天衣の男女が往きかっていた。

「弥勒浄土でござる」

と、六平太がいった。六平太がいつのまにか、たくましい裸体の上に浄白の天衣をまとっていた。千代も、まとっている。だけでなく、耳、くび、腕には宝石がきらめき、ただごとではない。

弥勒浄土の国王は、弥勒菩薩である。千代は、その仏をかねがね慕っている。

千代だけではない。戦国のこのころ、人類の未来を救世するという弥勒菩薩への信仰が知識人

のあいだでわりあいひろまっていた。

弥勒は、釈迦の死後五十六億七千万年を経て地上に降り、衆生をすくうというほとけで、それまでのあいだは、この弥勒浄土で衆生のために日夜説法しつつあり、といわれていた。

この弥勒浄土のことを、別名で、

兜率天

ともいう。海抜三十二万由旬の虚空密雲の上にあり、その広さは八万由旬といわれている。この国での昼夜の長さは、人間世界の四百年に相当し、住民の寿命は四千年という。

千代は、そう記憶している。

「六平太、本当にここは弥勒浄土ですか」

といった。

「お疑いなさるなら、お手をお出し下され」

「こう?」

と、千代は手をのばして六平太にあずけた。

六平太は、それをふたつの掌のなかにおさめ、つよくにぎった。

「あっ」

と千代は声をあげ、くたくたと折り崩れた。体が、瑠璃光を発して溶けるかとおもわれるほどの異常な感覚が走った。こころよい。

千代は、いま自分がなにをしているかがわかった。

この弥勒の国では、「男女は握手によりて淫事を行なう」ということを知っていたのである。

ふと、醒めた。

千代は、ひざを折りまげ、畳の上につつましく横臥している。

（まあ、わたくしとしたことが）

と起きあがろうとしたが、体中にこころよいしびれが残っていて、起きあがれない。

「お目ざめになりましたか」

「あっ、六平太」

と、千代は、自分の体に寄りそっているこの男に気づいた。

「そなたは、まだいたのですか」

「居たどころではござりませぬ。三十二万由旬の虚空密雲の上の国までお供つかまつりましたはずでございます」

「六平太」

千代は、みるみる赤くなった。弥勒の国では、男女の淫事は手を握りて行なうという。千代は六平太の手ににぎられて、痴（し）れしれと淫事に遊んだではないか。

「六平太」

千代は、こまってしまった。

「わたくしは夢を見ておりました」

「左様」

と、六平太は、この男にはめずらしく透きとおったような微笑をうかべた。変に神々しくさえあった。

千代は、気が楽になった。

「わたくしがうたたねを」

と、千代は、幻戯（めくらまし）をかけられたとはおもっていない。

「していましたあいだに……」

「あいだに？」

「そなたは、なにもしませんでしたか」

「なにも、とは？」

「いたずら、などを。——」

と、いってから千代はまた赤くなり、無意識にすそに手をのばして、乱れをたしかめた。

あっと心中、声をあげたかったことには、裾が尋常ではない。

乱れ、かつ、からだのそのあたりが濡れているような気がする。

「六平太」

と、千代は泣きだしそうな目で、この男を見た。

「そなたは、千代を犯しましたか」

「めっそうもない」

と、六平太は、手をのばして千代の裾のみだれを掻きあわせてやった。千代はそれをこばもうとしたが、かいなが自由にならない。

「左様な無礼はつかまつりませぬ」

にこにこしている。

「ただ、この六平太は、御台所さまのお手を握らせ参りました。それが、地上でにぎったのではなく、三十二万由旬の上の弥勒の国でにぎりましたゆえおからだがあるいは、ただごとでなかったかも知れませぬ」

「さがりゃ」

と、千代は腹が立った。腹が立つと急にからだがしびれから醒めて、すらすらと正座することができた。

六平太はすこしおどけ、ぱっとさがって平伏するまねをした。

「御台所さま、おん礼を申しあげます。六平太は、頃年(けいねん)の恋をとげることができました」

「うそでしょう」

千代は、ゆったりと微笑(わら)った。ここで取りみだせば、六平太の恋の成就を承認することになる。

千代は冗談にまぎらわして、

「さあ、六平太、さがるのです。拍子を十とってあげます。十取りおわれば、お消えなさい」

と、手をうった。

六平太は立って、舞いはじめた。千代は手で拍子を打ち、十をかぞえた。六平太はいなくなった。

淀のひと

伊右衛門が、遠州掛川からもどってきて、ほどもないころである。

ある日、帰邸すると、

「千代、若君さまのお袋さまが」

というようないいかたで、そのひとのことを伝えた。淀殿のことである。

「そなたに、小袖のはなしなどをききたいと申されているそうだ。参るか」

「どなたが、一豊様にお伝えなされたのでございましょう」

「大蔵卿(おおくらきょう)だ」

といって、伊右衛門は、やや物憂げな表情をした。大蔵卿とは、饗庭局(あえばのつぼね)、正栄尼などとともに、淀殿の老女で、女ながらも異常な権勢がある。

それが、殿中で、

「対馬守どの。あなたさまの奥方の評判を御袋さまがかねがね聞いておられ、いちど話をしてみ

たい、と申されておりまする」
　と、伊右衛門に耳打ちしたというのである。
「おそれ入りまする」
　と伊右衛門が警戒をしつつ頭をさげると、
「いずれ、お呼びがありましょう。あなた様のお家のためにも、よろこばしいことと存じます」
　大蔵卿は、笑顔をみせず、権高くいった。
（なにを言ってやがる）
　と、伊右衛門にもそのくらいの性根はある。
　かれは、この老狐のような顔つきをした老女が、きらいであった。
　彼女は、丹後の地侍大野某の妻で、淀殿が秀頼をうんだとき、乳母として召しかかえられた者である。
　その後、彼女の子の大野治長、治房は豊臣家の旗本に召し出され、権勢を得はじめていた。
（なんだ、乳母どのか）
　と、伊右衛門などはじめはその程度の認識しかなかったが、ちかごろはそうではない。彼女の主人の淀君が秀頼を生んで、豊臣家における勢力が飛躍的に大きくなってからというものは、その女官団の勢力も異常に大きくなり、大名によっては、大蔵卿に贈り物などをして機嫌をとりむすぶ者もあるほどだ。
「ありがたいとおもいなさい」

といわんばかりの態度を大蔵卿がしたのは、彼女が伊右衛門程度の大名に口をきくことは、普通ではありえないことだからである。
「千代、どうする」
「一豊様は、どう思われます。淀殿とは、あまり親しくならぬほうがよいのではございませぬか」
「そう。わしは、北政所にお目をかけられている」
　北政所は、正妻である。
　このころになると、豊臣家の家政は、ふたつの閥に割れていた。
　北政所閥
　淀殿閥
　がそれである。それぞれが、自分のサロンに大名をあつめていた。北政所にあつまる大名は、浅野長政父子、黒田長政、加藤清正、福島正則など、北政所と同郷の尾張出身の大名が多く、伊右衛門もそのうちのひとりであった。グループの共通点からいえば、歴戦の武断派といっていい。
　淀殿は、近江出身である。自然、石田三成をはじめとして、増田長盛、長束正家など近江出身者がその昵懇に多く、それらはどちらかといえば文官派とでも称すべき連中であった。
「北政所様にわるいのではありませぬか」
　と、千代はいった。
　しかし、淀殿のほうからお声がかかりとあれば、これをことわるわけにはいかない。

「参上するしか、仕方があるまい」
と、伊右衛門はいった。
「たとえ、千代が淀殿に拝謁したということが北政所様にきこえても、あれだけのおひとだ、なんともおもわれまい」
「さあ、そうでございましょうか。それはもう北政所さまは、めずらしいほどに妬心をそとにあらわさぬおひとでございますけれども、神仏ではございませぬ。あとでお耳に入れば、うれしいとはお思いになりますまい」
「むずかしいな」
閨房おさまらず、というのは豊臣家のことであった。
秀吉は権力者としてはちっと度はずれた人情家で、これがかれの魅力でもあり、欠点にもなっている。かれは、家康のような冷やかな意志力でその閨房を統御するということが、本性できる男ではなかった。
かれは、織田家の下士時代から苦楽を共にしてきた北政所をも十分以上に敬愛してきたし、淀殿にも、したたるばかりの情愛をそそいでいた。
かつて小田原征伐のとき、秀吉は北政所に手紙をやり、
「そもじ（北政所）につづき候ては、よどの物（者）我等のき（気）にあひ候」
と書いている。
ちなみに秀吉には、淀殿のほかにも側室はいる。京極長門守高吉の娘で松ノ丸殿、蒲生氏郷の妹の三ノ丸殿、前田利家の娘の加賀局の三人であった。他の侍女に手をつけることがあっても、側室には昇格させない。
とにかく、五人の妻妾のなかで、秀吉は、
「一番がそもじ」
と北政所に言い、
「二番が淀殿」
と、愛情の格づけをしている。同時に秀吉の愛情の深浅は、権勢の度あいでもあった。事実、淀殿以外の三人の側室には、諸大名に対する勢力などは皆無で、どの大名も御機嫌をとりむすぼうとはしない。
とにかく、
「淀殿」
である。ひとによっては淀君、という者もあり、敬称はまちまちであった。
秀吉はかつて彼女のために山城の淀に城をきずいて居らしめたためにそのよび名がおこった。その後、大坂城に移ったり、伏見城ができるとともに伏見城に移ったりした。いまは、伏見の城内に住んでいるという。
「殿下の寵をご一身にあつめられているとは、どのような女性（にょしょう）なのでございましょう」
「大きな声ではいえぬが」と、伊右衛門は声をひそめた。
「くだらぬ女性さ」

やはり、かれは北政所びいきなのである。

「北政所様にくらべれば、おつむり（頭）の出来ぐあいが、天と地ほどにちがう。それにお人柄に格調がない」

ひとのうわさでは、淀殿は、大蔵卿の息子の大野修理（治長）とのあいだに密通のうわささえあるという。

「まさか、とは思うが」

と、伊右衛門もさすがにそのうわさだけは信じていないが、

「うわさの出るようなところがある」

といった。若い美貌の武士などをみると、なにかしらシナをつくるようなにおいが、淀殿にはあると伊右衛門はいうのである。

「それは仕方がございませんわ」

と千代は声をたてて笑った。

「若い涼やかな殿御をみて、好もしい、とも思わぬような婦人など、千代にも興味はございません」

そのうち、大蔵卿から千代のもとに、

——あす、登城しますように。

という使いがきた。

その日、千代は未明に起きて灯火のもとで化粧（けわい）をし、陽が昇るとともに登城した。

まず、三ノ丸の大野屋敷で休息し、大蔵卿に連れられて、淀殿のいる西ノ丸へ案内された。

「お心得でありましょうけれど」

と、大蔵卿はいった。

「おたずねがないことは、申してはなりませぬ」

「はい」

千代は、控えの間でうなずいた。

やがて、書院へ通され、待たされた。

庭に時季はずれのうぐいすが啼いている。

ひとしきり木から木へと飛び移って啼いていたが、鳥も遊びに倦（あ）いたのか、ぱったりと聞こえなくなった。

ずいぶん、待たされた。千代は手洗いに行きたくなって、介添え役の大蔵卿にその旨をいった。

が、大蔵卿は、横顔をみせたまま、きこえぬふりをしてだまっている。

（いやなひとだな）

と千代はおもった。

大蔵卿も大蔵卿で、

——なんと行儀のわるい女だ。

とおどろいたにちがいない。

千代は、こうなると、むしろ大蔵卿をからかってやりたくなり、

――大蔵卿さま。手を洗いとうございます。

とかさねて言ってやった。

「なりませぬ」

ぴしり、と大蔵卿はいった。

「千代どの。ここは殿中でございますぞ。左様なおつつしみのないことでは、御亭主の対馬守どののご名誉にかかわりまするぞ」

「はい」

素直にうなずいたが、内心、くすりと笑った。うなずいたあと、すかさずいってのけたものである。

「大蔵卿様」

「なんでございます」

「わたくしは、宮仕えなど致したことはございませぬゆえ、おうかがいするのでございますけど、かようなときは、大蔵卿様はどのようになされますか」

「辛抱いたします」

「その辛抱ができませぬときは？」

「それでも、辛抱いたします」

と、ジロリと千代を見た。

「千代どのは、ご評判とはずいぶんちがったかたでございますね」

「まあ」

千代は、真赤になった。

「評判では、千代は、厠（かわや）を辛抱するのがじょうず、ということになっているのでございますか」

「これ。そなたは、からかいますか」

「いえいえ。そのような評判をたてられているなら、千代ははずかしうございます」

「千代どの。評判では、淑徳な賢婦人ということになっております。書院に待つ間もなく厠に立ちたい、などというはしたないことをいうひとではないと思っておりました」

「でも」

千代は、ますます赤くなった。

「行きたいから仕様がございませぬ。いま厠に立たせていただけるなら、千代は、賢婦人の評判など、返上してもよろしうございます」

「これこれ」

大蔵卿はあきれてしまった。

大蔵卿も、あまり無邪気にいう千代に、好意をもちはじめたらしい。

「あなたは、よほど聞きわけのないひとのように思われます。考えてもごらんなさい。いつ、お袋様（淀殿）が、渡らせられるかわからぬのでありまするぞ」

「でも」

と、千代は、こまってしまった。大蔵卿はその様子をみて、ふきだした。

「では、すぐ参りなさい。すぐでありまするぞ」

「はい、すぐ用を足して参ります」

千代は、あわててさがり、廊下を小走りに走って、厠に入った。

用を足しながら、

（辛抱はできたのだけれど）

と、われながらおかしかった。小用のことを申し出たのは、ぎょうぎょうしい官僚主義に、千代なりに反撥してみたくなったのである。

（あのような）

と千代は大蔵卿のことをおもう。女官たちがばかに威張る時代になっているのが、千代には腹だたしいことであった。

夫の伊右衛門は、歴戦の軍人である。千代はその夫をたすけてながい風雪に耐えてきた。豊臣家が天下を制しえたのは、伊右衛門らのような武将が、命をまとにして戦場で戦ってきたからではないか。

一朝平和になると、どこから来たとも知れぬ大蔵卿のような女官が威張るのがやりきれない。

（わたくしこそ、威張ってもよいのだ）

と千代はひらきなおってやりたいくらいであった。

用を足して書院にもどると、上座がけんらんと輝いている。

淀殿が、侍女多数を連れ、かつ彼女付の執事ともいうべき石河掃部助（かもんのすけ）、木下周防守らが、着座している。

千代が、家来のぶんざいで遅れてきたというはめになった。

とにかく、膝をすってすすみ、大蔵卿がさし示す場所で平伏した。

ずいぶんながく頭をさげていたが、やがて頭上に大蔵卿の声がひびいた。

「おゆるしが出ています。頭をあげますように」

というので、わずかに頭をあげ、ひたいごしに淀殿をみた。

金銀糸の縫いとりをした唐織りの小袖の両肩を脱し、それを腰にまとい、中着の純白地の小袖には、紅梅の大模様を金糸で縫いとりしている。あっと声をのむほどの派手な服装である。

「千代と申すか」

と、淀殿はききとれぬほどの小声でいった。

千代は、もう一度、平伏した。

「そちは、小袖のことに堪能（たんのう）じゃそうな。話をきくゆえ、申してみよ」

「……あの」

千代は閉口した。申してみよ、といわれたところで、質問がばく然としすぎて、なにをいっていいかわからないではないか。

（あたまのわるいひとだ）

と、千代はふとおもった。

「どのようなことでございます」

「小袖のことじゃ」

「それは、わかっておりますけど」

「申してみよ」

と、淀殿は、せきたてた。

千代は、仕方なくだまって頭をさげていた。

その態度が、介添え役の大蔵卿には、腹が立ってきたらしい。

「これ、千代」

と、不用意にもよびすてにした。

「なんでございます?」

と、千代は大蔵卿にいった。

大蔵卿は、ぬけぬけと問いかえした千代の礼のなさに、怒るよりもあきれてしまった。

(当節、大名の奥方とは申せ、もとをただせば下級武士の庭に育った者じゃ。しかしそれにしてもこの山内殿の内儀は、礼を知らなすぎる)

と大蔵卿はおもったであろう。

が、千代にすれば、淀殿といい、この大蔵卿といい、いまをときめく女流権力者のあぶらっこいふんい気こそやりきれなかった。

その感情を、かくせないのである。

「千代、たとえば自分などはどのような小袖が似合うとおもうか」

と、淀殿がきいた。

平凡な、さほどの才気もなさそうな婦人である。ただ、おそろしく美人であった。色が白く、肉づきがいい。ただすこし、豊満な顔のわりには、唇が小さすぎるのではないか。

「淀のおひとさまのように美しいお方には、どのような小袖もお似合いあそばすと存じます」

「どのような?」

「はい。たとえ、木の葉をつづった衣をおつけあそばしても」

「これっ、無礼ではないか」

と、大蔵卿が、目くじらを立てた。

「淀のおひとさまに、木の葉を着よ、とそなたは申しますのか」

「いいえ」

千代はうんざりしてしまった。

「物のたとえでございます。美しいお人ならば、裸かにおなりあそばして、南天の小枝を一えだ手にお持ちになっただけでも、小枝が玉のようにみえる、ということでございます」

「千代どの」

大蔵卿は、底意地わるくいった。

むろん、これを機会にいじめてやろうと思ったのであろう。

豊臣家の大名は、いま二つの閥に、まっぷたつに割れているのである。北政所派と、淀殿派と。

千代が、その夫の山内対馬守とともに北政所に親しんでいるということを大蔵卿はきいていた。

いや、じつをいえば。

大蔵卿にすれば、きょう、小袖の話をたねに、千代・伊右衛門を、淀殿派にひき入れてしまうこんたんであった。

が、そのもくろみを捨てざるをえないほど大蔵卿は腹が煮えはじめている。

底意地がわるくなってきたのは、つい、本心がでてしまったのである。

（この者、どうせ北政所派ではないか。うんと油をしぼってやろう）

とおもった。

ところが、そういう気配は、千代は十分に察していた。どころか、むしろ大蔵卿を意識的に挑発してきたのは、千代のほうである。わざと怒らせた、といっていい。

（淀殿の閥などにひき入れられてはたまりませぬ）

と千代はおもっていた。それには、相手を怒らせるのが一番いいであろうとおもったのである。

「婦人の容姿には、うまれついての欠点がございます。たとえば色黒、怒り肩……」

と例をあげつつ、千代は大蔵卿をじろりと見た。

なるほど、色黒で怒り肩である。

大蔵卿は、怒りで、真赤になった。

「千代どの、それがどうしたのです」

「いいえ、例えばなしでございます。大蔵卿さまのことを申しているのではありませぬ」

「無礼な。――」

と大蔵卿があやうく立ちあがろうとしたくらいであった。

が、上座から淀殿が、

「大蔵卿、なにをそのようにぶつぶつと申しているのです。すこし落ちつきませぬか」

とたしなめたので、やっと静まった。

「その欠点を」

と千代はつづけた。

隠してはならぬ、と千代はいうのである。むしろ自分のよきところを見つけ、それを誇示するような仕立て、柄、着付けを工夫するのが小袖の道である、と千代はいった。

小袖論である。

「そでは、どのようなそでがよい」

と、淀殿はたずねた。

「そでは、かたち艶（ええ）なるがよしと存じまする」

「艶とは？」

「動くものでございましょう。小袖のなかでそでのみが動きまする。艶に、やわらかく、風情に

たえがたき動きをするのが、情緒(あわれ)深いものでございます」

「されば？」

「短いよりは、長いほうがよろしうございます」

「そうじゃ、聞いている。千代の小袖はそでが長いそうな」

と、淀殿がいった。

「長いほうが、千代はすきでございます。袖の長きは、美しく若やいでみえます」

小袖は本来、そでの短いものであった。このころから、ぼつぼつ長くなってきて、のち、徳川時代の振り袖のモトをなすにいたるのである。

話がおわり、菓子が出た。ふつう、このような場所で出される菓子は、拝領してもって帰るものなのである。

が、千代は、大蔵卿のほうへ小首をかしげ、にこにこしていった。

「このお菓子、いま食べてもよろしうございますか」

「なりませぬ」

大蔵卿は、こわい顔でいった。

「まあ、惜しいこと。見ておりますと、あまりにおいしそうで、つばきが湧いてなりませぬ」

「千代」

淀殿の耳にきこえたらしい。

「そこで食べてもかまわぬ」

「ありがとうございます。でも大蔵卿さまが横でおにらみあそばしていますから、我慢いたしまする」

「大蔵卿、そなたはにらんでいやるのか」

「いいえ、めっそうもござりませぬ。この対馬守どのの内儀、なかなかの無法にて目がはなせぬゆえ」

「無法とはどのようなことか」

「厠へ立ったり、菓子を食べたり……」

「ああ、そのようなことなら、わらわもするぞ」

と、淀殿は、不審な顔をした。近江の大名浅井家の育ちで、そのご織田家に養われ、絵にかいたような姫そだちの淀殿である。人の心の動きなどはわからない。

「それを、大蔵卿はせぬのか」

「いえいえ、わたくしも為(な)しまする。しかし時と場所を心得るのが礼というものであり、礼なき者は人にあらず、禽獣(きんじゅう)でございます」

「わたくし、禽獣？」

千代は、大蔵卿をすっかりばかにしてしまっている。

「そなた」

と大蔵卿はいった。

「御前を退出したあと、話があります。よいか」

退出して廊下に出ると、庭がぬれている。

(雨がふったのかな)

と、千代はちょっと立ちどまった。

欄干の上に、軒がせまっている。ゆるやかな斜線をえがき、いかにも軽快なふぜいで、その軒さきに、春日風の吊り灯籠がひとつ、ぶらさがっていた。

「千代どの、こちらへ」

と、大蔵卿がせきたてた。このお局さまはよほど気のいらいらしたたちのようであった。

「はい、参ります」

といったのに、大蔵卿は千代のそでをとらえている。

「なにをなさいます」

とは、眼の表情でいった。

「どこにも逃げませぬのに」

千代は、微笑っている。

大蔵卿は千代を案内し、何度も廊下をまわった。どうせ、しかるべき書院か、茶室のようなところに案内してくれるのだろうとおもったが、意外にも三方塗りごめの物置きのような小さい部屋に千代をつれこんだ。

窓もない。

ふすまもない部屋である。ただ壁だけは、びっしりと金箔がおされていて、ただの物置きではなさそうであった。

しかも黄金の壁には、なんの絵もかかれていないのである。

「なんの間(ま)でしょう」

千代は、気味わるそうに、天井を見、壁を見、そして大蔵卿の顔をみた。

「首実検の間です」

と、大蔵卿は平然としていった。

「切腹の間だともいいます。しかしそのようなことに用いられたことはなく、ふだんはあいたままになっています」

「千代がここで切腹でもせよといわれるのでございますか」

「めっそうもない」

大蔵卿はだいぶ機嫌がなおってきている。

「豊臣家の柱石にまします山内対馬守殿の御内室を、切腹などさせてはたいへんなことになります」

と、大蔵卿はあくまでも冗談の通じない老女だった。

「大事なはなしがあります。ふさわしい部屋がないため、ここを使ったまでです」

「大事なお話とは？」

「千代どの、あなたさまは、北政所さまに可愛がられておいでですね。けっこうなこととおもい、

よろこばしく存じます。しかし、あなた様は、お世継ぎ様（秀頼）に御忠誠があるとはおもわれませぬ」
「意外なことを」
「はい、申します。秀頼様に御忠誠がおありなら、淀のおひと様のご機嫌をおとりあそばすのが当然ではありませぬか。お世継ぎさまのお袋さまにあたられまする。それを、トンとこちらの御殿には参られず、まるで他人のような顔つきをなされておる。それは不忠でありまするぞ」
「びっくりしました」
千代は、まじまじと大蔵卿をみた。
「そのようなことが不忠でございますか。千代は、大蔵卿様とはちがい、女官ではございませぬ。女官ならば毎日出仕せねば懈怠でございましょう。千代は、一武人のかかあ殿にすぎませぬもの。仕える相手は、夫しかありませぬ。ちがいますか」
「これ、物の理を言やるな」
と、大蔵卿はこわい顔をした。
千代が内心びっくりするほど、北政所と淀殿との閥は深刻化しているようであった。

要するに、大蔵卿がいおうとしているのは、
「淀殿のお味方につけ」
ということであった。

諸侯の奥方のなかで賢女のほまれの高い千代を味方にひき入れるのは、なにかにつけて都合のよいことであったろう。
とまれ、千代は、
（ずいぶんはげしい）
という「現状」を知った。現状とは、北政所派と淀殿派との対立である。
「いかがです」
と大蔵卿はいった。
千代のみるところ、北政所は英気溌剌たる女性で、それにもともと淀殿に対する妬心などはほとんど言動にあらわしたことがなく、さらに秀頼をひどく愛している。
彼女が閥をつくったのではあるまい。
それに、淀殿もそうである。才気は北政所よりもはるかに劣る普通の女性だが、かといって北政所に対し、めだつほどの言動をしたことがなく、まして派閥などをつくってどうこうしようと思ったことはないであろう。
（要するに、その下の者がわるい。かれらは自己保存や自己繁栄のために閥をつくり、相争おうとしている）
さらにいえば。
北政所の取り巻きよりも、淀殿の取り巻きのほうが、悪質だった。このんで閥をつくり勢力を伸ばそうとした。

のちの関ヶ原ノ役は、むろん閨閥のあらそいがああいう形になったものだが、それに火をつけた張本人は、淀殿の女官たちであったろう。

豊臣家をほろぼした者は、大蔵卿、正栄尼といった連中であるといっていい。

右は余談。

とにかく、千代は、右か左かをせまられ、窮境におち入った。

「むずかしいことを申しているのではありませぬ。ときどき小袖の話などをお聞かせ申すために御殿に参りなさい、と申しているのです」

――はい。小袖の話ぐらいなら。

とうなずけば、おそらく大変なことになろう。淀殿がたはきっと宣伝して北政所派に、

――山内対馬守どのの妻女は、淀殿とごじっこんになられた。

と吹きこむであろう。それだけで、淀殿方に走ったということになる。

「大蔵卿さま」

と千代はいった。

「たいへん残念なことでございますけど、千代はちかごろ小袖のことなど、考えるのもいやになっております。そういう心境でいるのに、お話などはできませぬ」

「ああそうですか。それなら小袖のことでなく、ほかのお話で御殿にいらっしゃってもかまわないのですよ」

「いいえ、そもそも、千代は屋敷のそとへ出るのがきらいなのでございます」

「さては」

大蔵卿は、眉じりをあげた。

「そなたは淀殿をきらわれまするのか」

「世のひとはみな好きでございます。大蔵卿様さえも」

「え？　さえも？」

「そうです。大蔵卿さま。おなごが権力の社会に入るといやみなものでございます。そのいやらしさが、お顔に出ております」

「そなた」

「ホホホ……鬼婆あ」

と、千代はとうとうやってしまった。

もともと、この無神経なさそいこみをはらいのけるのは、穏当な手段ではいかぬと考えていた。喧嘩は、するときはすべきであろう。

「千代、やったな」

伊右衛門は、青くなった。

「大蔵卿を、鬼婆あといったのか」

「でも、似ていらっしゃいますもの。仕方がありませぬ」

「仕様のないやつだ。そなたは、だからいつも世間馴れぬというのだ。大蔵卿と申せば、当代、

石田三成とならんで双璧といわれる権勢者だぞ。わしは、領地を没収されるかもしれぬ」
「かもしれぬどころではありませぬ。きっとされてしまいます」
「千代、どうするのだ」
「もとの牢人になるだけ。どうせ小袖から出た身のさびでございますもの。千代がひとの小袖を縫って養ってあげます」
「千代、冗談はよせ」
と、伊右衛門は、ひたいに青筋をうかべた。
「一豊様」
「身のほろぶかどうかの瀬戸ぎわだぞ」
と千代は手をのばし詰め寄って行った。
「な、なにをするのだ」
「ちょっと心ノ臓を拝見いたします」
と伊右衛門の胸に掌をあて、小首をひねって、
「すこし小さすぎまするな」
と声をたてて笑った。
「牢人になればよいではありませぬか。富貴などにこだわると、男子、なにごともできませぬ。いつでももとの裸かにもどるお覚悟が大事でございます。利口でしっかり者の千代がついておりますのに」

「なにが利口でしっかり者なものか。そなたがまいてきた種だぞ」
「ええ、ですけど、お可哀そうにそのわざわいは一豊さまにかかります」
「おいおい、薄情なことをいうな。女賢しうして」
「そうそう、女賢しうして牛を殺す、でございましょう?」
「そうだ。女は出しゃばるものではない」
「でも、太閤殿下の天下の御運命は、ふたりの女の手ににぎられてしまっているのでございますよ」
「にがにがしいことに思っている。豊臣家をつぶすのは、あのふたりの女性だ」
「ふたりではありませぬ。北政所さまはべつ」
と、千代は、その正室を地上でもっとも好きな女性にしていた。
「ちがいますか」
「わしもそう思う」
「それなら、きらいなほうの女官に、鬼婆あといってもいいではありませぬか」
「ばか、それが女だというのだ。かれらも実力をもっている。恨みを買ってはならぬ。大蔵卿にとって、わしがごとき小大名の首ひとつを素っとばすのはなんでもないのだ」
「あのね」
千代は考えぶかそうにいった。
「一豊様は、両派の中間にいてどちらつかずの顔をなさっていたいのでございましょうけれど、

もうそれが時期はすぎました。いまでは、どちらかに属さぬと生きてゆけませぬ」
「おい」
「一豊様、あのとき鬼婆あといわなければ、どうにもならぬくらい相手がしつこかったのでございますよ。これで立場がはっきりしました」
「鬼婆あのひと声で、掛川六万石がとぶか。高いひと声だな」
「でも、そのひと声で、掛川六万石がすくわれるときがくるかもしれませぬ」

その翌日、
「千代、妙なことになった」
と、伊右衛門は帰るなりいった。
「北政所様が、一度あそびに来るようにと申されている。ひっぱりだこだな」
「また小袖でございますか」
「いや、北政所様は、茶でもたてて進ぜようと申されている。明後日でもお城へのぼるか」
「そうします」
と答えたが、千代は淀殿のときとはちがい里方に帰るような気安さがあった。
「それに千代、鬼婆あの一件、殿中では大変な評判だぞ」
「もう？」
「人のうわさは早いわ」

伊右衛門が詰め間にいると、大名たちがよってきては扇子で口をおおい、
「ちかごろの快事でござった。はっははは、殿中で鬼婆あと申したのは、御内室しかござるまい。これは愉快じゃ、ぜひともよしなにお伝えくだされ」
もっとも、そういう弥次馬根性だけで痛快がっている者のほかには、
「あとの復讐が大変でござるぞ。くれぐれもご用心めされ」
といってくれる者もあった。
伊右衛門と仲のよい遠州浜松の城主堀尾吉晴などは、れっきとした北政所党だけに、
「なんの、淀殿のほうから故障を言いたててくれば、北政所様がかばってくださるわ」
といった。
そのやさき、北政所の使いが殿中にあった伊右衛門のもとにきて、
「ご内儀をよこすように」
ということだったのである。
当日がきた。
千代は質素な衣装をつけ、供はひとりつれただけで伏見城へのぼった。
北政所の住いは、もともと大坂城であったが、ちかごろは秀吉によびよせられ、伏見城内を居城としていた。
秀吉との仲は、ひどくよかった。秀吉は北政所を、妻という反面、かけがえのない盟友としていたようであった。

淀殿に愛を移していることについても、秀吉は何度か北政所に愛情のこまやかな手紙をやり、
「そちのつぎは淀のもの」
といった表現で、地位と愛情をことさらにつけている。
城内では、千代は北政所の老女である孝蔵主という尼僧の案内をうけた。
まるまるとふとって、人柄のおだやかな老尼で、大蔵卿とはおよそ対蹠的な秘書であった。
「千代さまとは、二度目でございますな」
と、山里廓への石段を歩きながら、老尼はいった。
「はい、二年前でございましたか」
「ねえ、千代さま」
と、尼僧は石段の中途でたちどまり、真剣な顔をしてみせた。
千代はまた例の閥争いによる聞きたくもない話をきくのかとおもい、心もち緊張して、
「なんでございます」
というと、尼僧はまるい微笑をうかべてくびをかしげている。
「わたくし、そのときからどれほどふとりました」
と、大真面目できいた。
きいたあと、ころころと笑い、
「世をすてていてもおなごは自分の容色のことがひどく気になります」
と、よたよたと石段をのぼりはじめた。

「やはり、すこしおふとりでございますね」
「すこしどころですか」
と、老尼は、はあはあ息をついている。

山里廓には、
「学問所」
と名づける数寄屋がある。秀吉が近臣に会ったりするときのごく私的な応接室につかわれている建物で、贅をこらしたものだということは、千代もきいていた。
「北政所さまは、御学問所でお待ちなのですよ」
と、孝蔵主が唇もとで微笑をこぼしながらいった。千代は、まあ、と溜め息をついて、
「夢ででも拝見したい、とおもっていた建物なのです。うれしい」
「それがね、北政所さまも、御学問所はおはじめてなのです」
「ほんとでございますか」
「太閤さまがおつかいなさる御数寄屋でございますもの。孝蔵主もきょう、はじめて入るのでございます。きっと寿命がのびましょう。ホホ、これも、千代さまのおかげ」
「なあぜ？」
「あら、そのこと、うっかり申し遅れておりました。北政所さまが、千代どのとお会いします、と太閤さまに申されますと、千代と会うか、千代に学問所をみせてやれ、あれは物の味わいを知

っているおなごじゃ、と申されて、太閤さまはお手ずから、御学問所詰めのお茶坊主を指図なされたのでございます」

「まあ」

おどろくほかない。

「千代さまは、おそれながら太閤さまご夫婦に大変なお人気」

とこの北政所の老秘書官は、ごくさりげなくいった。いやみでなく、心の温(ぬく)もりが伝わってくるようなほめかたである。

(淀殿のまわりのふんい気とは、たいへんなちがい。……)

と、千代は、大げさにいえば生きているのがうれしくなるような、つい心がはずんでしまう感じだった。

「涙の出るほど、うれしく存じます」

「あなたさまのお人徳でございますよ」

と、孝蔵主は、石段をのぼりながらいった。

「めっそうもございませぬ。数ならぬわたくしのような者に」

うれしい、と千代はおもった。人の世でいくつかの種類の幸福があるかもしれないが、人の客となり、行きとどいて心やさしいもてなしを受けたときの幸福というのは、格別なものであろう。この心のやさしさを芸術化したものが、茶道というものなのである。

だから、そのやさしさも、偽善では茶道の心はにせものになってしまう。北政所と孝蔵主のば

あい、そのうまれつきの人柄のせいか、巧まずして天下第一の茶道のふんい気に千代を誘い入れてしまっているようであった。

「孝蔵主さま。千代はこわいほど、いま、うれしうございます」

おもわず千代は、この幸福を、こわい、という実感でいったが、たしかにそうであろう。ひとのもてなしのうれしさは、うれしさのあまり、すべてをそのひとのために捧げてしまうというおそるべき感動をともなう。古来、人の世にはそういう話柄(わへい)が多い。

登りきると本丸である。

天守閣の屋根瓦にはすべてに金箔で紋章がきらめき、その華麗さはこの世のものとはおもわれない。が、それよりも千代にとっておもしろかったのは、天守閣の後方にあたって、自然林のような森がひろがっていることで、豪奢と閑寂が隣りあわせて対比の妙を奏でているのが、得がたくおもわれた。

孝蔵主は、千代の足をその森へさそった。

ほそい、うねうねとまがりくねった木(こ)の下道(したみち)をほとほとと歩いてゆく。

森がきれて、竹藪になった。

そこに、人影をみた。

藪の中の小道に、里女のたたずむようなかっこうで立っていたのが、なんと北政所であった。

「千代どの、久しぶりですね」

と、この天下でもっとも高貴な女性はむこうから歩み寄ってくれた。

千代は、地にひざまずいて拝礼しようとしたのを、北政所は手をのばして制止し、

「そのままで。どうか左様なことをなさらずに。きょうは亭主と客というほか、身分のへだたりはありませぬ」

「はい」

千代は、すっかり上気してしまった。

「でも、北政所さまは、かようなところでなにを遊ばされていたのでございますか」

「あなたを、迎えに出ていたのです。ごく田舎ぶりに。千代どのがひさしぶりに草深い里方に帰られた、という趣向にしましょう」

北政所は、もう五十に近いが、色白で肥り肉（ふとりじし）なひとだけに年は五つ六つ、若くみえる。千代がふと気づくと、従一位北政所は、ことさらに里女のような粗末な小袖を着、足には、かかとのはみ出た「半かけ」の草履をうがっていた。

「まあ、そのお姿は。――」

と、千代はおどろいた。自分の衣装もきょうはふだんのままで、という厳命があってそのようなものを着ているのだが、それでさえ千代のほうが気はずかしくなるような姿を、北政所はしている。

「趣向よ」

北政所はころころと笑った。

「このほうが、楽なんですよ。もともとの育ちがこうなんですもの」

やがて千代は、茶室の客となった。

四畳半と二畳という間取りで、いかにも簡素だが、しかし使っている用材は、一もんめの価いが黄金よりも高いという沈香（じんこう）の巨材なのである。

屋内にすわっていると、おのずから匂い、空気がひどく澄んでいるような感じがする。

炉のふちも、沈香の木でつくられ、灰に火を入れると、かぐわしくにおい立ってくる。

「わたくしはね」

と北政所は照れくさそうに、

「お点前（てまえ）がにがてなのです。だから同朋衆（どうぼうしゅう）（茶坊主）にそのほうはたのみましたから、ご承知くださいますように」

「ご鄭重なことでございます」

千代は、くすっと笑った。北政所の無邪気の言いわけが、千代に明るい笑いを誘発したのだった。

「太閤さまは、天下の大茶人でございますのに」

「それはもう大変」

あとは、北政所もわが夫とはいえ天下の支配者に遠慮をして、微笑にまぎらわせてしまった。

秀吉はこの学問所に気に入りの近臣をまねき、みずから宗匠になって茶をたて、大いに茶道講釈をぶつそうである。

「信長さまのころ、（太閤さまは）茶道をすることをゆるされたときがございます。そのときがいちばんうれしかった、といまでも申されております」

おそらく秀吉が、朱の日傘を差させることを許された中国征伐の司令官のときであったろう。みずから茶を主宰することを許された。信長は自分が茶道好きの茶道具凝(こ)りのくせに家来には、
「分際でない」
といってゆるさなかったのである。それを許されたとき、自分も出世をしたものだ、と秀吉はうれしかったのであろう。
「これはいけませぬ。むかし話をするようになっては人もおしまい」
北政所は、茶道の者から茶わんを受けとって、千代の膝前へおいた。

よもやまの話のあと、ふと、北政所は、
「妙ですね」
思いだしたように笑った。
「さきほど――、いかにも年をとったようで、昔ばなしなどするのがいやだ、と申しましたが、あれは負けおしみです。千代どののような、尾張のむかしを知っているひとと時間をすごすのが、楽しいとおもうようになっています。年でしょうか」
冗談ではない。千代はまだ自分をはたちそこそこだと思っているのに、年、年、と北政所はどうしたことであろう。
「左様に、年、年とおっしゃるものではありませぬ。まだ五十におなりあそばしているかどうかというお年ではありませぬか」

「千代どのはお見受けしたところいつまでもお若いようですが、わたくしは気持が人以上に老けているようです。昔ばなしが楽しくなるようではいかぬ、と思っているのですけれど」
「昔ばなしの楽しさを、そのように卑下(ひげ)なさることはございませぬ。自分の過ぎてきた道を、ふりかえってさまざまに楽しむということほど、味わい深いことはありませぬ。二度一生を経験しているようなものではありませぬか」
「うまいことをおっしゃる」
「千代も年をとれば、京の市中にでも小さな庵(いおり)をたてて、物売り女などをよび入れてはさまざまに昔ばなしを楽しもうと思います」
「なるほど、おもしろいことを言います。千代どのはほんとうに世をすごす名人ですね」
「名人だなどと」
「いつみても、屈託なさそうであかるいし。――千代どの」
「はい」
「これからも遊びにきてくれますか。尾張のことや、長浜のことなどを語りたいし」
長浜のことをことさらにいったのは、ふたりとも近江長浜での城主夫人の経験者だからである。
北政所は、こう言いながらも、これはこれで、彼女らしい政治力を働かせているのである。彼女の場合、大それた目的もないが、ふるくから知っている諸侯やその夫人を自分のそばに離れずに居させたいのであろう。
むろん、

「淀殿のもとへなど、行ってはなりませぬ」
などとはいわない。
もともと北政所は、淀殿に対し、すくなくとも表面はなんともおもっていない様子であった。
彼女は、従一位という、女としては位階の最高位にあり、その点でも十分にめぐまれているし、また豊臣家の夫人として女どもの統率者であり、淀殿でさえ、彼女の指揮をうけねばならなかった。張りあう必要など、すこしもなかったのである。
ただ、子がない。
しかし淀殿がうんだ秀頼も、この時代のしきたりとして、北政所もかれの母になるわけである。秀頼は二人の母をもっていることになる。区別するために、この幼児は、
「まん（政）かかさま」
と、北政所のことを呼ばされていた。
北政所は、豊臣家の後継者としての秀頼を二なく愛しいたわっていたし、この気持は、豊臣家の滅亡までかわらなかった。
要するに、できたひと、なのである。
ただ、豊臣家の護持について徳川家康をひどく信頼し、接近しすぎていた点だけが、淀殿とはきわだってちがう政治的色彩をもっている。
千代が、北政所と親しくすることは、同時に、豊臣家の別格の大諸侯である徳川家康の与党に入ることでもあった。

醍醐の花見

とにかく、秀吉の健康がすぐれない。
病気がち、というよりも、生命力そのものが衰えはじめているようであった。
六十三歳なのである。その程度の齢なら、なお壮んなひとがいるのに、秀吉は千代などのみるところでも、
（ご老衰。――）
という感がふかかった。少年のころの辛酸、若いころからの野戦攻城のつかれ、女道楽、などがこの人の生命を早く枯らそうとしているのではないか。
不老長生の養生などは、侍医に研究させてずいぶん試みているようであった。
侍医のひとりが、
「虎の肉がいい」
といったことがある。理由は、虎は獅子とならんで百獣の王といわれるほどに強いからだとい

う。

秀吉は、朝鮮在陣の諸将に命じて、塩漬けの虎肉を送らせた。

美味なものではない。

無理に食い、しかも何度も試み、いっこうに効果がないばかりか、下痢などをした。そのためにやめてしまった。

一昨年は、京極高次の邸に臨んでもてなしを受けているときに、茶をのみすぎ、にわかに不快になった。筋が痛んだ、という。

すぐ伏見城にひきあげたが、その日は食事がとれず、翌日も一粒のめしものどに通らなかった。

これは一月ほどで快癒したが、そのころから老衰の色がめだち、八十翁のようにみえた。

「気鬱を晴らすために、陽気にさわぎたい。それには花見がよかろう」

と、秀吉はことしの正月におもいたち、史上最大の花見といわれる醍醐の花見を企画し、北政所をはじめ諸将に準備を命じた。

これは、秀吉の最後の遊楽になったものだが、豊臣家の家族総出で楽しみたい、というのがかれの願望であった。

さっそく、そのころ大坂城にいた淀殿に対し、孝蔵主を使者にして、

「三月十五日ごろが予定である。いろいろと準備をしておくように」

と命じたが、淀殿はぴしゃりとことわってしまっている。彼女は、婦人の大多数の持ち病いといわれる気鬱（ヒステリー）の傾向がひどく、平素これに類することが多かった。

このため、淀殿、秀頼不参の花見ということになった。

秀吉は、こういう催しがすきで、自分で企画しさしずまでしたいほうであった。

かれは、まだ寒いころに、花見の中心的な場所となる醍醐三宝院へ下検分にゆき、御堂、座敷から台所まで見てまわり、

「なにぶんおおぜいをまかなうのだ。台所のかまど数も三倍にふやさねばなるまい」

とか、建物の痛みなどをこまかく視察してどこをどう直せ、とまでいった。

ところが、一度下検分をして帰城すると構想がいよいよふくれあがり、それから七日目にはまた醍醐にやってきて、

「建物が不足じゃ。いっそやるなら、花で飾られた地上の極楽のようにしよう」

と、壮大な寝殿の新築を命じたり、築地をさせたり、金堂の再興命令を出したり、

「いっそ庭もあらためよう」

と、庭の中央の島に護摩堂を置き、そこへは櫓を構想し、滝も二つ落すように命じ、まるで建築家兼庭師のようになってうれしそうに駈けまわった。

いよいよ、当日がきた。

むろん、千代も招待されている。

秀吉は古今類のない園遊会好きなだけに、その構想の雄大さ、巧みさも比類がない。

遊びにも、

「企画力」

があるのだ。千代はこの醍醐の花見をみて、つくづく、

(この人が天下を取ったはずだ)

とおもった。たとえば家康の構想力など、秀吉が月だとすればすっぽんどころか、泥がめでしかないであろう。

天下取りも構想力なのである。夢と現実をとりまぜた構想をえがき、あちらを押えこちらを持ちあげ、右はつぶして左は育て、といったぐあいに、一歩々々実現してゆき、時至れば一気に仕上げてしまう、その基礎となるべきものは、構想力である。

夫の伊右衛門には、構想力はない。律義いっぽうで売った官僚でしかないのである。伊右衛門だけではない。豊臣家の諸大名はいずれも戦場生き残りの荒大名であり、軍を指揮させてはどの時代の武将よりもすぐれているが、かといって、加藤清正、福島正則、藤堂高虎、池田輝政、浅野長政、黒田長政などに天下を料理できるほどの構想力はあるか。

ない。——所詮は、大名にしかなれぬ、それがせいいっぱいの男どもであった。

家康はどうか。

信長の死後、秀吉と敵対していたころ、しきりと東海、信州、甲州方面を切りとって自家の勢力をのばしていたようだが、性、慎重に過ぎ、足もとを見すぎ、ばくちをするにしても自分の持ち金のせいぜい一割ぐらいしか張らない、という現実密着の性格をもちすぎている。

飛躍がない。

ない、というのは、創造力にとぼしいということである。しょせんは、家康は既成の天下を継承はできても独力で天下を創作することはむりな器であった。

かといって、豊臣家のならび大名どもからみれば、家康は群をぬいている。秀吉にはるかに及ばぬにしても。

(やはり、次代は家康殿なのだ)

と、千代はおもう。

千代は、沿道に植えられた桜並木の下を、侍女ひとり連れて歩いていた。

天は、晴れている。

このところ、長雨つづきで今日の天候があやぶまれていたのだが、この当日になって、雨降らず風吹かず、天地はおだやかで、絶好の花見日和(びより)であった。

醍醐は、上醍醐と下醍醐にわかれ、その範囲は五十丁四方、山だけで二十三。そのなかにびっしりと桜樹を植え、山桜は八分咲きで里桜は九分咲きという景色であった。

松の緑のなかに、紅霞(こうか)がたなびき、花に埋もれて、殿舎、堂塔、茶屋などが点在している。

伏見から下醍醐までの街道は、両わきに竹矢来が結ばれ、旗本衆が武装して警固していた。

その矢来垣の沿道を、秀吉の家族が乗った輿(こし)の行列がゆく。徒歩の千代など小大名の妻女は、いわば陪観ということだからそのはるか後方をゆくわけである。

女性たちの行列の順をいうと、

まず、正室である従一位北政所が先頭であった。その輿には、彼女付の大名である小出播磨守(はりまのかみ)、

田中兵部大輔がつく。

つぎが、当時「西ノ丸様」とよばれていた淀殿であった。淀殿は、一時はすねていたが結局、出てきたのである。彼女にも、木下周防守、石河掃部頭といった大名が輿に従っている。

あと、三人の側室がゆく。

その行装は、花よりも美しい。

下醍醐から上醍醐までは、自然、山坂になっている。

千代は、ふと通りかかった三宝院御殿の門前で、このあたりの警備を受けもっているのが夫の家来であることを知り、

（ちょうどいい）

と、物頭（隊長）の福岡市右衛門の前に歩みよった。

「市右衛門、ご苦労でありますな」

「はっ」

市右衛門は、思いもよらず千代があらわれたのでうろたえてしまった。

「弓の折れをもっていますね」

「これにて、者共の下知（指揮）をつかまつります」

「お花見に武骨なこと」

千代は笑い、いっそ私に貸してたもれ、山坂をゆく杖にいたします、といった。

「しかし御台所さま、お女性がおもちあそばせば、武骨どころか、男勝りなどとそしられまするぞ」

この時代の武士は遠慮がない。

「それでは、こうします」

と、千代はかつぎのはしの赤い地を、懐剣をもって裂き、さりげなく弓の折れに結びつけた。ちょうど、リボンのようになった。

もともと弓には、黄、黒のつるがだんだらに巻いてあったから、赤いリボンをつけることによって、これが弓の折れかと思うほど、ひどく華やかなものになった。

武士たちはみな、微笑している。山内家の武士たちはみな千代にあふれるような好意をもち、伊右衛門よりもむしろ、この美しくて聡明な御台所さまにあこがれと随順の気持をもっていた。

千代は、杖をひいて門前を離れた。

ほどなく路傍に、

「一ノ茶屋」

という結構な建物がある。

秀吉近侍の大名で益田少将がこの花見のために善美をつくしてつくったもので、少将みずから亭主となり、酒、茶、菓子、料理などを用意している。

「ほほう、対馬守どのの御内儀、うつくしい杖をおもちでありますな」

少将が、奥から声をかけた。

渓流に、そり橋がかかっている。千代は橋を渡った。坂は急にけわしくなり、山はしだいに深くなってゆく。

「疲れた」

とおもうところに、二ノ茶屋がある。

大津城主新庄駿河守が亭主である。ちかごろ隠居をして頭をまるめ、雑斎と号して茶に凝っている。

「まあ、結構な」

千代は、茶屋のたたずまいに感心した。茶屋の前に、松と杉と椎の三本だけを植え、横の岩淵に水をたたえ、鯉や鮒がはなたれているだけの簡素なものである。茶とは、一面、感覚の競技なのである。坂をのぼる者がこのあたりで汗ばむと思い、わざとすがすがしい工夫をしたものであろう。

つぎは、三ノ茶屋。

南の破風口に台子を置き、つなぎ馬の絵をかかげている。

そこから四ノ茶屋までは十五丁の山坂があり、さらに、五ノ茶屋、六ノ茶屋とつづき、それぞれ茶好きの大名が亭主になって工夫をこらし、数寄をほこっている。

展覧会といっていい。

それぞれの茶好きの大名が、自分の人生観照、自然観照の深さを、目で見せる形できそっているのである。

そういう茶屋が、八つあった。

（太閤さまとは、なんとおもしろい趣向を考えだすひとだろう）

やはり、この桃山時代という芸術はんらんの時代の主宰者たるに、秀吉はふさわしい人物だとおもった。

頂上近く、柴の庵がある。

その横に階段橋がかかっており、のぼってゆくと、大きな茶屋がある。

茶屋は、路上にむかって大きく棚をはり出していて、そこに、物品を売っていた。模擬店だから、むろん無料である。

千代が、その見世台をのぞくと、雛人形や、張り子の虎、くし、針、畳紙、絹糸、麻糸、汗ふき、うちわ、播磨紙、杉原紙、美濃紙などがならべられていて、いかにも女子供のよろこびそうな品物ばかりである。

その隣りの茶屋の軒端では、やきもち、せいろう、あぶりもちなどを焼き売り、蒸し売りしていて、女官が茶屋女になり、

「これを召せ、これを召せ」

とよびこんでいた。

「腰をおろしましょうか」

と千代は侍女にそう言い緋もうせんを敷いた台にすわった。

前が谷である。見はらしがいい。

右手に小道があり、むこうの桜林にまでのびていた。
桜林のなかに、御殿がある。
林のなかに、秀吉もいた。
北政所、淀殿、その他盛装の婦人だけで百人はいる様子であった。
それが、ただひとりの幼童を中心に笑いさざめいていた。
幼童は、駈けたり、笑ったり、ときには手をたたいて踊ったりしていた。
秀頼である。
数え年六歳ながら、すでに中将の位にあり侍女たちから、
「中将様」
とよばれていた。
「ほんとうに、お楽しそう」
と、千代は、串二本に刺したあぶりもちを口に運びながら、いった。
豊臣家のだんらんである。こう、遠くからながめていても、溜め息が出そうなほどに楽しそうだった。
「中将様は、お可愛うございますこと」
と、千代の侍女が、声をつまらせた。
「どうしたの」
千代は、おどろいて侍女の顔をみた。涙ぐんでいるのである。

「あまりに、お楽しそうで」
だからつい、と侍女は申しわけなさそうに泣き笑いした。なんといっても、時代の中心的な家族なのである。その美しいだんらんを見ていると、あふれてくる好意に胸がいっぱいになり、つい涙をもよおすのであろう。
千代も、感動していた。
彼女もまた涙のにじむ思いがしたが、彼女の涙は侍女よりも複雑だった。
（いつまで、この団欒（だんらん）がつづくのか）
という思いが、去来する。
秀吉の老衰ぶりは、遠目にもわかるのである。その生命が終りを告げるのも、決して遠いさきではあるまい。
——死後、あの中将様はどうなるか。
秀吉はかつて、天下征服ののち、故主信長の遺児の一人を死に至らしめ、他の数人を自分の家来の位置へおとした。
その先例がある。
秀吉没後、その天下を継ぐ者は、あの家族をいまの幸福のままには置いておかないであろう。
千代は、そう思った。
彼女の不吉の予感があたって、この花見は秀吉の最後のものになった。この秋、かれの肉体がほろぶ。

が、このとき千代はそこまで予見していたわけではない。

花曇りの日がつづいている。

醍醐の花見は、ぶじ済んだが、その催しが古今にないほど豪華だっただけに、おわったあと、哀愁というか、妙にほろさびしさがのこった。

(わたくしだけのことかしら)

千代は、自分の感受性に首をかしげた。

夫の伊右衛門にそういっても、

「そうかねえ」

と、一向にわかってくれない。

「太閤さまが」

と千代はいいかけたが、さすがに夫婦仲でも、そのつぎの言葉は、口に出しかねた。

「なにかね」

「いいえ、なんでもございませぬ」

千代は、憂鬱な顔をしている。

太閤が、この世の騒ぎおさめということであれほどの大花見をやったとしかおもえないのである。

その死が、近いような予感がする。

「ちかごろ、太閤さまはいかがなされております」

「上様か」

伊右衛門は、日常の表情でいった。

「至極、お元気さ。ひところ、お体のぐあいがわるくてひとびとがさわいだが、またまたよくなられたようだ」

秀吉は、いま伏見にいない。

なにを思い立ったのか、京へゆき、京都屋敷に滞留し、一昨日は、にわかに、

――江戸殿の屋敷にあそびにゆく。

と申し触れして、近くの家康の屋敷にゆき、ふたりで終日、碁を打った。

めずらしいことである。なにを思って家康の屋敷へゆきたかったのであろう。

秀吉は玄関に入るなり、

「むしょうに、内府殿(家康)のお顔が見とうなってな」

といったという。碁はどうじゃ、と林泉のみえる部屋で碁の支度をさせたが、秀吉はべつに碁がすきでもなく、強くもない。家康とて同様である。しかし、話題もなく長居をするには、碁ほどの便利なものはないであろう。

(お言葉どおり、太閤さまは、ただお顔が見たくてゆかれたのだ)

千代はおもった。女なのだ。そういう予感の機能は男よりもつよい。ことに千代は、わかいころから、巫女(みこ)のような予知感覚があって、ときどき自分でもこまってしまうことがある。

（人は死ぬまえに、旧知の家々をまわるという。それではないだろうか）

家康を訪問したのが、四月十五日。

三日後の十八日には、こんどは秀頼をつれて参内した。

時の天子後陽成帝は、学問好きで性格も純なひとだった。秀吉を敬愛し、ほとんど叔父に接するような気持でいたひとである。

秀吉もまた、この天子を深く愛した。かれの参内はつねに儀礼的なものでなく、

「当今（今上帝）のお声を久しくきかぬと、むしょうにさびしい」

というほどであった。おたがいに人間的にむつみあってしかも双方の長所を敬愛しきっているという点で、古今にめずらしい君臣といっていいだろう。

余談だが、のちの家康にはそういうところがなく、京都朝廷を利用するだけして、あとは徹底的な弾圧策をとった。

人間味の相違といっていい。

「どうしたのかしら」

千代は、小くびをかしげている。

「なんだ」

「いまに、大乱がおこりそうな気がするのです」

その後、何事もなく日がすぎてゆく。

いや、事といえば、伊右衛門の小びんに白髪を発見して、おもわず騒いでしまったぐらいであろう。

このときは、本当におどろいた。

もともと伊右衛門は、いい髪をもっていておそらく年をとってもそういう変化はないであろうと思っていた。

すでに初老である。

「白髪ぐらいはできるさ」

伊右衛門は迷惑そうにいった。迷惑がりながらも千代をみて、

（こいつはいつまでも若い）

と、内心感心していた。皮膚のつやといい唇のつややかさといい、千代は二十八、九だといっても、結構通るであろう。

「わたくしども、古びましたねえ」

「そうかな」

伊右衛門は、物憂そうにいった。

「でも、わたくしなど、娘のころは、白髪のあるような亭主殿を想像もしませんでした」

「ばかをいえ、自分だけは古びぬと思っている。いい気なやつだ」

「でも」

と千代は伊右衛門のそばへ寄り、その髪をたんねんに調べてみた。

「おどろいた。一本や二本ではありませんよ。表のほうは黒いんですけど、なかのほうにずいぶん白いのがありますよ」

「千代、ほとの毛はまだ黒いわ」

伊右衛門は意外なことをいう。しかも、謹直そのものの顔をして、である。

「ほとの毛？」

思わずいって、千代は真っ赤になった。真っ赤になったついでに、うんとふざけてやった。

「そんなことはございませんでしょう。おぐしでさえ、こんなに白うございますもの。きっと、そちら様は」

と、千代は伊右衛門の帯の下のほうをみて、

「真っ白。――」

「ばかめ。そなたは知っているではないか」

「いえいえ」

千代も、ちょっとあわてた。

「存じませぬ」

知らぬのはむりもない。いつも、千代と伊右衛門のそういう場面のあるときは、灯火の下か、暗闇の時である。

見たい。――

千代はその思いつきに、手を打ってよろこんでしまった。この白昼、明り障子にかっと西日のさしているときに、まじまじとみてやろうと思った。

「さあ、帯をお解きあそばして」

「おいおい」

伊右衛門は、当惑してしまった。

「勘弁してくれ」

「いけませぬ。はい、ちゃんとお解きあそばすのです」

そういいながら千代は、伊右衛門の腰に手を触れて、くるくると解いてしまった。

むりやりに小袖をぬがせ、下にかさねたものをぬがせ、とうとう下帯一つのまるはだかにしてしまった。

伊右衛門は閉口して部屋中逃げまわったが、千代は笑い声をたてながら、からんで行ってどうしても離さない。

とうとう、下帯に手をかけ、くるくると解いた。

丸裸かになった。

「まあ、黒い」

ほれぼれと、伊右衛門のたくましい裸身をみている。

なるほど、そこには白髪はなかった。

「どうだ、いつわりはあるまい」

伊右衛門は、大まじめな顔である。

謹直といえば、伊右衛門には逸話がある。

かれは、若年のころから懸命に戦場をすごしてきたが、かといってさしたる武功もなく、経綸の才もなく、ただふしぎの運で大名になれたことを、天に感謝している。

「そこが一豊殿のよいところだ」

と、千代もひそかにおもっている。伊右衛門は、自分の能力によるものだ、などとはすこしも考えていない。

過ぎてきたことどもを思うと、伊右衛門よりもはるかに戦功があり、兵の駈けひきに長けているのが、むかしの朋輩のなかにいくらでもいる。

それらは、大名にもなれず、大名の家来として世を送っている。伊右衛門は自分の幸運を、

(千代のおかげだ)

ともおもっているし、

(天恩)

とも思っていた。しんから謙虚な男なのである。だから、かれは伏見城下などで、他家に仕えている昔の朋輩に出遭うと、大名の身ながらかならず馬から降り、鄭重にあいさつした。

相手は陪臣の身分だから、大名に下馬の礼をされてはろうばいしてしまう。

「一城のあるじになっても、昔とかわらないひとだ」

と、ふるい朋輩たちは感心したが、しかしそれが毎度のことなのでみな閉口してしまい、城下

の街路で伊右衛門の行列がむこうからくると、辻々にかくれてしまうようになった。

「あのひとには、かなわぬ」

という評判を、千代もきく。

謹直な顔で素っぱだかになっている伊右衛門をみて、千代は涙がこぼれるほどおかしかったが、おかしさのついでに、ふとそんなことを思いだしたのである。

「よくわかりました。さあ、早く下帯などをおつけ遊ばして」

と、伊右衛門に前を締めさせ、衣服を着せた。

衣服を着せながら、例の路上のあいさつのことをいってからかうと、

「あたり前ではないか」

と笑わない。

「それァあたりまえでございますけど、世間では奇異に思うのでございましょう。だから辻々に逃げかくれなさるのでございます」

「そうか、みな隠れているのか」

「あなた様に下馬のあいさつをされるのがいやさに、お姿を見ると、侍屋敷の門わきに避けたり、町家の土間に逃げこんだり、大変だそうでございますよ」

「大げさなことをいうな」

「本当」

千代は、くっくっ笑っている。伊右衛門を人が怖れているといえば、そういうことしかない。

「千代、よくないことかな」
伊右衛門は大まじめにいった。
「やはり、奇行でございましょうね」
「善悪をきいている」
「そりゃ、わるいことではありませんけど」
「けど、なんだ」
「もし太閤さまが、かつて織田家で同僚だった細川幽斎さまや、江戸内府様にいちいち下馬なされたら、世の秩序というものがもたないではありませんか」
「千代は反対か」
「いいえ、好き。そういう一豊さまのおかしさが。――」
「なにをいっている」
伊右衛門は、自分をからかいはじめるときりのない千代をもてあましてしまった。
「冗談もいいかげんにすることだ」
「はいはい。それよりも早く帯をお締めあそばして」

千代夫婦の養子国松は、このところ、京、伏見にはいない。
遠州掛川城にいる。
この城は、伊右衛門の実弟修理亮(しゅりのすけ)康豊がまもっていて、国松はその実子なのである。やはり、

両親のもとで育ったほうがいい、と千代がおもったからだ。
「国松どのには気の毒ですけれど」
と、晩春のある日、千代はふといった。
「やはり、一緒に住んでいないと、情がうつらないものでございますね」
「いや、もっともだ」
と、伊右衛門はいった。かれは物事に律義なくせに忘れっぽくて、国松の顔がおもいだせないとまでいうのである。
「あきれた方」
「それはむろん、会えばわかる」
「あたりまえではありませんか。会っても国松どのかどうかわからないようでは、父親ではありませぬ」
「千代」
急に、伊右衛門はかたちをあらためた。
「そなた、もう、子供は生めぬか」
「存じませぬ」
千代は、この話題になると、ひどく悲しそうな顔をする。
「天は二物を与えぬとはよく申したものだ。そなたの腹からうまれた子なら、あるいは絶世の智将がうまれるかもしれぬのに、惜しいことだ」

「申しわけありませぬ」
「待て待て、べつにそなたがわるいというわけではない。わしに子だねがないのかもしれぬし、あるいは天が、われら夫妻に子を授けることを、好まぬのかもしれぬ」
「試してごらんになれば？」
といったことは、千代がこのところ考えぬいてきたことだ。
「なにを試す」
「一豊さまにお子だねがあるのか、ないのかを。――わたくし以外の女性(にょしょう)に」
「おいおい」
謹直な伊右衛門のほうがあわててしまった。
「つまらぬことを言うものではない。そなたは、婚礼の夜のことをわすれたか」
「どんな？」
「そなたは、申した。誓って一国一城のあるじにして差しあげるよう努めます、と。そのかわり、わたくし一人を大事に、とお誓いくださいませぬか、とそなたはたしかに申したではないか」
伊右衛門は、気色ばんでいった。
妙な男である。このころの大名といえば荒淫なものだ。荒淫でなくても、後継者をつくるために、側室を多く置くのが常例になっている。
伊右衛門には、ない。だから、
――風変りな対馬守どの。

という評判は、諸侯はおろか、伏見城の奥女中たちでも知らぬ者はない。
「側室を置け、というのか」
「はい」
と、千代はいさぎよく答えた。このころ、子がなくて夫が側室を置かぬ場合、妻がすすめるのがふつうになっている。
「なにしろ、千代殿が悋気(りんき)病みで」
とは、殿中や城下でのうわさだった。千代も、自分がどういわれているかを、うすうす知っている。
「一国一城のあるじにする、という千代の側の誓いはこの後もまもりますけど、一豊さまのほうの誓いは、解放してさしあげます」
「千代、本気でいっているのか」
「むろん、本気でございますわ」
と、千代は、つとめてあかるくいったが、内心はつらかった。いくら当時の社会の風習とはいえ、人情などは、万古かわるものではない。
が、伊右衛門はにがい顔で、
「要らん」といった。「他の女などは。――千代、このことは二度というな」
「ご興味がないのでございますか」

「千代以外の女に、か」
ふと、むかしの小りんの顔をおもいだしたが、伊右衛門はあわてて打ち消した。
「ない」
と、断乎という。
「一豊さま」
千代は、ひらきなおってみせた。
「それでも男でございますか。男とは、あたらしい婦人をもとめるものですし、そういう例をたくさん知っています。現に」
山内家の家老、上士などで、女中に手をつけたり側室を置いていたりする者が多い。そうでないのは、殿様の伊右衛門ぐらいのものだ。
「男とは、猟師型と農夫型とがある、と申します。大むかし、国土がひらけなかったころ、男どもは、猪や兎を追い、できるだけ多くの獲物をとるために身を粉にして山野をかけまわり、智恵をしぼってさまざまのわなを考案し、そのあくない新しいものへの獲得欲のために世がここまですすんできたと申します。農夫型の男もおなじです。大むかし、百姓は一枚でも田を多くつくるために林を伐りひらき、またあたらしい作物を雑草の中からみつけてはそれを苦心して育て、ここまで富んだ国土ができました。男の進取欲のあらわれだと思います」
「それが、女とどう結びつく」
「その欲望が、猪や田だけにとどまるはずがございませんでしょう。あたらしい女をみれば、そ

れを得ようとするのが、男を動かし駆りたてている本然な欲望だと思います」
「つぎつぎに女をあさる者が、男らしい男だというのか」
「そう極端におっしゃるものではありませんけど、ある程度、そうだと思います」
「されば千代」
伊右衛門は、怒気を発していた。
「おれが男らしくない男というのか」
「いえ、一豊さまは」
「だまれ、千代」
伊右衛門は、薄い眉を吊りあげた。
「わしは若年のころから野戦攻城に従い、数知れぬ戦場を踏み、つねに槍をもって敵中に駈け入り、あるいは敵城の石垣をかけのぼり、あるいは強敵と組み打ちし、一度も臆病のそしりを受けたことがないぞ」
なるほど、その閲歴は千軍万馬といっていい。
「どうだ、千代、それでもこのおれを男らしからぬと申すか」
というなり、伊右衛門は手をあげ、
びしっ
と千代のほおを打った。
あっ、と千代は横倒しに倒れてしまった。

「千代、もう一度申してみろ、女蕩し（おんなたら）どもが男らしくて、戦場往来のわしが男らしからぬというか」

千代の胸ぐらをつかみ、ずるずると引きよせて、ひざもとでねじ伏せた。

「か、かんにん」

千代は、泣きだしてしまった。

「あやまります。かんにんしてくださりませ」

「訊いているのだ、返事をせい」

「千代は、山内家の嫡子（ちゃくし）がほしいのです。ほしさのあまり申しただけのことでございます」

「馬鹿」

伊右衛門は、またコブシをあげた。

千代は、結婚以来、伊右衛門に打たれたことなど、これがはじめてである。

それも、ばかげている。

他の女と寝よ、もしくは側室をつくれ、とすすめて、それがために打たれたのだ、妻の千代にとって引きあわないこと、おびただしいではないか。

（でも、——）

と千代はおもった。うれしかった。伊右衛門がそれほどまで、自分を二なき者とおもってくれていると思えば。——

（しかし、山内家の家系はどうなるのであろうか）

掛川にいる養子国松にゆずるのもよいが、できれば夫の血統を残してやりたかった。それが、山内家の先祖への供養であり、後々までの家系への千代のつとめであり、その義務をおもえば、千代はある種の感動をおぼえる。

この感動は、この時代にうまれた千代でしかわからない。数百年後の読者には、その義務、風習は理解できても、義務への感動までは理解できないであろう。

（あたしは）

と千代はおもう。

（やろうと思えば、やりとげなければ気のすまない女だ）

千代は、自分の腰元を物色した。

夫のための側室にするのである。余談だが、この時代は、いわゆるお手がついてもいきなり側室の地位にはつけない。

子がうまれなければ、単に女奉公人であった。単なる女奉公人にしろ側室にしろ、それはあくまでも「家来」の身分で、正妻の指揮をうける存在である。

当の伊右衛門がいやだといっているこのばあい、とにかく、その特殊な「家来」を、千代が選ばねばならぬ義務があった。

お里

という腰元がいた。御徒士（おかち）の山田四郎五郎という者の娘で、昨年奉公にあがり、千代の腰元に

なっている。

当年、十八。

男好きのする顔立ちをもち、文字にもあかるく、頭もわるくなかった。健康でもある。

諸事考えて、いい子をうむであろう、という条件が、ほぼととのっていた。

(お里がいい)

千代は、そう思い、その翌夜、お里に、

「殿様のような方が」

と気をひいてみた。

「御徒士だとして、年もお里ところあいとすれば、お里は嫁(い)きますか」

「考えるだに、もったいのうございます」

とお里は、遠慮ぶかく返事をしぶったが、千代が冗談にまぎらわせつつ問いつめるので、とうとう、

「もしそうなら、里はうれしく存じます」

と、白状した。むろん、一時の戯れ言葉のやりとりで、本心がどうかというところまではわからない。

とまれ、伊右衛門という「異性」に対し、悪感情というほどのものはもっていないことだけは、たしかめることができた。

あとは、工作である。

千代は伊右衛門に対し急に、

「京都の寺々の物詣をしたい」

といいだした。

寺々といっても多い。それらを丹念にまわりたいというのである。

そのためには、京都屋敷に身を移さねばならない。

「ひと月でよろしうございます。ぜひ」

と、たのんだ。

伊右衛門はなにげなく、よかろう、といった。

ちょっと余談を。

これと似た話を、筆者は思いだした。

幕末、伊右衛門の家系の土佐山内家は、薩州、長州の両藩とならんで薩長土、と併称され、幾多の勤王の志士を出し、維新回天の原動力になった。

幕末の土佐藩勤王党の指導者は、もっとも高名なのが坂本竜馬である。ついで、藩内活動の領袖(りょうしゅう)だったのが武市(たけち)半平太であった。

謹厳な人物で、武市もまた妻の富子を愛し、子がないにもかかわらず、女を置くということがなかった。

そのため友人や門下生が、武市家の絶えるのを心配した。子がなければ、大名、家士をとわず、

家禄召しあげが、当時の絶対的な法律である。

そこで、一同、武市に蓄妾をすすめたところ、笑ってうなずかない。しつこくすすめると、

「二度とくだらぬことをいうな」

と、叱りつけた。この点、藩祖の山内伊右衛門一豊と似ている。

そこで門生たちは、富子を説き伏せ、藩祖夫人千代がやったのとおなじ手を、つかった。その成否は、千代の場合とおなじだったから、ここで先ばしっては、いわない。

さて、千代。――

京都屋敷にひきうつってしまった。

移る前にお里には、

「そなたさえおいやでなかったならば、ぜひぜひ、おたねを頂戴しますように」

と言いふくめておいた。

お里は、それが、山内家につくす最大の奉公だと思った。千代は、彼女を、伊右衛門の寝所の夜具をととのえる役目にした。その他、こまごましたことも、言いふくめてある。

この役目について、お里はどうおもったであろう。

「奉公」

とは言い条、そこは娘である。その夜が来るまでのあいだに、めだって痩せてしまった。

が、痩せたがために、かえってこのやや年増（としま）のむすめに、色気がにじみ出た。

ひとえまぶたで、眼の切れが長く、唇がやや薄かった。ほおに愛嬌な程度のそばかすがあり、

全体に薄手な感じの顔だが、まず美人といえる。

お里が、寝所の廊下で手をつき、

「里と申しまする。お着更え（きか）をお手伝いさせていただきまする」

と平伏したとき、伊右衛門は、ああそうか、かわったのか、といっただけで、相変らずのっそりとしていた。

お里は進み出、きびきびと立ちはたらき、伊右衛門の身のまわりをととのえ、夜の支度をした。

が、去らない。

すわっている。

「もうよいぞ」

と、伊右衛門がいったが、はい、とうなだれるばかりで動かない。

「どうしたのだ」

「御台所さまが、終夜、おつき申せ、とおおせられました」

「いや宿直（とのい）には、武者どもがいる。そなたは薙刀（なぎなた）でもできるというのか」

「……」

「よいわ」

伊右衛門はやさしく言ってやった。

「女の薙刀などでは、万が一、曲者（くせもの）侵入のときの役に立つまい。さがって、やすめ」

「さがれと申されたときには、死ね、と御台所さまが、おおせられましてござりまする」

死ね、とはむろん、千代の冗談であった。が、伊右衛門は真にうけ、

「えっ」

とおどろいてしまった。

伊右衛門とて、木石ではない。

ふとんの敷かれた一ツ部屋で、若い娘と二人きりでいるというのは、気づまりなことだ。しかも、娘の様子は、ただごとではない。

「奥は、たしかにそう申したか」

「はい。もし退れ、とおおせあれば、しずかに部屋にひきとって自害せよと」

「ばかな奥だ」

と、伊右衛門はこまってしまった。

いくらこの男でも、事ここまでくれば千代のこんたんはわかってしまっていた。

(この娘と寝よ、というのか)

しげしげと、娘をみた。なるほど、いかにも男の食欲をそそるような娘で、引きよせて抱きしめればあわあわと溶けてしまいそうな風情がある。

「お里」

と、伊右衛門はいった。

「奥がどう申したか、くわしく、いちぶしじゅう、申してみよ」

「あの」

はずかしいらしい。

「主命である、申してみよ」

「あの、奥方さまは、とのさまのお胤を頂戴するようにと申されましてござりまする」

「お胤をのう。……」

と、伊右衛門は、天井をあおいだ。千代という女房には、ほとほと降参するおもいである。お胤とやらをあたえるべき女まで女房に世話されるというのはどういうことであろう。

「お里よ、わしはな、むかしから自家の奉公人には手をつけぬことにしている」

「では、他のおなごにお手をおつけあそばしますので」

と、お里も伊右衛門のやさしさについ狎れたのか、はきはきものをいうようになった。もともと、その見かけのたおやかさとはちがって活潑なたちの娘なのかもしれない。

「いや、それもせぬ。わしはな、千代だけをおなごと思うて今日まできた。いまさらべつのおなごの肌などを見るのは、こわい」

「こわい、とは奥方さまに対してでございますか。奥方さまは、いまも申しあげましたとおり、お伽をし奉れ、とおおせありましたのでございますけど」

「こわい、というのはな」

と伊右衛門は、さとすようにいった。

「おなご一般に対してであるわい」

「と申されますのは？」
「たとえば、お里もこわい」
「まあ」
　お里はおどろいてしまった。
「わたくしが、そのような。——あの、里のどこがこわいのでございましょう」
「肌がよ」
　伊右衛門はかわっているといえば、かわっている。なじんだ体でなければ、たとえ人なみに欲情してもおとことしての体がそれにともなわない。
　未知なものへの恐怖心といっていい。好色な男は、未知な肌への冒険心がつよすぎるたちであるとすれば、伊右衛門はその逆であった。めずらしい男といえる。
「お里よ、それより腰をもめ」
　と、伊右衛門はいった。若い女に体を接したいというその程度の好色さは、健康な男子として当然かれももっている。
「もめ」
　という程度で接しようとした。
「はい」
　とお里は平伏した。伊右衛門の命令をまっている。
「かまわぬ、近くよれ」

　と、伊右衛門は命じ、ごろりと横になった。
　お里は、腰をもみはじめた。
　おどろいたことに、お里は按摩術をこころえている。伊右衛門はまぶたをひらき、
「お里、もみ療治をいつ学んだ」
「学びませぬ。かようなことをさせていただきますこと、いまがはじめてでございます」
「おかしいな」
　急所を心得ていて、いい気持なのだ。
「しかし、灸は学びました。灸のつぼともみ療治のつぼとはおなじだとききますゆえ、そのとおりにしております」
「なるほど」
　うとうととねむくなるほどの気持よさである。お里の指は、こころよく腰のまわりの鬱血を散らせてゆく。
「お里は、いくつになる」
「十八になりまする」
「されば天正九年のうまれだな。ちょうど太閤殿下が信長公のおさしずで中国攻めをなされ、その拠点として姫路城を築かれた年だな。わしもその軍に従い、鳥取城攻めに加わっていた」
「はい」

年若いお里には、遠い国のはなしでもきくように、実感がない。

「播州攻めのことなど、ついこのあいだのことに思えるが、はやいものだ。その年にうまれたそなたが、もうこんな娘になったのか」

「人の世は、早うございますな」

と、お里は娘らしからぬ詠嘆をもらした。この時代、ひとは現世よりも浄土の荘厳安楽をあこがれる気持がつよく、そういう派の宗旨が多くはびこって、美的厭世観というようなものが、老若をとわず、考え方の基調になっている。

「信長公が、京の本能寺で明智光秀に害され給うたのは、そちの二歳のときだ。すかさず秀吉公は中国陣からひきかえし、光秀を山城の山崎で討ちとられた。あのときのさわぎ、覚えているか」

「覚えませぬ」

「なるほど当然なことだ。そちは母の乳房にすがりついて、片ことをいっている」

当時、お里の父は四国の伊予にあり、鎌倉以来の名家といわれる河野氏の家臣であった。なにぶん中央から遠く、お里がたとえそのころ成人していたとしても本能寺ノ変や、山崎の合戦などの報は、数日を経てうっすらとつたわる程度の地理的環境であった。

「伊予は、肌のなめらかな美人が多いという。なるほどそちは、その血をうけているようだ」

「いいえ」

と、お里ははじらいながら、

「旧主の河野家が滅亡しましてから父母が伊予から離れ、上方へ参りましたゆえ、わたくしは父祖の故国を知りませぬ。殿様は、伊予をご存じでございますか」

「残念だが、知らぬ。しかし人の情が豊かで風光もよく、とくに道後とやらいう地には玉を溶かしたような湯が湧き出づるときいている」

「ようごぞんじでありますな」

「なんの、それくらいのことは天下周知のことだわ」

「里は、物心もつかぬころにみたその伊予の山河が、ときどき夢に出てまいります」

「夢にか」

伊右衛門はふと別なことをいった。

「そちは、よほどやさしい心映えのおなごらしい」

「あの」

と、お里はだんだん遠慮がとれてきた。この時代の主従というのは、徳川時代のように非人間的な階級制度で疎隔されたようなものでなく、もっと気さくなものだ。

「なにか、頼みがあるのか」

「あの、伊予のことでございます」

「とは？」

「もっと、教えてくださりませぬか」

「お里は、ばかじゃな。わしは伊予へは参ったことがない、と申しておるのに」

と、伊右衛門は笑いだしてしまった。お里は物心つかぬうちに伊予を離れ、見覚えもせぬはずだのに、その遠い山河をときどき夢にみるという。その夢の輪郭を、現実のはなしでくっきりさせたいのであろう。

「でも、殿様ならば、なんでもご存じだと存じまする」

と、お里は本気でそう思い、伊右衛門を神様のように思っているらしい。

伊右衛門は、また笑った。お里の無邪気さが可愛くなってきたのである。

知識としては、伊予を多少知っている。この当時の武将としての教養第一課目というべきものは、諸国の自然地理、人文地理に通じているということであった。

「わしは、千代に源氏物語なる書物を読みきかせてもらったことがあるが、その空蟬の巻に、(伊予の湯桁もたどたどしかるまじう見ゆ)という言葉があったように記憶する。伊予の道後のあたりでは諸所ほうぼうに湯が湧き出ている。その湧き湯に湯桁というものをかけわたして、その板を踏み渡って湯に入る。そういうことまで王朝のころの宮女が知っていて文章のあやに用いていることをみれば、よほど都になじみのふかい湯であったらしい。その道後温泉の湯築谷というところに湯築城、一名道後城という城があってな、ここが神代以来の家系をほこる北伊予十郡の大御所河野氏の居城であった。河野氏の旧臣であるそちの父親も祖父もその祖も、この城内で住んでいたわけだ」

「はい」

お里は、目をかがやかせている。

城の規模は大きい。二重の堀をめぐらし、ながさ五百余間にわたる土居をきずき、本丸の高さは四十五間、東西に木戸口を設け、東の境は真言宗の名刹石手寺に至っていたという。

もともと河野氏ははるか遠くの、高縄城という要害にいたが、勢力が安定するとともに平野に出、攻防用ではなく、どちらかといえば居住用の殿舎もつくったわけである。

「河野氏というのは古来勇武の家でな、元寇のときに小舟の帆柱を倒して敵の楼船に攻めこんだ河野通有などを出しているが、なにぶん名家もながくつづきすぎると、血が薄くなり、野性の気をうしない、京の公卿のようなものになってしまう。城内には湯が出る。湯につかっているうちに、肌も白うなり、肉もやわらぎ、気はうせ、詩歌や管弦のみがうまくなる。そちの父の旧主河野伊予守通直などはそうであったろうな。そこへ、南方から蛮族が攻めのぼってきた」

「蛮族?」

「土佐の長曾我部元親よ。いまはこの伏見城下の長曾我部屋敷で老いているが、あの老人は、壮年のころは日本有数の英雄でな、命知らずの土佐兵をひきいて伊予を攻略した。ために、河野氏はほろびた」

その敗亡後、お里の父は諸国を流浪し、その後、この山内家につかえた。

「土佐に長曾我部元親などというおそるべき男さえ出なければ伊予の河野氏はほろびず、ほろびなければそちの父も牢人せずにすみ、自然わしの家にも仕えてはおらず、さらにはいまここでそなたが尾張うまれのわしの腰をもんでもおらぬ。人の世というものはおもしろいものだな」

話しているうちに、お里の手が、伊右衛門のものあたりに触れはじめた。ひどくくすぐったい。

「お里、そこはくすぐったいわ」
と、伊右衛門は閉口したが、お里はかまわずにどんどん揉む。そのうちなんとなく乙な気持になってきた。
「お里、もうそのあたりはよせ」
「痛うございますか」
「いや、なにやらおなごがほしうなるような気持がする」
といったが、お里はだまっている。手だけが動いている。やめようとしないのである。
普通の男なら、このあたりでお里を抱きすくめて組み敷くところだが、伊右衛門という男は、男としてばかなのかどうか。
「太閤殿下は」
と、不粋な話をもちだした。
「この国はじまって以来の偉業をとげられたが、その一つは太閤の天下平定によって天下の人があちこちに動いたことであろうな。――お里」
「はい」
「太古以来、尾張にいる者は尾張に、伊予にいる者は伊予にと、遠い父祖の代からその土地々々に住みつづけてきた。ところが、天下統一とともに大名の国替えもある、地士の他国への仕官もある、町人が移動して堺の者が大坂へ、京の者が伏見へ、博多の者が大坂へなどと動く、大名に

しても北は奥州の南部から、南は薩摩の島津までこの上方へやってくる。前古未曾有なことだ」
「はい」
お里は、仕方なくうなずく。
「そちも、そうだ。伊予生えぬきのそちが、この伏見で他国うまれの男の妻になって、入りまじりの子をうむ。これは太閤のお力じゃな」
「はい」
と、すこしもおもしろくない。
やがて伊右衛門はうとうとしはじめ、ついにねむ気にたえられなくなり、
「お里、もうわしはねむる。さがれ」
といって、コトリと眠った。あとは顔つきに似ぬ大いびきをかきはじめた。
お里は、やむなくさがった。
つぎの夜も、
「奥方さまのお言いつけでございますので」
と、寝所にはべる。伊右衛門はしかたなく腰をもませる。
なにごともない。
十日目の夜、伊右衛門は、
「お里、わしも男じゃな」
と、つぶやくようにいった。なるほど、娘のお里がみてもおそろしいばかりに、伊右衛門の男

のものが、尋常の様子でない。
「このぶんでは、そちに胤をくれてやらずば辛抱ができぬ」
「覚悟しておりまする」
「しかし、我慢するわ」
伊右衛門がそういうと、お里は悲しげに、
「殿様」
といった。「殿様は」と言葉をつづける。
「わたくしが、お気に召さぬのでございましょうか」
「そうではないわい。しかしわしは、うまれつき律義者でな、心が重い」
「はい？」
「それだけが、わしの取り柄だ。お里、しかし、体がわしの言うことをきかぬのう」
「思うがままになされませ。それが、禅家でいう放下ということではありませぬか」
と、お里はその方面の素養もあるらしい。
「そうだ。その禅語でおもいだした。あすわしの屋敷に、妙心寺の南化国師があそびに来てくださる。国師にうかがうゆえ、もし師がよしとお答えあらば、お里、わしに体を貸せ」
尋常すぎるような伊右衛門でも、色事の道のかたさについては一種の奇人であった。

伊右衛門は、禅に凝っている。

話は、ふるい。まだ長浜城主であったころ天正十三年の地震でよね姫をうしない、その数年後、屋敷の門のそばで捨て子をひろった。それを「拾」という幼名でそだて、やがて妙心寺の南化国師の弟子とした。以前にも触れたが、このひとはのちに湘南禅師として土佐第一の名刹五台山吸江寺の中興開山になり、ついに本山第一座にのぼり、紫衣勅許をゆるされるほどの僧になる。
その師の南化国師が、居士伊右衛門の禅門の師でもある。
その翌日、南化は屋敷にやってきた。その日は、恒例によって伊右衛門はみずから竹ぼうきをとって庭をはき清め、茶室に釜をかけ、露地に水を打って師の訪問を待った。
茶室で、禅話があったのち、伊右衛門は自分に実子のないこと、千代のこんたん、お里との一件を語り、
「さて、いかがしたものでございましょう」
と、問うた。
南化は、「阿呆らしい」と吐きすてて、「一人前の大人がひとに相談することか」とわらった。
「対州殿」
と、そんなよび方で、伊右衛門をよんだ。
「お手前は、お里がすきか」
「いや、好きと申すよりも」
「わかっておる。お里が好きなのでなく、おのれの男根が好きなのじゃ。世の男女の愛などは、つきつめれば相手がすきなのでなく、おのれのその部分が好きということになる」

「国師」

と、伊右衛門は当惑そうにいった。

「好きとかきらいとかを申しておるのではなく、千代以外の腹にて子を生むべきかどうかをきいております」

「詭弁をもてあそぶものではない。子を生むには、どうする。子をうむには、おなごとなにやらするではないか。好き、きらいが、そこに自然の情としてうまれてくるわ」

「されば、まず、好もしうござる」

「では、やりなされ」

と、南化はいう。

「とらわれることはない。わしは出家の身ゆえ、好もしいおなごを見てもなんともできぬが、おぬしは俗世間の人じゃ、遠慮は要るまい」

「しかし、国師」

「も、くそもあるか。対州殿、おぬしにはへのことふぐりがあるか」

「ござりまする」

「あるなら、それを使うだけでよい。わしに相談せねばならぬことではあるまい」

「なるほど」

と伊右衛門が感心したのをみて、南化は笑いだしてしまった。

「対州殿、つまらぬことに感心するものではない。おぬし、よくそれで、大名にまでなれたな」

その夜、お里が寝所に来た。

「さて、お里、これへ寝よ」

と、部屋の中央につっ立っていったから、お里のほうが、びっくりしてしまった。

「子だねをやるわ」

「あの殿様、もそっと、物やわらこう、申してくださるほうが、里はうれしうございます」

「灯を消せ」

異例なことだが、お里に、着ているものをぬがせ、さて抱きよせてから、

「千代」

と、よんだものである。千代のつもりで抱こうとした。

お里はさすがに奉公人ながらも興ざめてしまった。

数日たって、千代が京都屋敷からもどってきた。

夕方、下城してきて玄関に入ろうとする伊右衛門を、庭の植えこみからチラリとみて、

(おや)

とおもった。ひどく若々しい顔をしているのである。千代はさすがに胸がさわいだ。

(——さては)

ふっと思った。どうせこの一件は千代が仕組んだくわだてだし、このことについては嫉妬はい

っさいすまいとおさえてきた。

おさえられる女である、と誇りをもって自分を考えてきたし、事実、いまのいままでそうであった。

ところが、それがくずれた。すーと目のさきが暗くなったのは、血がさがったためであろう。同時に手足がしびれてきて、陽の中にいながら氷のようにひえてきた。

はじめての体験である。千代は庭の踏み石にしゃがみこんだ。

侍女がおどろいて駈けよってきて、

「いかがなされました」

と苔のうえに膝をついたが、千代は返事もできない。声が出ないのである。

「御台所さまっ」

と、侍女は金切り声をあげ、同時になかまをよんだ。

三、四人の侍女が、濡れ縁からあられもなく飛びおり飛びおりして、千代のもとに駈け寄った。千代は、からだじゅうの筋が硬化したように動けない。彼女らに微笑をあたえてやろうと思ったが、顔もあがらないのである。

「お医者を」

と、老女が命じた。侍女が走った。

さらに人数がきて、千代をだきかかえるようにして寝所に運んだ。

(はずかしい)

と千代はおもった。人いちばい、見栄坊なたちで、そういう自分の異常さを、たとえ侍女たちにでもみせるのはいやだった。

(こんなことは、かつてなかったのに)

とおもうと、自分へのくやしさに涙だけがぽろぽろとこぼれてくる。

医師がきた。

脈をみて、

(はて？)

とくびをひねった。脈搏はいたって正常である。熱をみたが、どうもない。

医師は、老女をよび、食事にはなにをめしあがられたか、ときいた。老女はしかるべく答えた。

医師は、

(わからぬ)

といった表情でまたくびをふった。

「おそれながら、うかがいまする。ご自分でどこがどう、とお思いになりまするか」

「いいえ、どこもわるくはありませぬ」

と、千代は、むりにいった。

「ただ、むしょうに手足がしびれて冷えるようですが、すぐなおると思います」

「冷えますると？」

医師が三たび首をひねった。……熱もないではないか。

医師はふと、なにかに思いあたり、うなずいた。いまでいうヒステリーだと気づいたのである。
（しかしこの御台所さまには、めずらしくその気（け）のないかただが）
と、山内家の典医だけに、その点は千代のことをよく知っている。
「ははあ、わかりました」
と、医師は鎮静剤を盛り、いやがる千代にむりやりにのませた。投薬しながら、医師もこの時代の男だから、主筋にもさほどの遠慮をしない。
「さては、殿とおいさかいをなされましたな」
と笑ったが、千代はあわててかぶりをふった。きょう京から帰ったばかりで伊右衛門とはまだ対面していない。喧嘩をするはずはないではありませんか、と言いくるめてやった。

その夜、千代が伊右衛門の部屋に入ってゆくと、この亭主は、さきほどの若やいだ印象とはまるでちがった顔つきになっていた。
変に、深刻な表情でいる。
「千代、心を決したぞ」
と宣言するようにいった。
千代はもう、それだけで胸がさわいでしまった。（……やはり、お里を側室にする、と宣言するのではないか）と。
「決心したとは、当家の世継ぎのことだ」

「はい」
事は重大である。武家の家で、それも大名の家で、後継者の問題というのは、最大の重大事といってよかった。
「わしの血筋は、わし一代で絶やす。千代も覚悟せよ」
「は？」
「やはり、遠州にいる養子国松の成人しだい、まえまえからの方針どおり、世継ぎにする」
「なぜそうあそばすのでございます」
ときいたのはその理由ではない。わざわざ宣言するその心理的理由を知りたいのである。
「既定方針どおりじゃ。この家は、そなたとわしとで築きあげてきた。それであるのに、わしが他の女に子をうませてそれに継がせるという気にはどうもなれぬ。いや、なれぬとわかった」
「どのように？」
「千代、そなたにはわるいが、里は抱いたわい。抱くだけは抱いたわい。しかし、かんじんな一事が、どうあってもうまく運ばぬ」
「？」
「習慣（ならい）とはおそろしいものじゃ。里は気だてのよいおなごじゃが、どうもその一カ所がそなたのとはちがう」
一カ所、とは、女人のそこのことであるらしい。なるほど、ひとによって、すがたなどはちがうであろう。

——ちがう。

とおもったとたんに、伊右衛門のいう一事が萎縮してしまったのである。

男には、女に対してふたつ型がある。

猟師型と農夫型である。猟師型は女色家といっていい。

たえず、未知なものにあこがれ、獲物を一つ獲ては、

(さらに他に大きなものが)

と思い、あこがれ、冒険心をかきたて、ふたたび山に分け入ってゆき、つぎつぎとあくことを知らない。女好きというのは、決して道徳感覚が欠如しているということではない。普通以上に、未知へのあこがれがつよく、冒険的行動欲がさかんだというだけのことである。

農夫型は、そうではない。

十年一日のごとくわが畑をたがやし、くわ先にあたるその土のきめ、においになじみきり、その定着的生活になんのうたがいも示さぬばかりか、もし土地を変えて他村へ移れといわれれば目の色をかえていやがる。

概して男には農夫型がすくないが、それでも男とは猟師型ばかりではない。

げんに、伊右衛門がそうである。お里のはたけの景色をみたとたん、

(こ、これはちがう)

とおどろき、大げさにいえば恐怖し、お里を可愛くおもいながらも、ついにその土のなかに足をふみ入れることができなかった。

「ちがう、とは、なぜちがうのです」

と、千代がふしぎがってきくと、伊右衛門もわれながらそのことがふしぎらしい。

「そなたのとちがうのだ」

頑固に基準がある。基準は、千代のそれなのである。千代のそれと「ちがう」とおもえば、もう、農夫的な頑固さでなんともいえぬ違和感を感じてしまう。

伊右衛門は一事が万事、そんな男であった。

五月五日は、端午の節句である。

この日は、諸大名が総登城して秀吉に賀意をのべるしきたりになっており、午前八時伏見城本丸の太鼓楼からひびきわたる太鼓とともに諸侯が順次登城してゆく。

この朝、伊右衛門も供をそろえて屋敷を出て行った。

ところが、夜になってもかえらない。

(異変か)

と千代が心配したほどであった。日没後、家老の乾彦作というのが駈けもどってきた。

「とりいそぎ御台所さまに拝謁しとうございます」

と、千代の老女にまで伝えた。

余談だが、この乾彦作というのは、千代と同郷の美濃のうまれで、池田郡東野村のひとである。先祖は土岐氏で、父作兵衛というのが織田信長に仕え、信長の越前金ケ崎の退却戦のときに戦死

した。伊右衛門が、首坂で朝倉義景の勇士三須崎勘右衛門を討ちとったあのときの合戦である。

その子彦作が千代の縁をたよって長浜時代に仕官し、なかなかの合戦上手なのでしだいに取りたてられて、いまでは千三百石の家老に列している。

いますこし余談をいうと、のちの関ヶ原ノ役のときに、陣中に「武田家の部将板垣駿河守信形（のぶかた）の遺児にて正信と申す者」と名乗る若者が乾彦作をたよってたずねてきた。

武田家はすでに亡んで無いが、その将板垣駿河守といえば天下に鳴りひびいた名将である。

遺児正信というのは気品もあり、牢人ながらも旧臣三十人をひきいていて、その申し立てるところ、まんざらうそではない。

こういうのを、

「陣借り」

という。合戦があると牢人が諸大名のもとにたよってきて、一時的にその陣を借りて合戦にくわわり、功名しだいで取りたてられるというわけである。

応接に出た乾彦作は、

「では、折りをみて殿に申しあげるゆえ、一時、拙者の縁者ということにして、乾姓を名乗らせ給え」

といって、自分の手にくわえた。その板垣正信が大いに戦功をたて、伊右衛門もそれを嘉（よみ）して取り立て、いきなり千二百石をあたえた。

ただし、そのまま乾姓になり、彦作の乾家をもって本家とした。この分家乾家は、後年事があ

って三百石に減らされ、正信からかぞえて十代目に幕末をむかえた。

幕末、この家から出たのが、乾退助であった。官軍の関東征伐のときに東山道鎮撫軍の総指揮になり、土佐、薩摩、長州の兵をひきいて中山道（なかせんどう）を進撃したが、京都出発にあたり、公卿の岩倉具視が、

「甲州城は幕府直轄の城で百万石を支配している。甲州人というのは叛骨つよく、容易に官軍に服すまい。ところが、きけばそちは乾姓であるが、先祖は甲州の武田信玄の遺臣板垣駿河守であるという。甲州人はいまなお信玄びいきだ。それを大いに甲州にむかって宣伝すれば、土地の者は親しみ、帰服するであろう」

と忠告したので、乾姓をすて、先祖の板垣姓にもどり、板垣退助と名乗った。連戦して甲州、関東の諸城をおとしついに奥州にいたり、会津若松城攻撃の総指揮官をつとめ、維新後は自由民権運動をしたり、伯爵をもらったりした。

右は余談。

とにかく、家老乾彦作が千代に報告したのは、

「太閤殿下、ご重体」

ということであった。

「ご重体？」

千代は、真青になった。ここ数年、秀吉は多病な老年期をおくっているが、それでもご重体と

いうことはなかった。

「それによって、殿はそのままお城にお詰めあそばし、今夜はお帰りなさらぬかと存じまする」

「そうですか」

ついに来たるべきものがきた、という感じがした。このさき、世はどうなってゆくのであろう。

言ううちに表通りがさわがしくなった。

大路小路を、人々が地響きをたてるような駈けかたで往き来している。

「ご病状は？」

「はい。しかとは存じませぬが、諸侯をご謁見ののち、おわって奥に入られんとなされたとき、お倒れあそばしたと申しまする」

「お脈は？」

医師はたれか、ときいたのだ。

「はい。曲直瀬法印どのがいそぎ登城して拝見なされましたが、なにぶんいつもの御持病の筋の病いとは事かわるようなご容体らしく、法印どのは、自分ひとりの脈では心もとのうございまする、と申し立てられ、京へ使いを走らせ、施薬院どの、竹田法印どの、通仙院どのが早駕籠にて伏見に参られる途中とかにうけたまわりまする」

「されば、あけがたにはご容体のすべてがわかりましょうな」

「はい、左様に存じまする」

といって乾彦作は退出しようとした。

「彦作どの、もうお寝みですか」

「いいえ、かようなときは変事のおこりやすいものでございます。お屋敷の門前、広場にかがり火を焚かせ、宿直の数をふやし、万一にそなえようと存じます」

「それはよく気がつきました」

といって、千代は寝所にひきとった。ひとりで香をたき、そのかおりを聞きながら、朝まで寝ないつもりであった。

夜が明けてすぐ、伊右衛門が下城してきたが、昨夜は詰め間で寝なかったせいか、それとも心痛のせいか、一夜でげっそりと頰の肉が落ちている。

「いかがでございました」

と千代がいうと、ふむ？　と目をあげ、すぐには答えない。

やがて、

「はじめ曲直瀬法印どのが薬を盛ってさしあげたが、いっこうに御容体がかわらず、夜半に到着した京の三医家とさらに合議して竹田法印どのが別の薬をさしあげたが、いよいよお悪い」

「それで」

千代は、体が小きざみにふるえはじめた。

単に、一人の老人の生命の危機だけではない。

天下の危機であった。豊臣家の後継者としては秀頼は幼童でありすぎる。世はこの天下の継承をめぐって、みだれるであろう。

「千代、太閤殿下に万一のことがあれば、また戦国の世が来るであろうか」
「わかりませぬな」
正直なところ、千代にはわからない。政治というものほど、さきを見ぬきにくいものはないのだ。
「第一、朝鮮には多くの大名方がご出陣中ではありませぬか。かの地で合戦しつつある気分で国内にひきあげてくれれば、気も立っており、さなきだに不安の国情のなかで、なにかといえば兵を用いる、ということになるかもしれませぬ。――一豊さま」
「なんだ」
「いつ合戦がおこってもただちに出陣できるようになされませ」
「それよりも、太閤の御病状だ」
「御病状は御病状、天下の形勢は天下の形勢。あなたさまはお大名でございますから、二つながらご懸念あそばさねばなりませぬ」

人の運命など、わからない。
秀吉が醍醐の花見をしたのは、ついこのあいだの春である。
おわって大いによろこび、
「来春は、みかど（後陽成帝）をお迎えしてさらににぎにぎしくやろう」
といったばかりであった。その来春の花を、秀吉はみることができるかどうか。

城下に流言がとび、秀吉が高熱にうかされ夢の中に旧主信長があらわれたという。
夢の中の信長はおそろしい形相で、
「もはや藤吉郎、よい時分じゃ、観念して冥土へまいれ」
といい、手をひっぱろうとした。
秀吉はひっぱられまいとし、声をあげて、
「お待ちくだされたく、お待ち下されたく。それがし、上様のおんかたき光秀めを討って御奉公申しあげましたるゆえ、その功を賞でくだされ、いますこしこの世に生かし置いて下され」
といったが信長は容赦せず、
「いやいや、お前はその功ありとはいえ、そのあとわが天下を奪い、わが子どもを攻め殺したり、家来にしたりした。そのこと、ゆるしはせぬぞ。さあ、参れ、参れ」
秀吉の手をぐんぐんひっぱってゆく。
「あっ」
と秀吉が目をさましたときは、ふとんから一間ほどはみ出てうなされていた。
といううわさが、城下の大名屋敷にまたたくまにひろがった。おそらく、家康の家臣あたりがまいた流説であろう。
しかし、当時、国内に滞留していた宣教師さえ、秀吉の容体から来る天下の不安に触れて、
「もともと、非理をもって奪った天下だから、またまた他人のために奪われることを秀吉は予感し、その嗣子の世がつづくようさまざまに苦慮をした」

という意味のことをかいているから、秀吉の死期がいよいよ近しとわかれば、かれ一代のことが人々のあたまに批判的にうかびあがったのは当然な心理かもしれない。
秀吉はなるほど、痛快りんりたるいかにも日本男児の代表、というような男であった。
この点、陰質な家康とは、ひどくちがう。
ちがうが、秀吉の晩年は、成功者にありがちな巨大な痴愚におち入っていた。
第一に、無用の外征をしたことである。何の利もえない外征をし、諸大名におびただしい軍費をつかわせ、さらに、物狂おしいほどに各地に豪奢な建築をおこし、そのために民力が疲弊し、物価があがり、
(はやくこの御時勢が一変せぬか)
とねがう声なき声が、世に満ちはじめていた。千代の山内家の家計にしてもそうである。
朝鮮出兵こそまぬがれたが、秀吉はその公平主義から留守大名にも出費させようとし、伏見城や秀頼の京都屋敷などの建築を分限(ぶげん)に応じて分担させた。
大へんな出費である。その出費の出どころは、すべて知行地の遠州掛川の百姓をしぼるしかしかたがなかった。
しぼれば、民心は不安になる。大名は自分の国の民情不安をきらうものだ。
(いつお道楽が果てるやら)
と、千代だけでなく、どの諸侯もおもっていた。
そのやさきの重病である。秀吉を愛し、豊臣家を思いつつも、一方では、

(殿下はいつおなくなりあそばすだろうか)
という気持が、ついおこってしまう。
この五月、六月という月は、何日かに一度、
「ついにご危篤(きとく)」
という流説がながれ、夜中城下が騒いだ。
伊右衛門はほとんど、城に詰めたきりである。かれはその点、勤勉で律義であった。

世には、おもしろいことがある。このくだりは雑談だが。——
この稿のこのくだりを書いているとき、筆者は、ちょうど土佐の高知にいた。
高知城内の酒亭で飲んでいると、私の相手をしてくださったかたのなかに、乾常美という中年の紳士がいた。
県の観光課長さんである。私はなにげなく、
「乾さんは、乾彦作のなにかですか」
ときくと、「はい、子孫でございます」と私のあてずっぽうがあたってしまって、こちらのほうがおどろいた。
先日、乾彦作が出てきたばかりではないか。
彦作の家系は、維新まで山内家の家臣として栄え、例の乾退助、のちの板垣退助の先祖はこの家の姓を借りて山内家に仕官した、というはなしもかいた。

その当の子孫に、そのくだりを書いてから数日後に酒席を共にしようとは、おもわざることである。
（まったく、世に生きていると味なことがあるものだ）
と、乾さんの顔をみた。どこかの磯で釣り糸でも垂れていると似合いそうな風格のあるお顔である。
「じつは、千代さんの」
と乾観光課長はさらに意外なことをいった。
「銅像をたてようという計画がすすんでおりましてね」
「おやおや」
千代も銅像になるのか、とおもい、なんとなく彼女をからかってやりたいようなおもいがした。
この高知城下には、戦前は伊右衛門一豊の銅像があったように思う。いま城下にある銅像といえば、城内でフロックコートを着て立っている板垣退助、これはどうやらかれが岐阜に遊説中、右翼の刺客に襲われ、
「板垣死すとも自由は死せず」
といったあのときの昂然たる姿勢を表徴しているようである。
いま一つは、桂浜の岸頭で太平洋の怒濤を見ながら立っている坂本竜馬である。
ふたりとも、千代が興した山内家のはるかな後世の藩士団から出た男どもである。
「なににしても、千代さんの銅像がないというのは片手落ちでしょう」

と、乾さんが、一種の感慨をこめていった。
「豊かできれいで」
私は、注文をつけた。
「才能のみずみずしい女流芸術家、といった感じの銅像にしていただきたいですね」
と、このくだりよりもだいぶ前の聚楽第行幸のときの小袖の展観のはなしをした。
「あれが展覧会のはじめだと思いますし、考えてみれば千代は服飾デザイナーのはじめだったようでもあります」
というと、かたわらにいらっしゃった旧山内家家史編纂員で日本の維新史研究の宿老でもある平尾道雄氏が、
「ああ、そういえば、そのとおりですね」
と、千代を思うような、遠い目をされた。
同席されていた高知市中央公民館長の武田次郎氏は、
「私の家祖は、遠州掛川時代に仕えたといいます。医者だったと申しますから、千代さんが風邪などを召されたときには、薬などを煎じてさしあげたのかもしれません」
「千代さんのために乾杯しましょう」
と、同席のお一人が、杯をあげられた。
「われわれの永遠の恋人のために」
ひとりがいうと、他のひとりは、

「彼女がためにお尻に敷かれっぱなしだった伊右衛門一豊どののために」

と、大まじめにいい、杯をほした。

七月のある朝、一人の庭師がやってきた。

「ご家老深尾湯右衛門さまに」

と、番士にいった。

湯右衛門がひき入れてみると、例の望月六平太の変装姿である。

「なんだ、お前か」

と、湯右衛門はこの甲賀者にさほどの好意をもってはいないらしい。

が、六平太は平気だった。好意をもたれる持たれぬ、などということを気にする者は、世の表にある者だ。世間の裏街道をゆく六平太のような男には、そんなことに気をつかう神経もなければ、必要もない。

「奥方さまにお目通りねがいたいもので」

と、この男にあたえられている当然の権利を、かれは言い述べた。

「それにて待て」

「いえ、このままお庭へまわります。こっちもいそがしいんだ」

さっさと庭へまわってしまった。

千代が、縁側へ出た。六平太が、背をまるめてうずくまっている。

「今日は、庭師ですか」

とからかったが、六平太は応じて来ず、

「太閤殿下のご容体が、いよいよよろしくありませんな」

「どこからききました」

「ちかごろは」

と、サジで薬を盛る手つきをして、

「お城下の施薬院どの、竹田法印どののお控え屋敷や、曲直瀬法印どののお屋敷にもっぱら出入りしております」

「忍びこむのですか」

「それが芸ですからね、ご想像におまかせするとして、あとひと月、持つか持たぬか、というところでございますな」

「そう。……」

千代は、傷（いた）わしそうな顔をした。

六平太は、それだけを教えにきてくれたらしい。あとは、世間ばなしになった。

「さまざまな取り沙汰がございましてな、怪談めかしいうわさもありますぜ」

「どんな？」

「太閤様の夢枕に、白装束の者が何人もやってきたそうでございますよ」

「もう、いや」

千代は、あわてて手をふった。こわい話が、大きらいである。しかし六平太がおもしろがって、
「それがね」
といった。
白装束の者どもは声をそろえて、
「伊勢の大神宮の使いで参った。殿下は、十年ばかり前、大神宮の金子百枚をお取りあげになったであります。いま返し候え」
といったが、秀吉には記憶にない。
「覚えがないが」
当惑していると、白装束どもは消えた。
夢からさめたあと、五奉行をよんでそのことを言い、記録などをしらべさせた。
なるほど、伊勢神宮の神官になにか罪があってその罰として黄金百枚を出させている。
「いそぎ、返せ」
と秀吉は命じたという。
(そこまで。……)
千代は話のこわさに閉口しながらも、そういう夢をみるまでに秀吉は衰弱してしまっているのか、と暗然とする思いだった。
「御台所さま」
六平太はあらたまっていった。

「もしでございますよ、太閤殿下がなくなるとして、……しかもでございますよ」
「しかも？」
「徳川殿が、兵をあげて豊臣家をほろぼそうとなさるとすれば、どちらにおつきあそばします」
「おや」
千代は、内心おかしかった。六平太もぬけめのない男だと思ったのである。
毛利家の間者になっている望月六平太にすれば、情報を千代に教えてやる反面、千代からも、ものを得たかったのであろう。
事実、
――秀吉の死後、家康が天下継承の運動をすれば、豊臣家の大名はどう動くか。
ということは世のひそやかなる関心事であったし、とくに、徳川家につぐ大大名である中国の毛利家にとっては、それを十分以上に知っておきたかった。
「さあ、どうでしょう」
千代は、六平太のために、正直なことをいってやりたかったが、実のところ、自分でもこの問題はよくわからない。
「女ですもの」
と、千代は首を横にふった。わからない、という意味である。六平太は、冗談じゃありませんよ、という顔つきで、

「この伏見のお城下では、どなたよりも奥方さまのおつむり（頭）がよいといううわさでございます。他家へは漏らしませぬゆえ、ご心底を教えてくださりませ」

「お家はね」

と、豊臣家のことをいった。

「二つに割れて、両派のお仲が、犬と猿ほどにわるいでしょう？」

「いかにも。三成の党と、加藤、福島といった鬼小姓あがりの武将派と」

「ところがね」

千代は、微妙にわらっている。

「わたくしのほうは、わずか、遠州掛川六万石という小さな身上で、しかもお奉行などのお役にはついておりませず、そのどの派からも相手にされておりませぬ」

「それで？」

「つまり、わからないということ」

「御台所さま」

六平太は、千代の微笑がにが手だ。その奥になにがあるのか、さっぱりわからない。

「はい・いいえ、で答えてください。石田治部少輔三成どのが、お好きですか」

「いいえ」

「では、御台所さまは徳川殿をお好きでございましょうや」

「まだしも」

とうなずくと、六平太は、ありがとうございました、それだけで十分でございます、といって帰ってしまった。

（あれで、間者がつとまるのかしら）

千代はあきれてしまった。

政治は複雑なものだ。好ききらいだけでかじをきめるわけにもいかず、逆になってゆく場合も多い。

六平太はなるほど世間のことはよく知っているし、早耳でもある。

しかし、所詮は間者なのだ。毛利ほどの大国になれば、ああいう男を多くつかって、豊臣家の内幕や諸大名の内々の思惑などの情報をあつめるだけあつめているのであろうが、あの調子の情報で一国の方針を決定すれば国を誤るかもしれない。

（古来、名将は、間者を多くつかい、しかもかれらのいうことをいちいち取捨選択したというが、毛利家にはそれだけの人がいるか）

当主の輝元は、凡庸（ぼんよう）である。

輔佐する者にも、大した器量の者はいない。

（太閤殿下が崩ずれば、ほとんどの大名はどうしてよいかわからない、というのが実情ではないかしら）

それから、ひと月ばかり経った。

雲満つ

慶長三年八月十八日、秀吉は死んだ。
その死は、厳重に秘された。いずれわかるとしても、にわかに知れては天下騒乱のもとになる、と配慮されたのであろう。
千代も伊右衛門も知らなかった。
あとからきいたところでは、息をひきとったのは、午前二時であった。
しかもその遺骸は、高野山の木食上人（もくじきしょうにん）と五奉行の一人の前田玄以がひそかにかつぎ出し、京都へはこび、阿弥陀ヶ峰に埋葬した。
翌日、おもだつ大工の棟梁があつめられて阿弥陀ヶ峰に廟所（びょうしょ）が造営されることになったが、かれら棟梁にさえ、
「大仏殿の造営」
という程度の発表をした。

いかにその死が秘密にされたか、ということは、大老である徳川家康、前田利家さえ、夜中に報（し）らされず、かれらが朝、いつものように登城すべく城下を行列しているときに、石田三成から、それぞれひそかにしらせがあった。
家康は、途中からひきかえした。
利家はなお行列の進行をとどめず、城内に入って五奉行の一人の浅野長政に、
「ご容体はいかがでござる」
とたずね、長政も、
「はい、けさも割りがゆを召されました」
と答えた。
むろん、城内でもほとんど知らなかった。
しかし日が経つにつれて、自然と城下の町人も知るようになった。
千代は、翌々日、六平太の口からきいた。六平太でさえ、
「どうも、そのようでござる」
と、断定はできなかった。それほど秘密がたもたれていた。
理由の大きな一つは、朝鮮在陣の将士にあたえる影響、敵に知られる不利、を考えてのことであろう。
「ご城内はふだんのままだ」
と、伊右衛門は千代にいった。毎日登城しているかれでさえ、一両日は、半信半疑だった。

秀吉は、死のまえ、何度も五大老、五奉行などを枕もとに召し、
「秀頼のことをたのむ」
と繰りかえし、何度も誓紙をとった。
が、世の中は誓紙では動かない。
「これからは、どうなるのでしょう」
と、千代は、秀吉の死を知った夜、伊右衛門にきいた。
「知らん」
伊右衛門も疲れていた。
「考えぬことにしている」
「それがよろしうございます。こういう見当のつかぬご時勢になりますと、あらかじめ考えをきめて、こうなればああするなどと思い定めたりするのはよろしくはございませぬ」
「南化和尚が申される随処に主となれ、ということだな。わしもそのつもりでいる」
伊右衛門はちかごろいよいよ禅に凝っていて、ことばのはしばしに禅語が出る。
随処ニ主トナレというのは、禅のいわば真髄のようなものだ。いつ、どの時期、どの場所、どの瞬間でも、つねに自分が客観状勢の主人でいる、ということで、客観状勢のドレイにならない、ということだ。
それによってはじめて心の自在を得る、つまり何者にも束縛されない智恵と心魂を得るということだ。

「まあ、それでゆく」
と伊右衛門はいった。
千代は、このさきしばらく、助言をつつしもうとした。この重大な時期に、伊右衛門の心に妙な先入主を入れぬほうがいいと思ったのである。
妙なものだ。
小なりといえども山内家は大名の家であるのに、情報というものがかえって入らない。
「灯台もと暗し」
というものであろう。秀吉の死にしても、かえって城下の町人のほうが早く知っていた形跡がある。
千代は、情報を集めようとした。
納戸方（資材係り）の役人などに命じ、できるだけ聴き上手になって出入りの町人からうわさをきいておくように言いつけ、千代自身も、学者や禅僧をよび、
――講話をきく。
というたてまえで、かれらが耳にしているうわさを聴くようにした。
そのなかで、藤原惺窩という、目のやや斜視の男がいる。
おもしろい男である。
千代は、

「先生」

の称をもって、この男を厚く遇した。民間の学者ながらおそらく日本中でこの男ほど頭のいい人物はいないであろう。

血すじもいい。播州三木郡細川村のうまれで、父は冷泉為純。

冷泉家はもともと公卿で、戦国時代に所領の地である播州細川村にのがれ、土着し、参議侍従の位官をもつ土豪になった家である。

これが、戦国中期以降、播州で威をふるった三木城主別所氏に圧迫され、別所長治の代についにほろぼされた。

ほろぼされる前に、当時すでに仏門に入っていた惺窩は、生家のために奔走し、織田家の中国征討司令官だった秀吉に会って救援を乞うたが、

「まだその時期でない」

とことわられ、このために家はほろんだ。惺窩の秀吉ぎらいは、遠くはこういうところにも原因があるらしい。

のち惺窩は還俗して儒者になり、学問のある公卿や僧と交わったが、五山の学僧もかれには一歩をゆずるほどに才学が高く、数年前、みずから「学問好き」を称していた豊臣秀次にまねかれ、その詩酒の席につらなったりしたことがあった。

秀次は、惺窩の名が天下に高いことを知り、

「しばしば来い」

と、命じた。秀次にすれば、かれを酒席によぶことによって、「知識人」としての自分の装飾にしようと思ったのであろう。

召しかかえる、とはいわなかったのは、大名が儒者を家来にするという習慣はまだなかったのである。惺窩はいわば秀次の高等幇間のような存在だった。

が、やがて秀次の家臣団のあいだにすさまじい派閥あらそいがあることを知り、

「近づけば、身を傷つけることになる」

と予感し、ついにどう招かれても行かなくなった。

惺窩は、その後、家康からも石田三成からも愛され、京・伏見では大名の屋敷に自在に出入りできるふしぎな存在として知られている。

「故秀次のお家は、乱脈でございましたな」

と、惺窩は、ずばりという。

「派閥の巣のようでござった。家臣がたがいに党を作って相争うのは、ひょっとすると豊臣家の家風かもしれませぬな」

歯にきぬを着せぬ男である。秀吉死後の、豊臣家の複雑な派閥の様相を、それとなくいっているのだ。

「やがて、派閥あらそいによってほろびるでしょう」

とまでいった。

千代は、この男の豪胆さにおどろいた。その筋の耳に入れば、殺されるかもしれないことを、

平然という。

「惺窩先生、左様なことを申されて、いいのでございますか」

と千代のほうがむしろ心配した。

「相手をみて、申しております」

藤原惺窩は、微笑していった。千代ならば他言はすまい、というのである。

「太閤殿下も」

と、惺窩は落ちついていった。

「朝鮮征伐がいけなかったようでございましたな。ああいう無名（名目のない）の戦さをなさって、文教の国を攻めるのはよくありません」

惺窩は学者だから、日本よりも朝鮮を、朝鮮よりも明国をわが学問の祖国としていた。

だからこそ、朝鮮の俘虜で学者だった姜沆（きょうこう）に近づき、かれに、

——日本の庶民はいま、無用の外征のために苦しんでいる。いまもし朝鮮が明と結んで日本に逆に上陸すれば、民はよろこんでこれをむかえ、またたくまに奥州白河まで征服できるだろう。

といったほどの男である。

かれは、豊臣の天下を憎んでいた。

なぜならば、秀吉は学者を尊重せず、すこしも用いようとしない。

明国や朝鮮には、

「科挙（かきょ）」

という制度がある。官吏登用の国家試験である。秀才にしてその試験にさえ合格できれば、能力しだいでどういう大官にでもなれるのだ。

かれは、姜沆に、

——私は、朝鮮か明国にうまれなかったことがくやしい。なぜこんなつまらぬ日本にうまれたのか。

といったことがある。事実かれは渡海しようとし、船にまで乗ったが、乗船後すぐ病気になったためあきらめざるをえなかった。

そういう評論家である。日本をさえみとめないのだから、豊臣の天下などは頭から否定し去っていた。

ただ、家康だけは買っていた。

「数ある諸侯のなかであの江戸内大臣だけは、ちがいますな」

「どうちがうのです」

「学者を、学者としてみてくれます」

家康は、三年前に惺窩を江戸へまねき、貞観政要（じょうかんせいよう）を進講させたことがある。惺窩はそのときの家康の厚遇ぶりに感激しているのであろう。

「げんにあの方は、林羅山という学者を高禄で召しかかえておりましてな、ほかの諸侯のまねのできぬところです。あのひとがもし天下をおさめるなら、かならず文教をもってするでしょう」

「先生は、太閤さまを、どうお思いになりますか」
「馬上天下をとった気分が、ついにぬけきれなんだお人ですな」
秀吉は晩年、醍醐で花見をするとき、醍醐寺に命ずることがあって、祐筆（書記）に口述して手紙をかかせた。
書記はふと、
「醍」
という文字をわすれた。筆を宙にとめて思い出そうとしていると、
「なんだダイの字か」
と秀吉は筆をとりあげ、
「大」
と書き、「これでよい」と笑った。そんなものはどちらでもよい、用さえ足せればいいのだという豪快な戦国かたぎがそうさせたわけだが、
「しかし、そういう神経では天下は長持しませぬ。なぜならそういう主人のもとでは、諸侯はいつまでも戦国の殺伐さをうしなわず、争いがおこれば文で解決しようとせず、兵馬で解決しようとします。いずれはかれら派閥同士のあいだで大乱がおこりましょう」
藤原惺窩は、
「党」

という言葉をしきりにつかった。派閥のことである。
淀殿・石田三成を主役とする党。
北政所・加藤清正・福島正則らを主軸とするいわゆる武将派。
その上に、ふたりの長老が、派閥から一見超然としているようにみえる。
豊臣家の大老である、
徳川家康
前田利家
である。
秀吉は死にのぞんで、このふたりに、
「秀頼の後見人になってもらいたい」
とくれぐれも頼んだ。だから、いわば豊臣家の摂政といってよかった。
秀吉は、晩年、自分のなきあとの豊臣家をこの二人の勢力均衡の上にたもってゆこうとしたらしく、ともどもに官位をすすめた。
利家は、人気のある老人である。その上に、歴戦の武将で、かつ、かつての朋輩であった秀吉から、
「わが亡きあと秀頼をたのむ」
といわれれば、そのためには家も身も亡ぼしていいと思うほどの律義なところがあった。
利家の人気は、派閥をこえている。石田三成もかれに親しめば、武将派もかれをもって棟梁とする、というぐあいである。

「あの御老人が」
と惺窩もいった。
「お元気なら、まずまず豊臣家も御安泰でありましょう。しかし、なにぶん」
言葉をにごしたのは、あすをも知れぬという老病の床にあるからであった。
「お長うは、ござるまい」
惺窩は、けろりという。
さすれば、残るのは徳川家康である。
「諸将は、いまやあらそって徳川家の門をたたいておられるようでござるな」
そのあっせんをしてまわっているのは、秀吉の子飼い大名である藤堂高虎が第一であり、かれなどは、すでに秀吉の病中から家康の家来になっているような忠勤ぶりであった。つぎに黒田長政。
「太閤殿下が死ぬ。しかし諸侯はわが利のみを考え、豊臣家に忠をつくすなどは思っておらぬようでございますな」
と、惺窩は白い顔に皮肉な微笑をうかべていった。
「ところで」
惺窩は乗りだすように、
「御当家は、いずれの党に属しておわす」
「先生と」
千代も、微笑で答えた。

「おなじでございます。当家は、いずれの党にも属しませぬ」
「ははあ。すると、対馬守(伊右衛門)どのは、徳川殿のお屋敷にも、前田家にも参られませぬので」
「さあ、よくはぞんじませぬが、なにぶん小大名でございますもの。一豊は、その御両方に人並以上の尊敬をはらっているようでございますが、お屋敷にゆける分際ではありませぬ」
と、すらりと逃げた。
逃げたが、この惺窩が、不偏不党の民間学者をもって任じていながら、実は徳川家康のかげの走狗（そうく）になっていることは、千代の目でかすかにわかる。
だから、
「武士は、日本第一の弓取りを敬するもの。太閤殿下がおかくれあそばしたあとは、日本一の弓取りと申せば、徳川内大臣さまでございましょう。一豊は、弓矢を取る身として、徳川様を八幡大菩薩と心得ているようでございます」
と、いやらしさなく、さらりといった。
政情の不安で、気持が緊張しているせいかもしれない。
千代は、秀吉の死後、にわかに月日の経つのがはやくなったようにおもえる。
秀吉の死は、中秋の明月から三日後であった。そのあと、なんとなく気ぜわしく、あっと気づいたときには、紅葉の色もあせ、冬を迎えていた。
毎朝、律義者の伊右衛門は、供をそろえて登城してゆく。

冬になっても、表むきはまだ太閤は生きていることになっているのである。

大晦日も近い、凍てるような夜、千代は伊右衛門と夫婦だけの茶を楽しみながら、

「いつ、太閤様がおなくなりあそばしたことを公表なさるのでございましょう」

とたずねた。

「大明、朝鮮人に知れるとまずい。外征の将士が帰国してから、ということになっている」

「御殿では、あいかわらず、お医者が詰めているのでございますか」

「ご重体ということになっているからな」

「それであなた様も、毎日お見舞に？」

「ああ、お見舞に登城する」

律義なことだ、と千代はおかしかった。

むりもなかった。秀吉の死が、もし海を越えて敵側につたわったならば、敵はいっせいに攻撃を開始し、征野の諸将の退陣がうまくゆかないであろう。

秀吉の死から七日後、徳永寿昌、宮木豊盛の二人が伏見を出発し、堺から海路朝鮮へ渡り、在陣の諸将につたえた。

現地では敵とのあいだに和戦さまざまの事件があったが、諸軍とも十一月の上旬には釜山浦まで南下し、順を追って海を渡り、十二月の上旬には博多に集合した。

伏見からは、出迎えとして、毛利秀元、石田三成、浅野長政らが、博多にゆき、ぞくぞくとひきあげてくる外征軍を応援している。

「いずれ、大坂、伏見に帰るはずだが、かれらは戦場で気が立っている。その上、石田三成ら五奉行が、留守中、さまざまなことを故太閤に告げ口した、と信じている。加藤清正などはその旗がしらのようなものだ。かれらが当地に帰れば党派の争いはいよいよはげしくなるだろう。戦国策という唐土の書物に」

と、伊右衛門はちかごろは、学者や僧侶に接しているから、会話のなかにときどきそういう書名が出てくる。

「浜辺で、鳥のシギとハマグリとが争っていた。争っているうちに、そこへやってきた漁夫に二つながら獲られた」

「その漁夫には、たれがなるとお思いです」

「徳川殿かな」

伊右衛門は、見るところを見ている。家康は大老の筆頭でもあるし、そういう争いには加わらず、争いに傷ついた者に、従来たくみに恩を売ってきた。

「一豊様は」

と千代は、たずねてみた。

「シギ派ですか、ハマグリ派ですか」

「どちらでもないな」

といったのは、事実である。関八州の家康に対する「牢番」の役をつとめている伊右衛門ら東海道筋の諸大名は、外征にも参加しなかったし、しかも、五奉行を中心とする豊臣官僚団とは昵

懇ではなく、その点、中立派というべきであった。
「いい立場だ」
と伊右衛門はのんきそうにいうが、実際は中立派ほどむずかしい立場はないであろう。
「やがて、中立派というのはなくなって参りましょう」
「そうかな」
「左右きめねばならぬときが参りましょう」

明けて、慶長四年正月になった。
秀吉の遺言により、秀頼は伏見城をひきはらって、大坂城に移ることになった。
秀吉はすでに死の前から、将来変事あることを予知し、秀頼の居城たるべき大坂城を大々的に改修していた。
「われわれも、大坂屋敷に移るのでございますね」
と千代がきいた。
「諸大名とも、大坂に移駐することになる。自然、妻子も大坂へ移る」
「伏見は？」
「この城には、徳川殿がお入りになり、秀頼様の代官として天下の政務をとられる」
というのは、秀吉の遺言にのっとったことである。
秀吉なきあとの天下は、徳川家康と前田利家の二頭政治でおこなわれることになっており、家

康は伏見に、利家は大坂に、といったぐあいに分駐することになっていた。
十日、秀頼、伏見出発。
諸大名ことごとくこれに従い、病中ながら利家がこれを総指揮した。
伏見城代である家康は、「お見送り」として随行し、大坂へ行った。
千代ら諸侯の妻子はその前日に大坂へくだり、それぞれの屋敷に入っていた。
伏見から大坂へ。
いわば、政治の中心が移動したことになる。
千代は、ひさしぶりで戻った大坂屋敷の清掃、手入れのさしずをし、伊右衛門が入るのを待った。
伊右衛門が大坂屋敷におちついた日は、ひさしぶりの雨がふった。
「雨の夜は、落ちつくものだな」
と、伊右衛門が、千代の化粧の間にきてすわったとき、表通りがにわかにさわがしくなり、耳をすますと、尋常でない。
「千代、戦さだ」
伊右衛門は、叫んだ。人馬がおびただしく駈けてゆく。
「一豊様、ご用意を」
といったとき、すでに乾、福岡、五藤、深尾ら家老のめんめんが指揮をして、門前、門内にかがり火をたき、兵に武装をさせつつあった。
そのとき、犬のように門内にころがりこんだ者がある。

「何者だ」
乾彦作がいうと、
「六平太」
と、この男は武士の装束をしていた。
「乾殿、御台所さまのもとにご案内を」
「殿様もおられるぞ」
と、乾彦作は、この六平太がいつも主人を無視することをこころよく思っていない。
「いや、御台所さまがよい。大事は申しあげやすきお人に申すのがよろしかろう。早う御案内なされ、一刻をあらそいまするぞ」
やがて、千代のもとに通され、部屋の次室でうずくまった。
「六平太、何事ですか」
「大事でござる。ただいま石田治部少輔（三成）など奉行衆が、徳川殿のお屋敷を夜襲されるといううわさがとび、徳川殿、お屋敷にて戦備をととのえ、ゆゆしき状況になっております」
「それで、表を駈ける人馬は？」
「あれは徳川殿加勢におもむく諸大名の兵でござる。さてご当家は？」
と、六平太は山内家のためには情報をあたえ、自分が仕える毛利家のためには、山内家の動向などを報告したいらしい。
「と申しますのは？」

「御当家は、徳川殿のお屋敷へお駈けつけになりますか」
「いいえ」
千代はかぶりをふった。そこまで当家は、おっちょこちょいになりたくない。
政情がいかに険悪かは、この一事でもわかる。その夜の家康の大坂屋敷は、全員武装し鉄砲には火縄を点じ、家康以下、一睡もしなかった。
翌朝、夜が白むとともに、行列を仕立て、その中央に駕籠をおしつつんで、伏見へむかって出発した。
駕籠には、家康はいない。
替え玉をのせてある。家康自身は、騎馬で諸士のあいだにまじり、大いそぎで大坂をはなれ、枚方までできたとき、全軍駈け足で一気に伏見城へ帰りついた。
あとで、さまざまなうわさがとんだ。
千代の判断するところ、原因は家康の傍若無人なふるまいにある。
というのは、この老人は、秀吉の死を待っていたかのように、諸侯の屋敷をしきりに訪問している。
「傍輩の中、その徒党を立つべからず候」
という誓書を、かれは二度も他の諸侯とともに病中の秀吉に差し出しているのである。この誓書を家康は無造作にやぶり、島津義久、増田長盛、長曾我部盛親、新荘直頼、細川幽斎、有馬則

頼(より)などの屋敷に、用もないのに遊びにゆく。
あきらかに、将来への工作であった。
だけではなく、秀吉は、
「私婚」
を禁じていた。「諸大名縁組の儀、御意をもって相定むべきこと」という法度は、なんと家康、利家らの名で天下に公布したものだが、家康はみずからそれをやぶり、自分のメイの松平康元の娘を養女にして福島正則の子の正之にめあわせ、自分の第六子忠輝には伊達(だて)政宗の娘をめとり、かれには外曾孫になる小笠原秀政の娘を養女にして蜂須賀至鎮(よししげ)にめあわせる約束をしている。
あきらかに、私党をつくりつつある。
「けしからぬ」
と怒った石田三成らが激昂し、その激昂が、
「夜襲」
といううわさになって飛び、家康を伏見へ走らせたものであろう。
千代も、このさわぎにはさすがにあきれ、
「江戸内大臣さまも、大変でございますね」
と伊右衛門にいった。白髪頭の家康が伏見へ一散に逃げてゆく姿が想像されて、おかしくもあり、あわれでもあった。
千代も女である。家康という男の重みを、かねて好きではあったが、それだけにこのぶざまさ

がやりきれない。
「律義で通ったお方なのだが、太閤おかくれのあとは、てのひらをかえしたようなお人になられた。なにやら、せかせかと陰湿な工作をなされている」
「お年のせいでございましょうね」
「とは？」
「この機をはずしては天下とりの機会がついに来なくなり、自分は老いてしまう。そのためにわかに人変りなされたのでございましょう。それにしても、夜討のうわさだけでお逃げあそばすとは、かるがるしい……」
「ふむ」
「一豊さまなら、どうあそばします」
「逃げはせぬ。あくまでも武辺の名誉のために、屋敷の警戒を厳重にし、退くべきならば堂々と陣容をととのえて退くわ」
「しかし智恵ある者は、本来、臆病なものかもしれませぬな」
と、千代は、いま一度考えなおしてみた。天下を取ろうと志す者は、一騎駈けの武士の武辺はいらない。ああまで身を護らねばならぬものか、とだんだん感心しはじめた。
二月になった。
庭の老梅のつぼみのふくらみが、今朝はめだっている。そんな朝、例の六平太が頭をまるめて、

医者のかっこうでやってきた。

「おやおや」

千代は笑いだしてしまった。頭をまるめたあと、つぎに有髪の者に変装するときはどうするつもりだろう。

「六平太、似合いますね」

「大坂ではもっぱら、この姿でござる。諸侯のお屋敷に出入りしやすうござってな」

「町医ですか」

「はい。天満の町家に住もうております。内科(ほんどう)でございますから、なんなら診て進ぜましょうか」

「いやなこと」

千代はくすくす笑った。

「御台所さまは、どこもお悪くございませんので」

「ええ、風邪のほかは、あまり病気などをしたことがありませぬ」

「しかしお子様がお生れになりませぬな」

「六平太どのは、そのようなことまで御専門ですか」

「いや、御台所さまにかぎって、診て進ぜてもよろしうございます」

「こまったお医者さまですね」

あと、一つ二つ世間話をしてから、六平太が、「徳川殿が」といった。

「やはり人変りなされましたなあ。去月の有馬屋敷での一件、ご存じでございますか」

「うっすら、きいておりますけど」

正月の十七日のことである。

十二日に伏見に逃げかえった家康は、十七日には有馬則頼の屋敷にあそびに行っている。

家康をむかえた有馬家では、幸阿弥などを呼んで乱舞などをみせ、さまざまの馳走をした。

それから二日後の十九日に、有馬家ではごく懇意の大小名をよんで、その直会(なおらい)の意味で猿楽(さるがく)興行をしていた。

すると、べつに有馬家で何の招待もしていない家康がまたまた予告なしでやってきて、

「やあ、おのおの、お楽しみなことでございますな。それがしも猿楽が好きゆえ、まねかれもせぬのにのこのこやって参りました」

といった。家康は、本来、武芸のほかは無趣味な男だから猿楽にここまで興味があろうはずがない。

有馬家では恐縮し、大あわてで席をつくり、家康に見てもらった。

そんな事件があった。たしかに、事件である。大名間の私的交際をこうもするというのは、故太閤が遺した「置き目」をぬけぬけと破っている。

「大坂城では、けしからぬと憤慨しているようでございますな」

大坂城には、前田利家を長老と頂く、大老、中老、奉行などの顧問官、執政官が詰めている。

その中心勢力は、石田三成であった。

伏見には、家康がいる。

しかもどういうわけか、秀吉子飼いの大名の加藤清正、福島正則、黒田長政、池田輝政、加藤嘉明、藤堂高虎らは大坂へは来ず、みな伏見屋敷に住み、家康をもって主人のごとく待遇しているようであった。

自然、伏見と大坂が、対立した。

「家康をゆるせぬ」

と大坂にいる三成が、前田利家以下を説いてその行状糾弾にのりだそうとしたとき、伏見にある清正らは敏感に反応し、家康方として、戦備をととのえたりした。

「伏見の町人などは、徳川殿を、すでに天下様、と申しているようでござるな」

と、六平太がいった。千代もさすがに、世間というものの薄情さにあきれた。

事態が、悪化した。もっとも、悪化という言葉が、正確かどうか。

とにかく、大坂方では、家康をのぞく四人の大老と、中老、それに五奉行が緊急会議をひらき、

「家康をゆるせぬ」

ということになった。むろん、弾劾者（だんがいしゃ）の中心的存在は、石田三成である。

正直なところ、かれ以外の豊臣家幹部は、自家の保存と家康の実力を思いあわせて、どことなく弱腰であった。ただ、老病の床にある前田利家だけが、故秀吉から遺児の行くすえをまかせられた、という義務感が頑固なばかりに強く、

「これ以上、内府（家康）の自儘（じまま）をゆるしては、お家がゆらいでしまう」

と、三成の弾劾案に賛成した。

三成が調べたところでは家康の「違反」は十三条ある。

その一つ一つについて、家康に申しひらきさせることになり、

「もしご返答分明ならずば、加判を除き申すべし」

ということになった。家康に大老職をやめさせるというのである。

その使者には、三人の中老が立った。生駒親正（ちかまさ）、堀尾吉晴、中村一氏である。

三中老は、伏見へゆき、家康に面会し、その十三項目にわたる違反につき、釈明をもとめた。

家康は、傲然（ごうぜん）としている。

「なるほど、多少の手落ちはある」

と、婚姻問題については正直に自分の不注意としてみとめ、

「しかし、それらをもって、自分が御政道に対して私心があるというのは、一体どういうことか」

とひらきなおり、

「しかも、事と次第では、加判の役をはずすといわれる。驚き入ったことである。そもそも秀頼公を輔佐し参らせるということは、自分が故太閤殿下から依嘱（いしょく）されたことだ。その自分をやめさせるというのは、故殿下のご遺命を無視するということではないか」

三中老は、家康に言いまかされて帰坂した、という話を、千代はごく最近にきいた。

しかも。

この家康糾弾のあと、家康は、伏見向島の屋敷に櫓をあげ、門前には竹矢来などをむすび、夜はあかあかとかがり火をたいて、すでに戦時状態のような異常な警備ぶりをみせた。

大坂城でも、

（あるいは万一）

ということを考え、兵を集め、鉄砲を整備し、用意おこたりがない。

双方の間に、淀川が流れている。双方の間者たちはこの川を上下し、しきりと双方の警備状態を誇大に報告するものだから、たがいに、

——いよいよ相手は。

という気持になり、戦争準備に拍車をかけた。

その夜、というのは六平太がやってきた日が暮れてからである。伊右衛門が下城してきて、

「千代、おどろくべきことをきいた。むろんうわさだが」

といった。

伏見にある家康が、その長男大納言秀忠を、江戸へくだらせた、というのである。むろん、大坂との決戦にそなえ、江戸で準備をととのえさせるためであろう。

「千代、いよいよ合戦になる」

「どうせ、そうなりましょう。その時期がいつか、というだけでございます」

「のんきだな」

弱年のころから、どういうわけか、伊右衛門は千代を、

——のんき者だ。

と思いこんできた。どんなに事態が急迫しても、千代はにこにこして、すこしも緊張してくれないのである。むしろ千代の口にかかると、なにやら事態がさほどでもなくなり、時には冗談ばなしのようになってしまう。

「合戦がはじまる、というのだぞ」

と、この夜も、おどすようにいった。

「ええ。大坂の方の皆さまが、伏見の家康どのを攻められる、というのでございましょう」

「そうだ」

「ほんとうにそういう肚（はら）をおもちなのは、石田治部少輔どのだけでございましょう。ですから、まだだいじょうぶ」

「やはり、のんき者だ」

伊右衛門は苦笑した。

千代の本心は、いまこの時期に、伊右衛門を軽挙妄動させたくなかった。

こんなうわさをきいている。ちかごろ、海外で勇名をとどろかせて帰国した加藤清正のことである。

清正は、すぐれた武将でもあり、行政能力に長じた行政官でもあったが、しかし惜しいことに天下の大勢を見ぬいてそれを御するほどの政治的感覚と、諸将の心を収攬するような政治的魅力

のある人物ではなかった。もしかれがそういう能力をもちあわせておれば、朝鮮在陣中に掌握していた諸将を動員して、家康を討つこともできたのである。

清正は、

——太閤なきあとは、家康である。家康をたよりに秀頼様を守りたててゆくしかない。

とおもっていた。どうみても、小児程度の政治感覚でしかない。

その清正が、この緊張期に、家康の屋敷にあそびに行ったというのである。

家康は、さまざまの昔ばなしをしたあと、

「そうじゃ、肥後守（清正）どのは武辺の人ゆえ、あれをみていただこう。あれをもて」

と、侍臣に命じた。やがて、古い甲冑がはこばれてきた。

「これは去んぬる年、長久手合戦において故太閤と合戦し、勝ち参らせたるときに着用していた甲冑でござる。ちかごろ、それがしに対し、合戦をいどもうとする者があるやにきいています。そのときは、これを取りいだしてふたたび着用し、手痛い目にあわせてやるつもりじゃ」

と、家康はいった。

清正は恐縮し、

「どうぞそのお具足はおおさめありまするように。いまどき、御前を相手に合戦をしようなどと申す者があるべきはずがございませぬ」

といった。この一件、家康はおどし、清正はおべっかをした、とみていい。

そんな話を、千代はきいているだけに、伊右衛門を早走りさせて薄みっともないまねをさせた

くなかった。

清正は、肥後半国二十五万石の大大名であり、伊右衛門はわずか掛川六万石である。清正でさえそうだのに、伊右衛門などがたとえ家康におべっかをいっても、薄笑いもうかべてくれまい。

（時期を待つのだ）

と、千代はおもっていた。時期が熟してぎりぎりになるまで、「政治」などはまったく考えずに律義でくらし、そのもっとも有効なときに伊右衛門の存在をひからせる。そんなときが来そうな感じがするのである。

（どうせ小身なのだ。あわてて左右いずれに走っても、徳川殿も石田殿も、さしてありがたくも思わない。それまでは、あくまでも中立の場を守らせたい）

だから千代は、伊右衛門のいう「のんき」にかまえているのである。

が、そういう態度が、いつまで維持できるか、情勢のさきざきは、千代でもわからない。

ちかごろ、伊右衛門の様子がおかしい。なにか胸に鬱するものがあるらしく、浮かぬ顔をしていた。

（どうなさったのかしら）

と、千代はひそかに観察していたが、よくわからない。ある夜、めずらしく夫婦で夜食のとろろ汁をたべているとき、伊右衛門はふと箸をおとした。

「どうなされました」

と千代は、小首をかしげた。
「いや、なんでもない」
伊右衛門は箸をひろい、首をのばし、椀を唇にもって行こうとした。千代はおどろき、
「あの、もうし」
「なんだ」
「もうお椀の中はからっぽでございますけど」
「ああ左様か」
無表情に言い、箸と椀を下へおいた。
「一豊様、ちかごろ思い鬱していらっしゃるように思われますけど」
「女にはわからぬことだ」
「そんなご無理なことを。——ひとのご胸中など、神仏でもないかぎり、男でも女でもわかりませぬ」
「それもそうだな」
と、きまじめにうなずく。その目が、うつろなのである。なにか懸念があって、神経を傷(いた)めてしまった顔つきだった。
千代はさりげなく問いただしてゆくと、
——このところ、数度、秀頼君に拝謁している。日に成長なされ、やはりただびとでないせいか、お可愛らしさが輝くようである。

といった。しかも拝謁するたびに、
(守ってさしあげねば)
そんな感情がつきあげてきて、どうにもならない。秀頼の可憐な姿を、夢にまでみた、という。
夢の秀頼は、いつも赤地錦の衣装を着ておられる、といった。
(疲れていらっしゃる)
と、千代は思った。夢に色彩が出るというのは、疲れている証拠だというではないか。
千代は、たった一つの点だけ、伊右衛門には当時の武将にめずらしい性格がある、と思っていた。
道徳的な情緒である。
故秀吉が、
——一子秀頼のこと、頼み参らせるぞ。
何度も家康以下の五大老・三中老・五奉行など豊臣家の高官に念押しの誓紙をとったが、天下九割九分までの諸侯は自分の保全だけを考えてそういう前代に対する忠誠心など、ほとんどない。秀吉自身が、実力をもって織田氏の天下を奪ったものである。つぎは家康がそれをやる、というのは諸侯の一致した見方であり、
——ぜひ徳川殿のご機嫌をとらねば。
と、身を屈してその屋敷を訪問する者も多く、とくに、秀吉恩顧の荒大名といわれる者にそれが多いのは、かれらの性格が、天性、強い者におべっかをつかう俗物性をもっているせいかもし

れない。

千代は、

「市松といわれていた子供のころから故太閤様のおひきたてをうけてきた福島正則どのでさえ、ご遺戒をやぶって家康どののお身内と婚姻の約束をなされ、それを大坂方から詰問されると、豊臣家のためをおもって婚姻の約束をとりむすんだ、なにがわるい、と理屈にもならぬことを申されたそうではありませぬか。ましてあなた様などは福島どののような譜代の大名とはちがい、豊臣家の外様でございます」

だから、もっと自由にものを考えよ、といった。わずか六万石の大名が、なにを言いだしたところで通る世間ではない、と千代はなぐさめるのである。

「しばらく、世のことはお忘れあそばすように」

と、千代はなによりも伊右衛門の気鬱が心配だった。

初夏になった。

家康の政権奪取の工作は、いよいよ露骨になってきた。

すでに反家康の唯一の強硬論者といっていい石田三成は奉行職を辞めさせられて江州佐和山城に帰っており、家康とともに大老職にあってかれを制御しうる立場にあった加賀大納言前田利家は、この閏三月に死んだ。

家康は、もはや独走しうる態勢にあり、かれは政敵前田利家の病床を見舞うために伏見から大

坂へくだったときも、秀頼に拝謁さえしなかった。

じつは、伊右衛門が衝撃をうけたのは、このときであった。

（もはや、家康どのは秀頼様をお見捨てなさるおつもりかもしれぬ）

どの大名も、そう知った。

このころ、大坂城内の番所に詰めていた豊臣家直参七手組の組頭で二千石を食む中島式部少輔氏種（のち大坂夏ノ陣で落城とともに自殺）という古豪の者が、同僚と夜ばなしをしているときに、こういった。

「天正のころ、信長公本能寺でご自害あってのち、織田家の重臣丹羽長秀、池田信輝らその他大名小名はほとんど秀吉公の幕下につかれた。しかるに信長公の御子三介殿、三七殿をはじめ、筆頭大名の柴田勝家、それに滝川一益、佐々成政らは秀吉公と勝敗を争い、身をほろぼす者もあり、降伏する者もあり、かような始末と相成ったは、これみな秀吉公の智謀の無双なことを知らなかった故である。ちょうどこれに似たるは、今のありさまである。秀吉公隠れ給うてのちは、年頃といい、官禄といい、内府（家康）にまさる者はなく、諸人もひそかにこれに心を寄せているようだ。思うに、秀吉公、岐阜中納言（信長の嫡孫秀信）に天下をさずけたまわなかった先例あれば、内府もまた秀頼公を主君とはなすまじ」

といい、溜め息をついたという。たまたま中島式部少輔がいった時勢観と家康の真意はたれもがそう思っていた。伊右衛門も、おもっている。

かれなどは、ほとんどの大名と同じくはじめ織田家につかえ、そのまま豊臣家に仕えた。

その実歴のわりには、さほどの出世をとげていないのは、浅野長政や加藤清正、福島正則のような秀吉の縁者でなかったことと、才気走った男の好きな秀吉の目からみれば、伊右衛門は鈍な男としかみえなかったからであろう。

「大領をまかせるに足らず」

と秀吉はみていたにちがいない。

いずれにせよ、二度にわたって主君の治乱興亡を見てきている。

見てきたわりには、信長からもさほどに重用されず、秀吉からも、実歴そこそこにしか待遇されなかった。

(故秀吉から重視された連中が、むしろいまは自家の保全のみを考え、家康の門に走っては機嫌をとっている。かれらでさえそうだから、自分のように、さほど重用もされなかった者が、秀頼公のことをやきもき思うことはない)

と思うのだが、小心な男だけに、いま一つ気持が割りきれなかった。

「いちど、こういう政局からお離れあそばして、掛川城にお帰りなされては? 領内のことも、ずいぶん捨ておきになっている事柄があると存じます」

と千代が、いわばそういう「療法」を指示してくれた。なるほど、と思った。

幸い、秀吉の病いのためにながらく諸侯の国帰りが沙汰やみになっていたのだが、にわかに、

「帰国おかまいなし」

という命令が出たのである。

この帰国許可については、家康のふかい策謀がある。

家康は初夏のある日、豊臣家の執政官である五奉行のうちの浅野長政、増田長盛、長束正家を大坂から伏見城によびつけ、

「わしは秀頼様の代官として天下の政務を見ているわけだが、ひとつ気にかかることがある。諸大名が、故太閤御病中ながらく帰国しておらず、朝鮮遠征の大名も、大坂・伏見にもどってきて帰国していない者が多い。そのため来年の秋から冬まで、国許(くにもと)に居ることをゆるす」

といった。

この政令はもっともなことで、どの大名も国もとの用務が山積しているのである。

「一同、よろこびましょう」

と、三奉行とも退出したのだが、家康の肚は別にある。諸侯の留守中に、天下取りについてなすべきことはすべてやってしまおうと思っていた。

とにかく、この政令にもとづき、伊右衛門も帰国ねがいを出し、ゆるされた。

「千代。加賀の前田利長どのも、会津の上杉景勝どのも中国の毛利輝元どのも備前の宇喜多秀家どのもみな帰るそうだ」

「まあ、およったりとも大老職ではありませぬか」

残るは、家康だけになる。家康はなにごとかをたくらんでいるのであろう。

「四大老を帰国させるだけではない。その下の三中老(生駒、中村、堀尾)もみな帰国する。そう

いう大どころがみな帰るから、われわれ小さな大名はほとんど帰ってしまう。伏見、大坂はからっぽになる」

「ずいぶん」

見えすいたことを、と千代はつい家康批判の言葉が口から出かけたが、伊右衛門に先入観念を植えつけてはいけないと思い、

「ずいぶん、大坂も静かになりましょう」

「そうだ、大坂城下で諸大名がひしめいているからいろんなことがおこる。当分、世の中はおだやかになるだろう」

いわば政治休戦になる、というような意味のことを伊右衛門はいった。

「そうですね」

と千代はさからわない。政治休戦どころかこの政治的空白期に、家康はどんな大いくさのたねを仕掛けておかないともかぎらない。

「とにかく、留守中はたのむ」

と、伊右衛門は七月のはじめ、大坂屋敷を出発して、帰国の旅程についた。

千代は、留守をまもった。

この留守が大変だった。山内家の重臣は主人伊右衛門に似て朴訥（ぼくとつ）な性格の者が多く、政治むきのことがにがてだった。

大坂城から使いがくるたびに、

「奥方さま、これはいかがとりはからいましょう」

と、小さなことまで相談にくる。

千代はそれにいちいち答え、処理の仕方をさしずしていたが、ついに、

「山内家は女大名」

という評判が出た。

この評判を、たまたま遊びにきた望月六平太からきいたとき、

「おお、いやだこと」

と、千代は思わず叫んでしまった。これほどいやな言葉はない。

第一、こんな評判が出ては、千代にとって表看板であるかんじんの伊右衛門が無能だということを宣伝しているようなもので、夫婦にとってこれほどまずいことはない。

「六平太どのがそう触れてまわっているのではありますまいね」

「とんでもない」

「じゃ、打ち消して歩いてください」

と、手きびしくいった。

九月九日は、重陽（ちょうよう）の節句である。

その数日前、伏見城にいる家康は、なにを思ったか、にわかに大坂城に使いを送って、

「秀頼様へ、重陽の参賀に参ります」

といった。大坂へ来ても秀頼に伺候せぬ家康が、である。

――めずらしいことがあるもの。

と千代は思った。そこは女で、

(内府さまも、優しいお心がおありなのだ)

とおもい、涙のにじむ思いだった。老臣が幼君を守り立ててゆくという姿は、たれがみてもうるわしい光景なのである。

ところが、千代があとで気づいたことだが、家康はあきらかに一つの目的があって、こういう布石をしたらしい。

家康が大坂に入り、石田三成の旧邸を宿にしたのは、九月七日のことである。

この日、にわかに大坂にうわさが立ち、

――徳川殿が参賀されるのを幸い、殿中で暗殺しようとしている者がある。それは加賀の前田利長に意をふくめられた浅野長政らである。

というものであった。むろん、すでに帰国した前田利長もまだ大坂にいる浅野長政も家康をひどく怖れ、家康に随順しようとしている連中で、暗殺など、夢にも考えられない男どもなのだ。

(おかしなうわさだ。ひょっとすると、徳川殿がご自身でお立てになったうわさではあるまいか)

と思いつつも、千代は乾彦作ら家老をよび、

「ご殿中で万一、騒動があれば城下は合戦場になるかもしれませぬ。わが山内家はいずれにも加

担せず、この場はいざという場合に秀頼様御警固に役立つべく人数だけは部署しておきなさい。鉄砲の火縄なども、かならずしめらせませぬように」

と言いつけた。

家康は、九日の辰ノ刻、井伊、榊原(さかきばら)らかれの直参大名十二人を従え、警固厳重にして登城し、秀頼に謁した。

対面がおわっていよいよ退出となるや、

(退出のときこそあぶない)

と御殿の玄関には出ず、いきなり廊下からなんと大台所に出た。

殿中の坊主たちは、あれよあれよという間に家康は台所の中央に立ち、

「あれをみよ」

と、部将榊原康政に指さした。

台所の真ン中に、当時、大坂城台所の大行燈として天下に有名だった行燈がある。二間四方の燈台のようなもので、

「関東者の目馴れぬものぞ。めずらしいものゆえ、供の者にも見せよ」

と命じた。榊原らは、はっと頭をさげて土間にとびおり、本丸下に詰めていたおびただしい人数を中ノ口から引き入れ、あふれるばかりに台所に詰めさせた。

もはや、暗殺など、できるわけがない。

そのさわぎの中を、家康はさっさと下城してしまった。

家康は伏見城に帰ってから、すぐ五奉行のうち増田長盛、長束正家をよびつけ、

「大坂城内にはいかがわしいうわさが多い。先日の一件もそうである。それがし、故太閤より秀頼公の後見を命ぜられていながら、ほど遠い伏見城にいる、ということも、不届き者の暗躍をゆるすことになっているのであろう。大坂ならば政務もとりやすい。城内西ノ丸に移りたい」

といった。内実はともかく、表面上もっともなことなので、

「左様ならばご用意つかまつります」

と二人の奉行は答えた。

十月一日、家康は大坂城西ノ丸に入った。

西ノ丸で諸侯に謁見する様式も、本丸にいる秀頼とおなじようにさせた。事実上の、

「天下様」

のすがたをとりはじめたのである。

千代が、大坂屋敷の留守をしているあいだに、さまざまなことがあった。

伏見にいる家康が、にわかに大坂城西ノ丸に移動したことである。

家康が伏見で秀頼のために天下の政務を代行するというのは、秀吉の遺言(ゆいごん)でさだめられたことであったが、

「伏見では諸事不自由であるから」

といって、家康は大坂へやってきた。

その報をきいたとき、千代はさすがに、顔色がかわる思いであった。

(徳川殿は、豊臣の天下をおとりあそばすご本心、いよいよ露(あらわ)になされた)

このところ、さまざまの情報が、千代の耳に入っている。

豊臣家の官僚団は依然として家康に対して疑惑をいだき、江州佐和山城にひきこもった石田三成を中心に兵をあげるといううわさもあり、

――それを徳川殿はどうなさるか。

とみていたのだが、家康みずから徳川家の諸将をひきいて大坂城西ノ丸に入ってしまったのである。

家康は、機先を制したのであろう。

なぜとなれば、豊臣家の反家康派が、日本一の堅城である大坂城に立て籠れば手におえなくなる。それよりみずから大坂城に入ってしまえば問題はない。

(ぶきみな)

と思うほどに千代は感心した。やりかたに、秀吉の創業時代のような明るさはないが、それだけに一種の気味わるさがにおう。

じつはここに插話がある。

「徳川殿、西ノ丸ご移駐」

というはなしをきいたとき、とっさに頭にうかんだのは、北政所のことであった。

北政所は、秀吉の死後、髪をおろして尼になり高台院と称し、家康がこんど移駐した西ノ丸に

住んでいたのである。

ほんの半月ほど前、千代は呼ばれてお物語の相手になってさしあげた。その尼姿をみたとき、

（まあ）

と、胸のふさがれる思いがした。容色が依然としておとろえず、それだけに尼姿がいたいたしすぎるようであった。

「千代どの、世間が日ごとにさわがしくなって参りましたね」

と、従一位高台院はさびしそうにいわれた。つづいて、「こういう晩年を送ろうとは、夢にも思っておりませんでした」といった。

万感をこめた言葉であった。

官位こそ日本の女性のなかで最も高く、しかも故太閤の正妻だったはずなのに、本丸にはいまは秀頼、淀殿母子がおり、自分は西ノ丸住いであった。その上、城内の家来は秀頼中心で、自然、秀頼の実母である淀殿が、事実上の大坂城主のようなふんいきのなかにいる。

「ご機嫌を」

と、横あいから老女の孝蔵主がいった。

「お伺いしに来る諸侯も、すくなくなりました。ご時勢でございましょうか」

ところが、家康だけは、しばしば使いを寄越してご機嫌を伺ったり、季節々々の進物などを怠らず、かわらぬ心でいるらしい。家康には高台院の潜在政治力を利用しようという下心があってのことだろうが、寡婦（かふ）になった北政所には下心が何であるにせよ、うれしいことであった。

「千代どの、太閤様なきあとは徳川殿をお立てなさるように」

と、高台院ははっきりといった。

しかも、あとで知ったことだが、家康が大坂に来るとなると、高台院はさっさと西ノ丸を明け、京都の三本木に移ってしまったのである。家康の活動の便宜を高台院はできるだけはかっている様子だった。

（高台院さまの御意のままに）

と、千代はそう思うようになっていた。そこに山内家の行動の基準をおこう、といまこそはっきりと決意した。

今後、千代のみるところ、家康が豊臣の天下をうばうであろう。豊臣の諸将がそれに加担するかどうかであるが、いずれにせよ家康を正妻の高台院さまが、積極的に応援なされているのである。

淀殿には、つきたくない、と思った。女の本音かもしれない。千代は、性的道具にすぎぬ側室という存在を、じつのところ身ぶるいするほどきらいだった。

淀殿には、豊臣家の執政官である奉行以下の文治派といわれる大名がついていた。長束正家、増田長盛、そして佐和山にひきこもっている石田三成などである。

いずれも伊右衛門とはつきあいが薄く、それよりも、北政所が掌握している加藤清正、福島正則など武断派の大名とのほうが、郷里を同じくしていることでもあり、交際がふかい。

家康が、高台院を抱きこむことによってそれら武断派の諸将をひき入れようとしていることは千代の目にもあきらかだったが、

「その徳川殿に、万一のばあいは加担しなさい」

と高台院からいわれた以上、山内家のような小大名の場合、大義名分ができたようなもので、ひどく安心ができた。

年の暮れになって、伊右衛門がかえってきた。

千代は留守中のさまざまなことを報告するについて、伊右衛門の気持が、自分とおなじ結論におちつくように物語った。

「きめたぞ」

と、千代の話がおわったあと、伊右衛門は大きな声でいった。

「どうおきめなされました」

「豊臣家の諸侯が真二つに割れるとき、わしはためらいもなく徳川殿につく。千代も左様に心得ておけ」

「はい」

千代は、可愛くうなずいた。

「考えてみれば、千代、余分な思案の要らぬことであった。武士というものは、鎌倉以来自分の土地を安堵してくれる側につくのが本筋なのだ」

と伊右衛門はいった。一所懸命ということばがある。一所とは、自分の所領のことだ。それにいのちを懸ける、というのが、一所懸命の語源なのである。古来、武士の大鉄則であって、天下の主がたれであろうと、自分の所領を安堵してくれる側につくのである。

平家が興れば平家につき、源氏が興れば源氏について、土地を保全してもらうのが武士の考えかたの基本であるべきであった。

「それを忘れていた。秀頼ぎみのことをとやかく思ってみたが、七歳のご幼童にましますあの方が、わしの掛川六万石をまもってくださるとは思えない。やはり、徳川殿をたのむべきである。たのむ以上は、働くべきである。そうではないか」

と、伊右衛門は、千代にしゃべることによって自分の考えをまとめている様子であった。

「秀頼ぎみのゆくすえが立つことを考えてさしあげるのは、また別の問題だ。それをわしはともすれば混同し、そのため考えが動揺し、大信念が湧かず、つい行動もにぶりがちだった」

伊右衛門はさらにいう。

「秀頼ぎみが成人なされば、徳川殿が自家の大名として保護なさるであろう。たとえば太閤が、故主信長公の御嫡孫、秀信様を岐阜十三万三千石の一諸侯になされているように」

慶長五年の元旦をむかえた。

秀吉生前のころとおなじく、大坂城では諸侯総登城の上、本丸の秀頼のもとに伺候して新年の賀詞をのべた。

が、諸侯一同、すぐその足で西ノ丸へゆき家康に対して賀詞をのべた。諸侯にとって秀頼のほう

はむしろつけたりで、西ノ丸の家康のもとにゆくことが目的であるかのような賑々(にぎにぎ)しさであった。
家康も、すでに天下様のような態度で諸侯の礼を受け、しかも家康はそのにぎやかさをさらに効果づけるために、猿楽の興行などをして諸侯の目を楽しませた。
諸侯も大いにはしゃいだ。
（人の心は、変わるものだな）
と、その猿楽を見物しながら、伊右衛門はつくづく思った。
（時勢が人を変えるものらしい。どの大名も、徳川殿を押したてることによって、自家の運命をひらこうとしている。かつて、故秀吉公が明智光秀と山崎で戦ったとき、秀吉公を押したてた織田家の諸将が、秀吉公によって自家の運をひらこうとしたように）
ところが、この賀正の席に、はるばる会津から上杉景勝の臣藤田信吉という者が、主人景勝の代理できていた。
（ほほう）
と伊右衛門だけでなくたれもがその会津上杉の使者を好奇心をこめた眼ざしでみた。
なぜならば、
（上杉景勝が、家康を打倒すべく百万石の地をあげて戦備をいそいでいる）
といううわさがあったからである。一説では三成と呼応し、東西両方で挙兵して家康を討つという。
使者はその叛乱国からきた。みな注目するのも当然であろう。

「しかも、千代」
と伊右衛門は帰ってから驚きに堪えかねたような声でいったものである。
「その使者の藤田信吉に対し、徳川殿は冷遇するどころか、譜代の家来どもを応対につけて至れりつくせりの歓待ぶりだったぞ」
「ふしぎですね」
千代も笑いだした。秀吉が死んでから、人がみな、狐か狸になってしまったような気がしたのである。
「わからんなあ、千代」
「その会津上杉景勝どののお使者の藤田信吉というのは、どのような人でございますか」
「以前聞いた覚えのある名だ」
伊右衛門も思いだせないらしい。
さいわい、日が暮れてから、忍びの六平太が遊びにきた。人並に元旦のあいさつにきたのだ、という。
千代は、ちょうどいいと思い、上杉家の家老藤田信吉とはどんな人か、ときくと、六平太はよく知っていた。
「裏切りの常習者です」
と六平太はいう。
はじめ、甲州武田家の家来で、上野(こうずけ)沼田の金剛院城を守らされていたが、その後上杉家に仕え、

途中信州の真田氏と内通したというはなしもあり、さらに上杉家にもどり、上杉家が越後にいたころには長島城主として主家の兵を率いて佐渡を征服し、上杉家が会津に転封になってから、大森城主になった。

要するに、腕はあるが場合によっては主家を売るかもしれぬような危険性をもった男であるらしい。

(その男が裏切り癖があるのを見こんで、徳川殿が、なにかに利用なさるおつもりらしい)

と、千代はみた。

だけではなく、その裏切り癖のある男が、いまの暗雲の垂れこめた政局を、意外な方角に転換させる重要なカギをにぎっているように思われてならなかった。

数日後、また六平太がやってきて、

「面白いことになりそうですぜ」

と、政情報告をしてくれた。

例の会津上杉家からきた使者藤田信吉は、はたせるかな家康に、

「景勝はご謀叛をたくらんでおりまする」

と、主家を売ってしまった、というのである。

「とにかく上杉家は」

と六平太はいった。もう大っぴらに謀叛の支度をしている、という。領内でさかんに出城をきずき、軍事道路をつけ、有名無名の牢人を大量に召しかかえつつあるというのであった。

家康は、藤田信吉の裏切りをよろこび、この男に太刀、時服、銀子などをおびただしくあたえ、将来の保障さえあたえた。

つまり、

「主家に戻ってから、もしそなたの密告があらわれ、成敗しようという騒ぎになれば、いつでも江戸へ逃げて来るがよい。応分に召しかかえて進ぜる」

と、約束した。

「人の心とはあてにならぬものですね」

と、千代は政治問題からはなれて、信吉という人柄を憎んだ。

家康の信吉抱きこみがうまく行ったのは、徳川家の家来のなかに武田家の遺臣が多く、信吉の旧知が多かったからで、ふるい仲間たちが、家康の意をふくんで信吉に説き、裏切りをすすめたらしい。

「とにかく」

と、六平太がいった。

「徳川殿は、むしろ、上杉氏の謀叛を待っているようでありまするな。上杉氏が、打倒徳川の旗をあげる、待っていたといわんばかりに徳川殿は、秀頼公に請うて豊臣氏の大名をごっそり連れて討ちにゆく」

上杉討伐が目的ではない。

家康は、平和を極度に怖れていた。このまま無事平穏がつづけば、豊臣体制がそのままつづくということになる。つまり、家康の位置も死ぬまでかわらぬ、ということになる。

乱が、おこらねばならぬ。

そのためにこそ、家康は、傍若無人に秀吉の遺言や残した法度をやぶって、叛骨のある大名を刺戟しようとしていた。

「要するに徳川殿がほしいのは、乱ですよ」

と、六平太もいった。乱のたねを求め、それを征伐するという名目で軍事行動をおこし、一挙に天下を取る、というのが家康の方針であろう。

「加賀の前田家の場合も、そうでしたね」

と、千代は、思案をしながら、そうつぶやいた。前田家の場合、というのは、利家の死後、そのあとをついだ利長が、根も葉もない謀叛のうわさを立てられ、それを家康がしつこく追及して、

「討伐する」

といいだしたのである。つい、さきごろのことであった。

家康は、残念であったろう。

前田利長はおどろき、弁口の達者な家来をつかわしてかろうじて家康の怒りをなだめ、大事にいたらなかった。

相手が、上杉であれ前田であれ、かれにとってどちらでもよいのだ。要するに、豊臣軍団をひきつれての軍事行動をしたい、軍事行動中にうまく機をとらえて政権をとってしまう。

そう考えているにちがいない。

「もし家康殿が行動をおこされたら、ご当家はどちらにつかれます」

「いずれにせよ、家をまもってくださるほうにつきます。六万石の家士とその家族をまもる責任が、対馬守殿におありでしょうから」

と、千代ははっきりといった。石田三成や上杉景勝では、そういう保障はできないであろう、と千代は思うのである。

そのうち、伊右衛門は領国での用事が片づかぬため、またまた大坂を留守にして遠州掛川城にもどった。

千代は、ふたたび大坂における山内家の外交方針や処置をきめてゆく仕事をひきうけざるをえなかった。

ところで。

いまのところ、政局の緊張は、東北における上杉家の動きにかかっている。

千代は、その動きと、家康の意向、諸侯の反応、世論などの情報をあつめることに専念した。

上杉問題は、いよいよ悪化の一途をたどっている。

例の上杉家の使者藤田信吉が帰国するとき家康は、

「景勝どのは、豊臣家の大老の一人である。天下の仕置（政治）についていろいろ相談したいこともあるから、豊国廟（秀吉の廟所。のち家康によって破壊され、明治になって別格官幣社として再建）

へ参詣かたがた、上方へのぼって来られよ」

と伝言させた。

ところが、景勝は無視した。上方へのぼれば家康に叛逆の汚名を着せられ捕り殺されるがおちだ、と景勝はみていた。

無視しただけでなく、いよいよ大ぴらに戦備をととのえはじめ、若松城下の西方、佐野川にのぞむ神指原（こうざしばら）に堂々たる新城を築きはじめ、これに募集した人夫は八万人という評判が、大坂まできこえてきた。

さらに三月十三日。

この日はちょうど先代謙信の二十三回忌にあたっていた。上杉家ではその大追悼法要をいとなむという名目で、国内の諸城主を若松城にあつめ、実は攻防戦の作戦計画を練った、というおどろくべき事実も、すぐ上方につたわっている。

密告の犯人は、藤田信吉であった。かれは上方から帰ってほどなく、

——領内の様子がずいぶん上方に洩れているらしいが、藤田がくさいのではないか。

と疑われ、

——斬る。

という意見まで出て、ついに居たたまれなくなり、その三月十三日の法要の当日、会津を脱走して江戸へ駈けこんだのである。

そのため、大坂の家康には、上杉家の動きが手にとるようにわかった。

そこで家康はその情報をむしろ積極的に諸侯に流した。

だけでなく、毛利輝元、宇喜多秀家といった大老や、増田長盛などの奉行をまねいて、

「上杉を討伐する。ご賛同ねがいたい」

といった。

大老や奉行はおどろき、「まだ太閤がおなくなりになって日も浅く、かつ秀頼公は幼弱である。このとき戦乱をおこすのはどのようなものか」と常識論をもって家康に反対し、「上杉のこともみなうわさでござる。謀叛の事実があるかどうか、使いを下向させて真意を問いただせばいかがでございましょう」といった。

もっともな意見だから、家康は、承服せざるをえない。

そこで、家康は、使いをくだらせた。

ところが、上杉景勝はけんもほろろの返事をした。

「私が秀頼公に叛意ありと申される。ばかなことだ、ご幼君にそむくわけがありますか。また武具を仕入れているという。武士の家に当然なことだ。いずれにしても、この一件にはざんげん人（家康）がいる。そのざんげん人にこの一件を問いただし、事実かどうかをお調べくだされたい。それに、私は大老であるが、いまのところ徳川殿とならんで天下の政治を見るのはいやでござる」

上杉景勝の返事、無礼といっていい。

無礼どころか、家康に対する公然たる挑戦とみていいであろう。

（すてきな）

と、千代はため息の出る思いで、このうわさをきいた。

（さすがに名将謙信公の血をうけられた方だ、会津中将どのは快男児にまします）

と、千代は、上杉景勝という男の、筋肉質の風ぼうを思いうかべた。

（男はすがすがしきが良し）

と、千代は男の美の基準をそこに置いている。おごれる家康の頭上に会津百万石の主は、かなわぬまでも鉄槌をくらわそうとしている。

そういう情景だけで、一編の詩になるではないか。事実、詩にならぬような男は、千代の基準からいえば、美しからぬ男であった。

（私が男なら、景勝どののようにふるまいたい）

と、心から思った。

が、千代は男ではない。

女である。しかも、いっこうにすがすがしからぬ伊右衛門の妻であった。

（だから、別の生き方をしている）

と、われながら、思わざるをえない。長いものには巻かれろ、という堅実な生き方を。

（私には、それしかないのだ。夫を、能力いっぱいに生きさせてゆくしか。……）

さて、景勝。

その景勝よりも、家老の直江山城守兼続のほうが、さらに驚くべき手紙を、豊光寺承兌を通じて家康に投げつけている。

家康もこの手紙を読んだとき、

「この年になるまで、これほど無礼な手紙をもらったことがない」

と、つぶやいた。

ながい手紙だから、大意を紹介すると、

「主人景勝について豊臣家へ叛意あるやの疑いであるが、ばかげている。家康には表裏がある。景勝に異心があるのか、それとも家康に表裏があるのか、世間の評判にまかすばかりだ」

また、

「武具を集めているというおとがめであるがこれまた当たらぬ。なまけ者の上方武士は、茶道具などの人たらし道具を所持されていようが、当方は田舎武士である。槍や鉄砲、弓の道具をととのえておる。その国々の風俗と思われよ。とにかく天下を知らるるお方（家康）にも似合わぬことを申される」

文中、

「一笑々々」

という家康を嘲弄する表現までつかっている。かつて家康が景勝に対し、「上方へ出てこい」と強要した理由の一つに、「朝鮮へもう一度出兵せねばならぬというような議も起こっているから」というありもせぬ子供だましのようなことを述べたことについての返事のなかに、「高麗へ出兵するなどは大うそであろう、一笑々々」と直江山城守はいっているのである。

要するに、豊臣の天下を盗み取ろうとする家康の野望を、景勝は「義戦」をおこしてくじこうとしている。これほどの手紙は利害からは書けない。かれらの胸中、正義の念が燃えあがっているのであろう。

この「挑戦状」が大坂の家康にとどいてから、世は騒然となった。

「秀頼様になりかわって上杉を討つ」

と、家康は言いはじめたのである。

豊臣家の中老、奉行はそろって家康自身の奥州下向をとめたが、

「いいや、わしじきじき討たねば、公儀（豊臣政権）のご威光にかかわる」

といって家康はきかない。家康にすれば、待ちに待った好機である。

千代は、いよいよ急迫してきた情勢を、毎日のように急飛脚で掛川の伊右衛門に書き送った。

六月二日、家康は、在国の諸将に、

「七月下旬には奥州の上杉征伐をおこなうから、出陣の準備を油断なくせよ」

と、豊臣家の大老の資格で命令した。

同時に、大坂にいる諸将にも、

「いそぎ、国もとに帰って出陣の支度をすべし」と下命している。

「いよいよ合戦ですね」

と、千代は留守居の家老の乾彦作に、さすがに身のうちの慄えるような思いでいった。

「しかし」

と、乾彦作は事態を軽くみていた。

「大したことにはなりますまい。たかが会津百余万石の一大名が乱をおこすと申しても、天下の兵をもって討ちとるのでございますから」

「彦作どの、ちがいます。これが口火になって天下の乱がおこりましょう」

ほどなく掛川の伊右衛門から書状がとどいて、

「当方は出陣の準備を怠りなくしている。なかんずく、兵糧は三年の籠城に堪えうるほどに運び入れてある」

という旨が書かれていた。

伊右衛門らしい、と思った。城の米蔵にある兵糧はせいぜい二年分ぐらいの貯蔵がふつうで、三年分という用心ぶかさはどうであろう。それに遠州の地が戦場になるわけではないから、籠城というのもおかしかった。

末尾に、

「そこもとの意見があれば、聞かせてほしい」

とあったから、千代はその夜、こまごまと手紙をしたためた。

「内府どのがひきいる諸将の軍がことごとく東海道掛川を通過します。三年分の兵糧は、その接待用としてぜんぶお出しなさればよいでありましょう。諸将の宿舎も、村々に手配りしてととのえておくべきです。また城は当然、内府の御宿館にあてられましょうから、本丸を一切明け渡し、

内府だけでなく徳川家のお旗本もそれに収容できるようにとりはからわれるがよいと存じます」

と書いた。

本丸を明け渡すというのは、武将の常識にない思いきったことだが、

「徳川殿にお味方するときめた以上、徹頭徹尾なさるがよく」

というのが、千代の趣旨であった。味方するときめた以上は中途半端なことはせず、城を家康にくれてしまうほどの覚悟でかかるのが大事である、と千代はおもっていた。

「この戦乱がどのように成りゆくかは別として、天下分け目の性質を帯びていることは、まぎれもないことでございます」

と、千代は書いた。乱世にあっては、一歩さき時勢がどう動くかという予想をたててかからねば、家はほろんでしまう。

「この合戦に、山内家の浮沈がかかっています」

と千代は書く。

「家康どのに賭けた以上、もはやなりふりかまわずに賭けた側のために働くのが肝心かと思います」

家康の側につく、と態度をはっきりきめているのは、秀吉恩顧の武断派といわれる諸大名であったが、東海道に城をもつ山内家をふくめた諸大名は、やや中立をたもっている観があった。その中立的態度をいまこそかなぐりすてよう、と千代はいうのである。

みずから捨てなくても、もはや、天下に中立的存在というものはゆるされなくなるであろう。

東征

六月六日、家康はまだ大坂にとどまっている諸将を大坂城西ノ丸に招集し、作戦会議をひらいた。

席上、堀監物（けんもつ）という大名が、

「内府」

と発言した。

「会津領を攻めるには、さまざまの難所がござるが、ことに白河から会津までの道中にある背炙（せあぶり）勢至堂（せいしどう）という所は道もけわしうござってな、先鋒の者どもは十分注意する必要がござりまする」

「ばかな」

と、家康は色をなした。

「たとえ左様な難所にもせよ、敵も槍は一本なれば味方も槍は一本。わが軍の槍がなぜ上杉の槍に劣るか」

家康にすれば、上杉家こそ日本最強の軍団であるという伝説におびえている諸将が、はがゆかったのであろう。

作戦会議は、会津を五境から攻めることにきめ、部署は、白河口を家康・秀忠父子が担当し、これは箱根から西の諸大名が従うことになった。伊右衛門もこの組に入る。

そのほか、仙道口は佐竹義宣、信夫口は伊達政宗、米沢口は最上義光、津川口は前田利長・堀秀治がそれぞれ諸侯をひきいてあたることになった。

家康は、この前日にすでに秀頼と淀君に謁し、出陣の暇乞いをしている。

山内家からは、乾彦作らが城内に詰めてすべての作戦を聴き取った。

屋敷へ帰ってきて千代に報告し、

「要するに、江戸に集まれ、ということでございます」

と話しおわって、いった。

「よくわかりました。すぐ、その旨、掛川へ急飛脚を立てますように。それに、大坂屋敷にはもはや人数は要りませぬ。十人ばかりを残し、いっさい、彦作が率いて国もとへお帰りなさい」

「しかし、十人ばかりでは御台所さまに万一のことがありましては」

「彦作、そなたは武士ではありませんか。ぐずぐず言わずに、屋敷をからにして戦場へ行くのです」

「奥方さま」

と彦作は、諸侯がぜんぶ国許へ帰ってしまったあとの大坂が不安らしい。

「うわさによりますれば石田治部少輔（三成）どのが、みなが出陣したあと、佐和山から出てきて大坂城に入り、上杉と東西呼応して兵をあげる、ということでございます。もしそうなれば、治部少輔どのは大坂にある諸侯の妻子を人質としておさえてしまいましょう」

「そのときは、女の身ながら戦うのみです」

「しかし、十人の小勢では」

「どこまで馬鹿でしょう、彦作どのは」

と、千代は笑ってしまった。

「たとえ二百人いても、多数に攻めかかられてしまえば自滅するのはきまっています。二百人でも十人でもおなじこと。おなじことなら、死ぬ人数がすくないほうが、よいではありませんか」

「これは」

乾彦作は、おそるおそる千代を見あげた。千代は、わざと翳のないあかるい笑顔をみせていた。

「これはもなにもありませぬ。そうなること。掛川に帰れば、殿に申しあげてください、千代はすでに亡き者とお思い下され、大坂でどのようなことがあっても後ろ髪をひかれるようなことはございませぬように」

「はい、たしかに申し伝えまする」

「それで、いつ彦作どのはご出発なさいますか」

「それは支度出来しだい」

「そのような悠長なことではなりませぬ。あす、とおきめなさい。戦さですから」

出陣のために江戸へ帰る家康の一隊三千人は、沿道、用心に用心をかさねつつ進んだ。

兵は、すべて具足をつけ、槍をきらめかせ鉄砲の火縄のしめらぬようにし、即時戦闘できる態勢にあったが、家康は平装であった。

頭には、「越前戸ノ口の笠」という菅笠(すげがさ)をいただき、身には浅黄のかたびらに広袖の黒羽織をつけ、馬だけはさすがに名馬で島津駮(しまづぼく)というものに黒塗りの鞍を置かせて乗っている。

途中、近江では石田三成の謀臣島左近が家康を襲撃しようとしている、という風説があったので道を変えて急行し、二十日は伊勢四日市着。

このあと箱根までの東海道の諸要所には数珠玉をつないだように城があり、ことごとく秀吉恩顧の大名でゆだんならない。

四日市では、付近の桑名城主氏家行広が、

「ぜひご馳走したいから、城へ立ち寄っていただきたい」

と申し入れてきた。家康は承諾したが、そのあとで城の様子をしらべさせると、

——どうも氏家行広の挙動があやしい。

というのでいそぎ取りやめ、四日市から船で三河の佐久島へ渡り、同国岡崎の城主田中吉政の出迎えを受けた。吉政も、

「食事の支度を致しておりまするが、受けていただけまするか」

と願った。家康は承知し、あといろいろと内偵したところあやしい様子もないので、その馳走

をうけた。

二十二日は、三河吉田(豊橋)を過ぎ、吉田城主池田輝政のもてなしを受け、二十三日は浜松着で、城主堀尾忠氏のもてなしを受けた。が、どの城にもとまらず、所々の大寺などを借りて宿にした。

二十四日は、伊右衛門が居城する遠州掛川へ出た。

「徳川殿はまだか」

と、伊右衛門は朝から何度となくつぶやき饗応の支度をととのえて待っていた。

「対馬守どのは苦労人である」

といわれているだけあって、こういう接待についてはかゆいところまで行きとどいた神経をつかう。

疑いを避けるために城の城門は、ことごとく八ノ字にひらかせ、番士には槍のかわりに棒をもたせ、しかも饗応する場所には城をつかわず、城下の侍屋敷、寺院をすべて開放し、そこに膳部などを用意させてある。

それだけではない。城内の米を大量に出して家康の隊の行軍用食糧として提供する用意をととのえ、また人馬のわらじをそれぞれ一万足を用意して待っていた。

昼前、家康の隊がついた。

伊右衛門の家来衆が機敏に働いてそれぞれの休息所へ案内し、家康に対しては伊右衛門ただ一人で出むかえて、寺院へ案内した。

「これはこれは対馬守どの、いつもながらご律義なおふるまい、おそれ入ります」
と、家康は大いによろこび、用意された昼食をうまそうに食った。
伊右衛門も、下座で相伴している。汁などをすすっているかっこうは、いかにも小心で篤実で信頼のおけそうな独特のふんい気があり、家康もつい、
「対馬守どののご風ぼうは、そのお国で拝見すると、一段と頼もしげでありまするな」
と、似合わぬお世辞をいったりした。
「いえ、どういたしまして」
伊右衛門は顔を赤らめるのだが、その態度も分の厚い感じで、軽薄さがない。
「いやいやこうしてみると、故太閤が信頼なされたとおりのお人柄でござるわ」
家康のほうが変に浮わついた感じで、伊右衛門のほうがずっしりと受け答えしている。
食事がおわって出発、ということになったころ、家康の謀臣井伊直政が顔色をこわばらせて入って来た。

(内緒ごとか)
と思い、伊右衛門は席をはずすべく膝を浮かしたが、家康は、
「あ、いや」
と手で制し、
「対馬守どのはわが一門も同然のお人じゃ。対馬守どのにきかれてわるい話などはない。そのまでおられよ」
歯の浮くようなことをいうのは、この場合は家康のほうがむしろ伊右衛門に取り入ろうとしている証拠であった。
「しかし」
伊右衛門は居づらい。
「いやいや、そのままで。直政、それにて用を申せ、何事であるか」
「はっ、されば」
といって、井伊直政が言ったのは、さほどのことではない。
今夜、島田にとまる。
あすの正午には駿府（静岡市）城下を通過する予定であったが、その駿府城主中村一氏が、「病いのため出迎えもできぬ」と使者をもっていま申し伝えてきた、というのである。
「それほど、重いのか」
家康は、顔色をかえていった。
変えたのも、むりはなかった。じつは大坂を出発する前、駿府の中村一氏から使者がきて、
「病いのため、従軍できぬ」
とことわってきたのである。
（さては異心を抱いておるな）
と、家康は、その方面の神経をとぎすましているときだけに、そう直感した。そのやさき、あ

らためて今の使者である。

　中村一氏は、通称を孫平次といい、早くから秀吉に仕え、次第にとりたてられて、最初は泉州岸和田城主、ついで近江水口城主、さらに駿府十二万二千二百石をあたえられて、駿府城をもらい、官名は式部少輔、とくに秀吉から信頼されて豊臣家の中老職までなっている。

　秀吉はかつて、家康を関東八州の大大名にするということで東海地方から箱根の東に移したとき、家康監視という戦略的役目をもって東海地方にとくに正直者で通った諸侯を置いた。

西からかぞえると、

伊勢桑名城　氏家行広
尾張清洲城　福島正則
三河岡崎城　田中吉政
同　吉田城　池田輝政
遠州浜松城　堀尾吉晴
同　掛川城　山内一豊
駿河府中城　中村一氏

といった配置である。

　そのなかでも中村一氏は、石高といい、官位といい、豊臣家における役職といい、この東海諸侯のなかでの旗頭（はたがしら）であり、現に秀吉が任命したときも、一氏は、

「それがしが駿府城にありますかぎり、関東のことはお心をわずらわせることではありませぬ」

といった。さらに家臣にも、

「関東にもし事がおこらば（家康がもし叛乱を起こしたならば）すみやかに兵を箱根に出し十分に支えて、関白（秀吉）の親征を待つ。それが、わが家の役目である」

と語っていた。

「対馬守どのにたずねるが、たしかに式部少輔（中村一氏）は、病気でござるか」

家康は、伊右衛門にきいた。

「はて、存じませぬ」

伊右衛門は、正直に答えた。かれは、中村一氏が病気かどうか、知らなかった。

たとえ病気であっても、城主が臥床中などということは世間に洩らしたくないのがこのころの武家のならわしである。伊右衛門が知らないのもむりはなかった。

「使いを走らせて、たしかめて見い」

と家康は直政に命じた。

　駿府城主中村一氏が病臥中であるかどうかをたしかめるために先行したのは、家康の使番（つかいばん）村越茂助であった。

　その茂助が小半日たって駈けもどってきたときは、家康は駕籠にゆられ山坂を行軍中であった。

「よう、茂助か。どうであった」

「いかにも式部少輔どのはご病気でございました」

と、報告した。
家康はほっとすると同時に、中村一氏を疑ったことが政治的に悪影響をおよぼすことをおそれ、
「そう信じていた。あの正直者の式部少輔が仮病をつかうなどは考えられぬ」
といった。
家康は二十五日、駿府城下に入った。このとき、伊右衛門はすでに兵二千人をひきいて江戸にくだるべく家康の軍旅のなかにあった。
（はたして、中村どのに異心ありや）
ということは伊右衛門にもわからなかった。いまほど人の心を量りかねることは、後にもさきにもないであろう。
駿府城下に入ると、中村家の筆頭家老である横田内膳が迎えに出ていた。
「やあ、ご苦労である」
と家康は上機嫌で内膳に言葉をあたえ、案内されるまま城の二ノ丸にのぼり、郭内にある内膳の屋敷に入り、そこで休息し、昼食のもてなしをうけた。
そのときである。ふすまがひらき、病みさらばえた中村一氏が家来の肩にもたれながらあらわれたのは。これには家康もおどろき、
「ほう、式部少輔どのではないか」
と、目を見はった。たれがみても瀕死の病人である。

「さあさ、それへ」
「はっ」
と、中村一氏は平伏した。
「お楽に、お楽に。かほどのご病体とは存じませなんだ」
と家康は、ひざをにじらせて一氏に近づき、その手をとり、しばらく感動のために声が出なかった。内心、一氏の病気がまことであったことをよろこんだ。もしこの箱根の番人に叛かれては、こんどの合戦はどうなるか、第一家康の命はどうなっていたかわからないのである。
一氏は、老いている。病いで気力も落ちたのか、涙をながし、
「それがしは、もはや長くありませぬ。それがし、死してあとのこと、当家のことをなにとぞよろしく頼み入ります。この度の御陣には弟一栄（三枚橋の城主）を身がわりとして参陣させまする。また、それがし家来新村嘉兵衛、大藪新八郎、小倉忠左衛門の三人をば、御家人のはしにお加えくださいまするように」
といったのは、三人の家老を人質にして家康に異意なきことを示そうとしたものであった。
家康はよろこび、
「そのようにする。この上は養生を専一になされて、一日も早くご本復なさるように」
と、備前長光の一刀を与え、駿府城を出、その夜は清見寺にとまった。
関東の領内に入ると、家康はほっとしたのか途中鷹狩りなどをして楽しみ、江戸に入ったのは、伊右衛門よりも一日あとであった。

伊右衛門は七月一日に江戸に入り、徳川家からの宿割りに従って宿営した。
すでに江戸城下には五十人ばかりの諸侯が参着しており、それらの人馬でごったがえしていた。
そのころには、
――石田三成が大坂で挙兵するらしい。
という観測が、濃厚になっていた。そうなれば諸侯の妻子は三成のために人質にとられるであろう。
（千代が、あぶない）
伊右衛門は気が気ではなかった。

大坂城下は、ひっくりかえるような騒ぎになった。それまで江州佐和山の居城にひきこもっていた石田三成が、
「逆賊徳川家康を討つ」
と公然と宣言して、大坂城に入ったのである。
（うわさのとおりだった）
とは思ったものの、千代はさすがに身も心もふるえるような緊張をおぼえた。千代がかつて経験したことのない大戦になるであろう。
ほどなく、徳川家をのぞいて日本最大の大名である毛利輝元が大軍をひきいて広島城を発し、大坂に入った。三成はこの輝元を説き、西軍の旗頭として、大坂城西ノ丸に入れた。

さらに、三成は、
「内府ちがひの条々」
といわれる家康への宣戦状を作った。十三カ条から成る家康への弾劾文で、同文のものを諸侯にくばり、
――右の次第により、秀頼さま家康を討滅なさるにつき、おのおの故太閤の恩をおもい、忠節をつくされたい。
と回状した。
その回状を持った城内からの使者が、山内家にもきた。留守をまもる服部喜左衛門、岡文左衛門らが対面し、書状を受けとった。
服部、その書状を千代へ。
「御使者の口上は？」
と、千代は書状をわざと手にとらずにいった。
「関東従軍の御主人に送られよ、とのことでございます。さっそく使者を選んで、関東へ駈けくだらせたいと存じまする」
「はい」
と、千代はうなずいた。
「されば御台所さま。それなる書状をご披見くださいますように」
「なんと書いてありますか」

千代は、小首をかしげた。
「はっ、ではそれがしが」
と、服部喜左衛門が書状のほうににじりよっておそるおそる取りあげた。服部にすればむりもなかった。千代が、公文書などを読むのがいやで、自分にかわって音読せよ、と言ったように受けとったのであろう。
「さればそれがし読ませていただきまする」
「喜左衛門は、文字に明るいのですか」
と、千代がくすくす笑った。この時代の武士で、文字をすらすら読める者は三人に一人ぐらいのわりあいだった。
「はっ、それが。……仮名は自在でござりまするが、真名（漢字）はにが手でござりまする。ははあ、御台所さまは、お意地わるであられまするな」
「どうしてですか」
「それがしが困惑するのを見物なさろうというおつもりで」
「いいえ。わたくしは、読めと申したのではありませぬ。その封書のあらましはお使者が口上で申したでありましょう。されば読む必要はありませぬ」
「は？」
「封書は封をしたまま、関東の殿様にお送りします」
と千代はいった。この一言がのちに伊右衛門をして大封を得せしめた、と後世ではいう。

千代にすればどうせ家康に付く、と方針がきまった以上、中途半端はいけない、徹底して味方すべきだとおもっていた。それには、石田方からきた公文書も見ない。
「見ないようにします。関東表へ送りは致しますが、殿様にも読んでいただかぬようにします。封のまま、家康殿に差しだしてしまう、というのがお味方として当然でありましょう。中身を見てからどうこうというのは、不純にとられます」
「なるほど、芸がこまこうございますな」
「いいえ、これが天芸というものです。いずれそなたたちにもわかると思います」
関東従軍中の伊右衛門への密使には、田中孫作という屈強の小男がえらばれた。
（本当かしら）
と、千代は興味をもった。孫作は一日に二十里も歩く健脚のもちぬしだというのである。が、田中孫作が密使にえらばれたのは、超人的な健脚というまるで物語にでもあるような理由からではなかった。
近江うまれだからである。
孫作は、近江国坂田郡高溝村の出身で、伊右衛門が近江長浜の城主だった時代に、つてがあって当家につかえた。
だから、近江ことばがつかえる。
というのは、石田方が、大坂にある諸侯の留守屋敷と関東従軍中の諸侯とのあいだに通信が行

なわれることをいやがり、大津に巨大な関所を設け、さらに同国の水口、佐和山にも関所を設けて東西の交通を遮断している。とすれば要するに近江一国をうまく通りぬけられれば関東へゆけるというわけだった。

このため千代は、

「近江の百姓が、京の親戚の不幸を見舞った帰り、ということにすれば近江は無事に通れましょう。とすれば、近江言葉がしゃべれる者で、できれば近江に生家をもっている者が最適です。たれかいますか」

というふうに年寄の服部喜左衛門に人選の基準をあたえた。服部は、

「されば、田中孫作がよろしうございましょう」

といい、都合のよいことに孫作は脚じまんで日に二十里は歩ける男でございます、といったのである。

千代は、孫作をよんだ。

「お顔をあげなさい」

と、千代がいった。

孫作は、年は三十五歳で、戦場で武者働きをするには多少、時期をすぎていた。それにいままで武運にめぐまれず、さほどの手柄もたてていない。幸い、おおせつかったこの大仕事をやることによって、武士の運をひらこうと決意していた。

「孫作どのはたしか、二人の子持ちでしたね」

「はい、上が男でございます」

「お留守は、ときどき千代が見舞ってあげます」

「いえいえ」

孫作は、ろうばいしてしまった。

「もったいないことでございます。武士が戦場へゆくのはあたりまえのことでありますのに、いちいち御台所さまが留守を見舞われるというようなことがあっては、かえって士が甘える気になり、御家の士風がゆるみまする」

「戦場とおなじではありませぬ。もっと危険の多いことですし、むずかしいことでもあります」

「はっ、死は覚悟しております」

「いいえ、生きて生きて生きぬかねばならぬお役目です。どのような恥辱に遭おうとも」

千代は、孫作を待たせておき、伊右衛門への手紙を書いた。

「西軍は、留守諸将の妻子を人質にとる、ということでございます」

と書き、

「しかしながら、わたくしの身のことはご心配になりませぬように、かなわぬときには自害して敵の手にかからぬつもりでございます。さればお心を乱されず、平素申されておりましたように徳川殿へのご恪勤（かくきん）、よくよくおつくし遊ばしますように」

この手紙は、八行であった。

それをコヨリにし、孫作がかぶる百姓笠のひもにないませた。

後に頼山陽が、

　一条ノ笠ニ繋(つな)グ八行ノ字

と詠んだのは、このことである。

孫作が、夜陰にまぎれて大坂を出発した。

その翌日、五奉行増田長盛から使者がきて、

「秀頼様の御命令でござる。奥方さまはお城にお移りあそばしますように」

と、高圧的に出た。諸侯の妻子を城内に強制収容しようというのであった。

なにしろ、使者は秀頼の命として伝えていることでもあり、家来たちはどう返事してよいか、使者と千代とのあいだをうろうろした。

(男なんぞは、こういうときには度胸がすわらなくて、頼りにならない)

と、千代はしみじみ思った。

「ではそのお使者とじきじきにお話することにします。書院にお通しなさい」

といい、化粧をなおした。

書院には、使者が待っていた。千代はさらさらと廊下をわたり、杉戸をあけさせ、さらにふすまをあけさせ、書院に入ると、正面上座にすわった。

「わたくしが、山内対馬守の妻女でございます」

「ははっ、申しおくれましたが、拙者は福原玄蕃と申す者にて」

と、かるく頭をさげた。四十すぎの男ですでに月代(さかやき)が禿げていた。

(月代を剃る世話がなくて、結構ですこと)

と千代は内心おかしかった。

玄蕃は、恰幅(かっぷく)のいい男だが、目と口もとがいやしい。

(あとでご馳走をするように言っておこう)

と、千代は相手の人相をみて、もう尊敬をはらう気がしなくなった。

「ご高名な奥方にお目通りを得て、果報しごくに存じます」

福原玄蕃は、じろじろと千代をみた。

(なるほど、美しくもあり可愛くもある。しかしどれほど利口なのか)

「お役目」

と千代はいった。

「ご苦労に存じます。さきほど家の者よりききましたが、なにか、わたくしが当屋敷に住むことはならぬ、と？」

「左様、大坂城に移って頂きます」

「わたくしに？」

「いかにも」

福原玄蕃は、ねっとりとうなずく。

「どなたのお言いつけでございますか」

「中納言様（秀頼）のお言いつけでござる」

というと、千代はくすくす笑いだした。

「なんでござるか」

「うそでございましょう。福原殿がお退屈のあまり、当家にからかいに来られたにちがいありませぬ」

「こ、これはけしからぬ」

「だってそうでありませぬか。福原殿は、いまどこに座られております」

「ここでござる」

「そこは下座でございましょう。秀頼様のお使者なら当家にとって上使、おすわりあそばすのも下座ではありますまい」

「いやいや、お判りの悪いことよ。つまり秀頼様のお言葉を受けて奉行増田右衛門尉様がそれがしをつかわしたわけでござる」

「やっとわかりました。それでは秀頼様のお言いつけでなく、増田どののお言いつけですね」

「いやいや、その増田右衛門尉が秀頼様のお言葉を」

「おだまりなさい」

と千代は言ったが、目はやさしく微笑っている。

「秀頼さまのお名前を濫用なさるのはよくありませぬ。要するに奉行の増田どののお言葉ではありませぬか」

秀頼はまだ数え年八つで、千代を人質にとるのどうのということは言うまい。

「日本国にある諸侯は」

と、使者の福原玄蕃がいった。

「いずかた様も同じことでござる。みなみな、奥方、御子様には大坂城内に移っていただく。御当家だけが駄々をおこねあそばす、というのはゆるされませぬぞ」

「それは、むりでございますよ」

と千代はさらりといった。

「で？」

「わたくしは、対馬守の妻でございますから」

「対馬守の言いつけしか聞きませぬ。わたくしにとって夫のみが、天地ただ一人の相手でございます」

「これは痛み入る」

福原玄蕃は、つい使者の立場をわすれて陽気な冗談をとばしかけたが、おんとこらえ、

「それはなりませぬぞ。御奉行の命令でござりまするぞ」

とおどしをかけた。御奉行とは豊臣家の執政官だから、大名にとってもっとも怖しかるべき存在である。

「いいえ。わたくしにとって旦那さまのみが大事で、お奉行などはなんのかかわりもございませ

ぬ」

福原玄蕃は怒るよりも、千代の語気にあわててしまった。

「それがしでござるゆえよいものの、時節柄、奉行衆のお耳に入ると、御当家のお為によろしくありませんぞ」

「でも福原さま、お奉行様がわたくしと添い寝してくれますか。添い寝してくださるのは、この世で旦那様だけではありませぬか。旦那さまの申されることだけをきくのはあたり前でございます」

「これはこれは」

福原は、唖然としている。

「とにかく、関東御陣にいます対馬守に意向を問いあわせたあとで、わたくしは進退をきめることに致します」

「そ、それはなりませぬ。そのような飛脚の往復を待っていてはどうにもならぬ。あすにも城内から人数を差し出してお迎えし奉ろうという事態でござる」

と言いすてて、ほうほうのていで山内家を辞してしまった。

そのころ、関東の征旅にある伊右衛門のほうでもさまざまの風聞をきき、

（ひょっとすると石田方が）

と、わるい予感がした。

（挙兵のあかつきには、諸侯の妻子を人質にとるのではあるまいか。そうなればおそらく千代は自害するにちがいない）

そう思うと矢もたてもたまらなくなり、物頭（諸隊長）の一人で市川山城という者をよび、

「そちは才覚者である。その才覚を見こんで頼みがある。いそぎ大坂へもどってくれぬか」

とたのんだ。

役目は、千代の身辺を保護し、かつ万一のときには千代を無事に大坂から落すことであった。

「死なせてはならぬ。頼む」

といったが、市川山城も武士である。このさきに未曾有の戦場が待っているのに、おめおめと後方へさがる気持にはなれない。

「殿、それはご無理と申すものじゃ。他の者をやってくだされ」

「いやいや、この役目はそちでなければつとまらぬ。千代を死なせてはならぬ」

「しかし」

「頼む、このとおりだ」

と、伊右衛門は、大将のくせに自分の家来に手をあわせて頼んだ。

こうまで頼まれてはことわるわけにはいかず、市川山城は、

「されば参りまする」

と、戦場の働きを思いあきらめた。

この市川山城という男。

山内家でも聞こえた勇士で、その名は他家にも知られている。別に、石見（いわみ）ともいう。

出身は、若狭の能登野という村である。この能登野村にふるくから土着していた地侍の出で、父は市川定照といい、若狭武田氏に仕えて剛強の人物だったらしい。

市川山城が、伊右衛門に仕えたのは、やはり近江長浜城主時代であった。長浜で伊右衛門がはじめて大名になったとき大量に召しかかえた家来のなかに、この男がいたわけである。

「市川山城は、打ち物（武器）はなにが上手じゃ」

と伊右衛門がきくと、

「火矢でござりまする」

めずらしいことをいった。

城攻めをするときにもちいる特殊兵器で、源平時代には単に矢のさきを燃やして弓をもって射こむだけのものであったが、戦国末期では火薬がもちいられるようになった。

大型の竹製の矢の尻に火薬をつめこみ、それに点火してロケットのように噴射せしめるものである。矢には三枚の羽がついており、尖端に炎がもえている。

発射は弓で射ず、手でとばした。手でとばす勢いと噴進用の火薬の勢いとがくわわってわりあい遠くへ飛ぶ。

城攻めのとき、堀ばたまで鉄砲ふせぎの竹束などを持って身をかくしつつ進み寄り、いざというときに投げる。火炎が飛び、敵城の炎（も）えやすい部分に突きささり、火災をおこさしめるのである。

操作はかんたんだが、ただこれを戦場でつくるのに火薬知識（火術）が要ったから、市川山城は貴重な人才であるといえた。

（ほう、この男は火術にくわしいのか。わしも大名になった以上、こういう男も必要であろう）

と伊右衛門は思って召しかかえたのである。

有能な男だった。かつて天正十八年の小田原城攻撃のとき、この男は城中へむかってさんざんに火矢を射こみ、敵の肝をうばったばかりか、秀吉さえも、

——空を火花が飛んでいる。あれはたれの陣から射ちだすものか。

と側近にきき、山内対馬守の陣中から飛ばしていることがわかると、

——伊右衛門は戦さ巧者じゃ。

と大いにほめた。

伊右衛門は小田原落城後、遠州掛川六万石に封（ほう）ぜられたとき、市川山城の武功を賞し、千石に加増した。

その市川が、単身密使となって千代のもとにゆく。途中、西軍の関所が多く、はたしてぶじ到着できるものかどうか、おぼつかなかった。

「変装するがよい」

と人もすすめたために、市川は考え、熱田神宮の禰宜（ねぎ）（神官）という姿をこしらえた。

さっそくカブトをぬぎ、烏帽子をかぶり、具足をすてて禰宜衣装を身につけると、ひげのぐあ

いといい、歩きかたといい、そっくりの姿になった。

その姿で、飛ぶように西下した。

ところが近江に入ると、いたるところに軍事用の関所がもうけられている。

市川山城はたくみに言いくらましつつ一つ一つの関所をすぎて行ったが、近江水口の関所に至って、

「その神職、待て」

と、いわれた。

水口は、西軍の将長束正家十二万石の城下で、関番所も大ぜいの武士が詰め、不審の旅人は手きびしくしらべあげて文字どおり蟻いっぴきも見のがさぬ警戒ぶりである。

関所の番卒から、

「待て」

と槍をつきつけられて、神職すがたの市川山城はゆっくりと立ちどまった。

「なんぞ御用でござるか」

「不審である。番所まで同道されよ」

と、番卒十人ばかりが市川のまわりを押しかこんで引っ立てて行った。

番所には、数人の組頭格の武士が詰めており、縁に腰をおろして市川を取りしらべた。

「おぬし」

と、武士の一人がいった。

「芸もないのう、大体、密使などというものは、僧にばけるか神職にばけるか、相場のきまったものじゃ。同じ化けるならもすこし、ちがったものに化けてわれらの目を楽しませよ」

「これは迷惑」

市川山城は、おどおどしていった。

「それがしは尾張の熱田明神の禰宜でござる。このこと、まぎれもござらぬ」

「月代のあたりが禿げておる。その禿げざまは、カブトをかぶったことのある証拠じゃ」

「無体な。これは禰宜禿げと申しましてな、年中烏帽子をつけておるゆえ、頭髪が蒸れてかようになったものでござる」

「うそをつけ、証人がいる」

と、武士は、さきほど関所に詰めていた組頭の者をよんだ。組頭は、

「拙者は、お手前を存じておる。山内対馬守の家中にて強弓(つよゆみ)とっては無双の精兵(せいびょう)、火矢をあつかってはは天下にかくれもない市川山城どのであろう」

(あっ)

と市川は驚いたが、相手の顔にはおぼえがない。おそらく相手は、市川が高名な勇士であるためにどこかの戦場で記憶していたのであろう。

「他人のそら似でござる」

と、にがにがしげに答えた。

「そうじゃ、市川山城と申せば若狭の産でもと若狭武田家に仕えていた者」
と、みな市川の履歴にくわしい。
「されば大庭弥兵衛も若狭の産で武田家にいたということをきいた。大庭をよべ」
と、組頭が大声でどなった。
大庭弥兵衛、ときいたとき、さすがの市川山城も半ば観念した。
少年のころからの知りあいなのである。知りあいどころか、武田家が滅亡してたがいに身を寄せる場所がなくなったとき、ともに主を求めて天下をめぐりあるき、やがて市川山城は山内家につかえ、弥兵衛は縁あって長束家につかえた。いわば苦難時代の思い出を一つにした親友なのである。
(大庭が居ては、露顕もやむなしじゃ)
と、市川山城は、かたわらの松の根方に腰をおろし、汗をぬぐった。
「そこな禰宜どの、どうじゃ、大庭がくるまでのあいだ、祝詞でもよまぬか。神職であるなら、祝詞ぐらいはよめるであろう」
「祝詞でござるか」
市川は、物ぐさそうに立ちあがった。
「当然なことでござる。神職でござれば祝詞ぐらいはよめる。よめるが、これは神を祝ぎ奉るもったいなきものじゃ。いたずらによんでは手前どもに神罰がふりかかろう」
「言うわい。ではどうすればよい」

「縁からおりて、下座されよ。ついでゆえ、諸公のご武運を祈ってさしあげよう」
「ほほう、これは奇特な」
と、そのあたりの者が素直に下座した。
市川山城は、ごく馴れた節まわしですらすらとよみあげた。
みな、感心した。
が、これは祝詞ではない。市川の家につたわる山伏の鳴弦の文で、節のつけようによっては祝詞にきこえるのである。
やがて、大庭がやってきた。
大庭は、背が高く、手足が異様に長く、どこか足高ぐもに似た男だった。
「なに、市川山城が番所にひっ立てられていると?」
と、番卒に問いかえした。
「たしかに市川山城か」
「さあそこがわかりませぬゆえ、大庭さまに首実検をねがいたいとのことでございます」
「すぐゆく」
と、太刀を鞘ぐるみでかつぎ、幔幕をはねあげて外へ出た。
(逃がしてやろう)
という決意がついていた。

この時代の武士は、ひどく個人的精神に満ちている。武功も名誉も自分一個のためのもので、自分が属している集団の利益というものをさほどに考えない。考えなくても不道徳にはならない時代である。だから大庭弥兵衛も、市川山城を逃がすことによって受ける「西軍」の損失よりも、

（なつかしや山城、おれが助けてやるぞ）

という個人的義侠心のほうが、まっさきに胸を占めた。それが「武士は相みたがい」というものであり、徳川時代の哲学用語でいえば武士道というものであった。

（ここで市川を売れば、わしの男がすたるわい）

と、大庭弥兵衛はのしのしと歩いてゆく。この時代の武士道というのはあくまでも男道で、おのれいっぴきの美節を立てることであった。

番所に着くと、

「やあ、市川山城はどこにいる。なつかしいわ、どこじゃ」

と、味方の組頭にきいた。

「あれなる松の根方よ」

組頭が、指をさした。

「どれどれ、どこに」

大庭弥兵衛は目をきょろきょろさせて、やっと松の根方の神職すがたの男を見、

「なんじゃ、あの禰宜どのか。なるほど、似とるのう、あっははは、そっくりではあるまいか」

「大庭、ちがうのか」

「ちがうちがう。市川山城は、あの禰宜どののように頬骨が高うないわい。眉もふといし第一、背が高いわ。背がわしよりも高いぞ」

「背が？　たしかにそうか」

「昔の朋輩じゃ。まちがいない。たいがい人間というのは朋輩を選ぶのに、背丈の似かようた者をえらぶものぞ。市川はわしよりもすこしは高い。あのようにちんちくりんではないわい」

「しかし」

と、市川を見覚えている者がいった。

「あの顔は、めずらしい骨相じゃ。二人といるはずがない」

「さればさ。市川山城という者は右脇の下に鉄砲傷があった。ぐりぐりとえぐれた大傷で、気味のわるさというのはなかった。しらべてみなされ。それがあれば、それこそ正真正銘の若狭能登野のうまれ、いまは山内対馬守一豊どの家来市川山城信定じゃ」

「そりゃ、よいことを申した」

と、一同、市川にとびかかり、禰宜どののごめん、ともろはだぬぎにさせてみた。ところが肌はすべすべとして傷一つない。

「なるほど、こりゃ別人じゃ」

と一同なっとくした。むろん、市川にはもともと傷などはなく、大庭の頓智である。

（ありがたし）

と市川は番所から出るとき、すばやく大庭に感謝の視線を送った。大庭弥兵衛は知らぬ顔でそ

っぽをむいた。

　のち、関ヶ原の役がおわってから、千代は、

　――その大庭弥兵衛と申す武士こそ当家の恩人です。さがし出して召しかかえてやってほしい。

と伊右衛門にたのみ、市川がさがし出して高禄で召しかかえた。

　何度かそういう危難に遭いつつ、市川山城が大坂の千代のもとについたころは、夏も過ぎようとしていた。

　千代は、旅塵にまみれた市川山城の禰宜姿をみたとき、すっかり涙ぐんでしまった。

「よく来られたものですね」

「はい。……」

　緊張がゆるんで、これほどの古豪が涙ぐんでいる。やがて顔をあげ、

「それがしが参着しました以上、御台所さまのお身を敵手に渡すようなことはございませぬ」

（伊右衛門どのはやさしい）

と、千代はつくづく思った。大坂の妻の身を思って陣中から物頭（高級将校）級の武士をひきぬいて下向させるほどの諸侯もないであろう。

「生死のことは覚悟しておりますが、なににしてもそなたのような才覚者がきてくれて心丈夫なことです」

「御台所さま、どのようなことがあっても自害などなされまするな、いえいえこれは殿のお言葉

でございます」

（わたくしが死んだら、伊右衛門どのはどうするだろう）

　そう思うと、千代はおかしかった。うろうろして途方に暮れるであろう。

「御台所さまに」

と、市川山城がいった。

「もし万一のことがございましたら、山内家は闇でございます」

「うそ」

　千代は、笑いをこらえるのに懸命になった。

「いやいや、真実なことでございます。家中でも世間でもそう申しております」

「山城は、ばかですね。そんなうわさを信じているのですか」

「………？」

「まるでわたくしが、めんどりがときをつくる、とかツノを矯めて牛を殺す、とかそういうわるい話にあるわるい女のようではありませぬか」

「とんでもない。そのようなつもりでうわさしている者は、家中でも世間でも一人もおりませぬ」

　市川山城は退出して衣服をあらため、髪をととのえ、もとの武士姿になり、留守居の服部喜左衛門らから大坂の景況をきいた。

　きけばきくほど、妻子を城内に抑留する、という城方の意見はつよいらしい。

「御近所のお屋敷の様子はどうか。やはりどことも城内に入ることをこばんでおられるか」
「どことも、こばんでおられるようすですが、くわしいことはわかりませぬ」
「聞きにゆけ」
「山城どの、むりでござる。大坂方では辻々に番所をたて、人数が詰め、夜中はカガリ火を焚き、脱出の警戒をしているだけでなく、隣り屋敷へゆくことも禁じております」
「できぬか」
「でありますから、様子が皆目わからず、困りはてております」
「よし、日が暮れたら問いあわせの矢文を射こんでやる」
そこは火矢の名人だから、この男は日暮れを待って、大屋根にハシゴをかけた。
やがてするするとのぼり、大屋根の鬼瓦のつけ根にまたがり、大弓をとりだして、四方八方の大名屋敷に矢文を射こんだ。
矢に、問いあわせの手紙が結んである。
それがあちこちの屋敷の庭に落ちたが、しかしどの大名屋敷も強弓を引けるほどの侍は戦陣に従っているため、返事の矢文というのは一筋もなかった。
翌日、大坂城下を震撼させたうわさがつたわってきた。
細川越中守忠興の夫人が、屋敷に火を放って自害して果てた、というのである。
(さてこそ)

千代はさすがに唇を緊張させた。つぎに城方が包囲するのはわが屋敷か、と思ったのである。
細川屋敷のもえる大火焔が、城下の南にあがったのは、この日七月十七日の夜九時ごろであった。
その夜、火事でございます、と市川山城が千代の自室の杉戸のむこうで大声を出したとき、千代はまさかこれほどの変事とは思わず、
「どの方角ですか」
といい、防火のために屋敷うちを固めるように命じただけであった。
ところがすぐ、
「城南玉造口の方角でございます。火の大きさからみて町家ではありますまい。寺院もあの方面には少うござる。おそらく大名屋敷でございましょう」
「火事装束を」
と、千代は命じた。
さっそく赤と黄のラシャで作った華美な婦人用火事装束がはこばれてきて、千代はそれをすばやく身につけ、
「殿様がお留守でありますから、わたくしが下知します」
と、正門のうち側、玄関の前に床几を出させ、奥女中の一人々々に薙刀をもたせ、千代は腰をおろした。
「諸門をことごとくあけますように」

「それはいかがなものでございましょう、奉行方（西軍）の人数がこのあたりの辻々に詰めております。門をあけるやいなや、それを幸いに押し入ってきて、御台所さまをお城に連れ去りはしませぬか」
「ふだん、火事のときにやっているとおりにするのです」
「しかし」
いまは、準戦時なのである。奉行方が押しこんでくれば千代はどうするのであろう。
「いいのです。奉行方が押しこんでくれば千代は及ばずながら戦い、対馬守殿の武勇をけがさぬつもりです」
といったが、千代は不覚にも膝がしらがふるえていた。
やがて門々がひらかれ、それぞれ固めの人数がおかれ、カガリ火が焚かれた。
そのうち、
「火事は、細川越中守殿のお屋敷じゃ」
と門前を騒ぎたてて走る町家の者の声がきこえた。
細川、ときいて、千代はあっと思った。
（まさか、奉行方が細川屋敷を包囲し、夫人を出せと強要し、そこで合戦がはじまったのでは？）とおもった。
「山城、門を閉じなさい」
とあわてていった。

「あはははは、御台所さまのご軍略もあてになりませせぬな。こんどは閉じるのでございますか」
「うん、閉じるのです」
千代は、侍女から薙刀をとり、石突をトンと地について立ちあがった。
「どうです、いい武者ぶりでしょう？」
「はあ」
市川山城は苦笑した。
「でも、ひざがしらがふるえているのです。やはり合戦や軍略は男ですね」
「あっははは、火事でよろしうございました。これが軍兵（ぐんぴょう）の打ちむかってくる合戦なら御台所さまのおへそがでんぐりがえりましょう」
「そうかしら」
千代はおへそのあたりをおさえ、
「まだどうにもなっていませんよ。山城、おそらくあれは火事というより合戦の火だと思います。山城のいう軍兵が、ほどなく当家にも来るでしょう」
ほどなく、小さな異変があった。
山内屋敷の裏門のあたりの塀の上に小柄な人影が浮かびあがったかとおもうと、ヒョイと内側にとびおりたのである。
「曲者っ」

と、警衛の人数が足音をとどろかせて押しかこむと、
「待った。なるほど曲者ではあるが、お家に不為(ふため)な者ではない」
連歌(れんが)の宗匠風のいでたちである。
「奥方様のもとにつれてゆけばわかる」
「なんじゃ、六平太ではないか」
と、あとから歩み寄ってきた市川山城が苦笑し、千代のもとに連れて行った。千代は、夜露をいとわず、玄関前の床几に、なお腰をおろしたままである。
「ああ、六平太ですか」
千代は、ひどくなつかしい声を出した。この男がくれば、城下の様子もわかるだろう。
「いや、それがしもいそがしうござってな、ご懸念は、あの玉造の火のことでござりましょう、うっふっ」
「なにがおかしいのです」
「よくお似合いになりますな。そのように火事装束を召しておられまするると」
と、無駄口をたたきながら話したところによると、火元はやはり細川越中守忠興の屋敷だという。
「奥方のお玉姫が、奥付家老小笠原少斎という老臣に薙刀をもって胸を突かせたまい、自害あそばされた、といううわさでございます」
「奉行方の人数が、細川屋敷を取りかこんでいたのですか」

「左様で」
「あの奥方様は、たしか切支丹(キリシタン)でいらっしゃいましたな」
「左様、その方の名を、ガラシャと申されます。御当家の奥方様もそうであられまするけれども、ガラシャ夫人は諸侯の奥方のなかでは、きっての美人でおわした」
「明智光秀殿の」
「ようご存じでありまするな、おおせのごとく逆臣明智光秀の娘で、細川家にとついでほどなく父光秀が本能寺ノ変をおこし、秀吉様に山城の山崎で討たれ、そのあと細川家では世をはばかってこの逆臣の娘を一時離別し、丹波の三戸野という庵にとじこめておりましたが、ほどなく世への遠慮も解けて復縁なされた、という苦難の多い御前歴をおもちでございます」
「それで、御自害の模様は？」
「まだそこまでわかりませぬ。わかり次第お聞かせに参りましょう。とにかく、奉行方の人数が細川家をかこんだ以上、御当家に参るのは、あすか、あさってか、用心の上にも用心なされまし、ということを申しにきたのでございます」
そういって、六平太はふたたび塀にとびあがり、闇の中へ消えた。
後日、千代は詳報を知った。

……

細川家の当主忠興は、その妻お玉をつよく愛していたが、病的なほどに嫉妬心がつよかった。
忠興は、東征軍の一将として大坂を発つときすでにこの人質の一件を予感し、

「きっとそういう変事がある」

と、留守居の老臣小笠原少斎にいった。

「わしと石田三成とは仲がわるい。石田はいざそういうときになれば、まっさきにわが家をねらうであろう。人数が、屋敷をかこみ、奥をさしだせ、という。少斎、そのときはそちはどうするか」

少斎は返事に迷っていると、

「そのときは、奥を殺せ」

と、忠興はいった。

異常な嫉妬心である。かつて自分の家来が、お玉と口をきいた、というだけで手討にした、といううわさのある武将だ。敵方の男どもの手にひったてられてゆくお玉を想像すると、たまらなくなるのであろう。

（いっそ）

と、忠興は、そこに落ちついた。いっそお玉を自害させてしまうほうが、まだしも気持がすくわれる。

はたして、奉行方では、細川家に対してはとくに執拗だった。

忠興が、その妻を当時の大名としては異常なほどに愛しているということも、その病的な嫉妬ぶかさも、世間にかくれもないことであった。

——妻のガラシャ夫人を城内におさえてしまえば、従軍中の忠興は苦悶し、ついに関東を裏切

るかもしれない。

というのが、奉行方の計算だった。

最初は、ひどく物やわらかな交渉の仕方できた。細川家に出入りしている尼僧の某をつかわして、

「もしお城にお入りなさるのがおいやなら、せめて隣り屋敷にでもお移りあそばしますように」

と尼はいった。

隣りは、宇喜多秀家の屋敷である。宇喜多家と細川家とは、姻戚関係にある。だから、というのが尼のすすめる理由であった。

しかし姻戚とはいえ、いまは宇喜多家は奉行方（西軍）についている。宇喜多家ではガラシャの身柄をあずかってしまえばこちらのもので、どう料理するかわからない。

細川家では、ことわった。

ついに、奉行方では、七月十七日の昼すぎ正式の使者をつかわし、

「幼君秀頼公へ忠順をあらわすため、夫人を城中へ差し出すべし。もしこの儀にそむくようなことがあっては、兵力を用いても曳きたてる」

と厳命してきた。留守居の老臣小笠原少斎は、

「考えてもみられよ、主人の留守中、奥方を城中にひきわたすなどは、臣として出来ることでござるか。留守居の者、ことごとく切腹つかまつるとも、奥方はさし出されませぬ。左様お心得あるように」

とはねつけ、そのあと小笠原少斎は夫人に拝謁し、意中をただした。

「その覚悟でいます」

と、ガラシャは答えた。

そこで夫人は、自分の血つづきの叔母で七十余歳になる老女と、加賀前田家からきた長男忠隆の嫁を隣家の宇喜多家にあずけ、さらに、

小侍従（洗礼名マリー）

とよぶ侍女をまねき、ふたりの女児をあずけ、

「この姫を、大坂教会のオルガンチノ神父さまのもとに避難させるように」

と命じた。姫は、ひとりは多良といい十三歳、ひとりは万といい三歳。

さらに、ガラシャは、実家の明智家からついてきて二十年もつかえてくれている霜という侍女をよび、

「わたくしは忠興どの、忠隆どのへ遺書をかきます。霜はここを落ちのびて、それを御陣中までとどけますように」

と命じた。そのあと、死装束を着用し、十字架を安置した一室に入り、天主に一生の罪のゆるしを乞い、ながい祈りをささげた。

その礼拝室には、侍女団がびっしりつめている。ガラシャの侍女団はほとんど切支丹十字に帰依していた。夫人とともに祈りながらみな身をもんで泣き、

――死の御供をゆるされませ。

とすがったが、ガラシャは、

「切支丹に殉死はゆるされませぬ」

と、かたくこばんだ。

ガラシャは宗教者として死のうとし、自分の死を荘厳にしようとした。彼女は礼拝室を死の部屋にきめ、泣きさけぶ女児や侍女たちに部屋から退出することを命じた。

残ったのは、老臣小笠原少斎ただ一人である。

夜八時になった。

屋敷のそとの物音がさわがしくなっている。包囲している城方の人数が刻々ふえているのであろう。

「どうやら、城方の人数がすきまもなく」

とりかこんでいるらしい、と少斎が耳を澄ました。門を打ちたたく音が、この奥まった部屋まで地ひびきのようにきこえてくる。

「少斎、わたくしが死んだあと、そなたはどうします」

「切腹つかまつりまする」

「切支丹におなりなされ」

「は？」

「切支丹なれば自殺は神のご法度になっております。死なずともよい」

と、夫人がすすめたという。少斎は苦笑して、それがし切支丹になるにはもはや時間がござりませぬ。たとえ地獄に堕ちようとも武士は武士の徳義にてこの老人は相果てまする、と少斎がこたえた、といわれる。

「少斎、そろそろであるな」

と、夫人はうながした。

はっ、と少斎は薙刀をとりあげ、片膝を立てた。

二人の間に、シキイが隔てている。夫人は礼拝室、少斎は次の間。

夫人はながい御ぐしを白いかいなを動かしてきりきりと巻きあげ、首を打ちやすいようにした。

少斎、

「おそれながら、左様ではござりませぬ」

とかぶりをふった。首は打たぬ、という意味である。

「ではこうか」

と、夫人は白い胸をくつろげた。左様でござりまする、と少斎は中腰になり薙刀を目の上にかまえ、キラリと刃を上にした。

が、夫人の胸もとまで刃がとどかない。

「ごめん」

と声をかけて奥の間にすすみ入ればよいのだが、少斎は忠興の嫉妬をおもい、

「奥方さまの御座の間に踏み入ることは、はばかり多うござりますゆえ、おそれながら、いますこしこなたにお出であそばしますように」

「こうか」

と、夫人は敷居ちかくまで膝を進め、イエス、マリア、ヨセフの聖名をとなえた。

「御免」

少斎が叫ぶのと、薙刀の刃が夫人の鼓動をとめるのと同時だった。

すばやく遺骸に用意の絹ぶとんをかけ、そのまわりに火薬をまきちらし、さらにフスマ、シトミ戸などをはずして遺骸のまわりに積みあげやがて火をかけた。

轟然と火焔が部屋に満ちた。

少斎はとび出し、同僚の河喜多石見とともに庭を駈け、門をあけ、わっとなだれこもうとする敵の軍兵に、

「待った。考えてもみよ、武士も武士によるわ、日本一の越中守忠興の妻が、あたら敵のためにとりことなるはずがあろうか。たったいまご自害あそばされたぞ」

と叫び、二人どっかと門前にすわり、衣服を押しひろげて割腹した。

そのときはすでに、火は殿舎の軒から軒へ走り、煙は屋根をつきあげて天にのぼっていた。

奉行方の人数はこの異変にあきれ、潮のひくように城へひきあげてしまったという。

そのはなしをきいた千代は、

「わが家も」

と、老臣たちにいった。

「細川殿の先例にならうゆえ、煙硝、わらのたぐいを屋敷うちに積みあげるように」
千代は、本気だったかどうか。
すくなくともそのように見せかければ、奉行方は驚き、人質を強行すれば、つぎつぎとこのような逆効果となると思ったであろう。そのせいか、人質の沙汰はやんだ。

話は、関東の伊右衛門にもどる。
すでに上杉征伐の諸軍はつぎつぎと江戸を発し、奥州街道を北上しつつあった。総数五万八千という大軍が、宿場々々にとまりをかさねつつ、ゆうゆうとした行軍速度で北をめざしてゆく。
家康が江戸城を発したのは、七月二十一日のことであった。
その日は鳩谷にとまり、二十二日は岩槻城、二十三日は古河にとまった。
家康が古河に宿営した日は、伊右衛門はそこから三里はなれた諸川という村をあてがわれて宿営した。
日が落ちてほどなく、伊右衛門の本陣になっている寺の山門に立った男がある。小柄な百姓である。
破れ笠をかぶり、旅塵によごれ、物乞いとかわらない。門の番卒が、
「どけ」
と追おうとしたが動かず、ゆうゆうと笠のひもを解きはじめた。
「ほう、これは田中孫作さまではござりませぬか」

と、番卒のほうが驚いた。
「そうだ、はるばる大坂からあとを追ってきた。すぐ殿様にお目通りする」
侍どもも飛びだしてきて門前は大さわぎになり、みな孫作をかつぎこむようにして門内に入れた。
「孫作、大坂に異変があったのか」
「知らぬ」
この男は、口がかたい。
「知らぬとは情のこわいことを言やるの。大坂では石田治部少輔どのが兵をあげるという風聞があったが、その後どうしたか」
「知らぬ」
と、孫作は玄関で足をあらい、衣服はそのままで上へあがった。
「殿は？」
「あいにくじゃ。隣りの宿陣の堀尾どののもとへ茶をよばれにゆかれた。たったいま門を出られたゆえなかなかおもどりにはなるまい」
「すぐお呼び致して来い」
と、孫作はにこりともせずいった。
「孫作、大そう憎体じゃの」
「急使である」

孫作はいった。

「なるほど、留守居衆からの飛脚か」

「いや、奥方様の使者としてきた」

「えっ」

みなとびあがるほどに驚き、すぐ侍大将の福岡、祖父江といった連中がみずから使いとなって堀尾の陣所へ伊右衛門をよびもどしに出て行った。

みな、千代の才器を頼りにしていたし、また伊右衛門自身が千代をひどく重んじているために一同、ひどく緊張したのである。

伊右衛門がもどるまでのあいだ、孫作はよほど疲れているのか、両手をついて犬のような姿勢でいる。

「横になったらどうだ」

「いや」

と首をふるばかりであった。

途中、駈けとおしに駈けてきたからでもあったが、難儀にも遭った。

実は、近江と美濃のさかいにある伊吹山の山中で、二十数人の山賊に出あったのである。

出発にさきだって千代から、

――どのような者に遭おうとも、闘争におよんではなりませぬ。

といわれている。孫作はおそれ入った風をし、みずから衣服をぬぎ、金を地面に撒（ま）き、脇差まで投げだし、それを賊どもがあらそい、取りあつめているうちに逃げ出し、すっぱだかに笠一つ、文箱一つをかかえてひた走りに駈けるうちに、土地の有福者らしい老人に出あった。

これを幸いとその老人をおさえつけて衣服脇差、財布を剝ぎとり、それを駈けながら身につけたりして、やっとここまできた、という旨を老臣たちに語った。

「なに、千代の使いが？」

と伊右衛門はおどろき、大いそぎで自分の宿陣に帰ってきた。

あたふたと山門を入ると、境内の松の根かたから黒い影がとびだし、伊右衛門の足もとにうずくまった。

「田中孫作でござりまする」

「おお、よくぞ無事についた。途中、辛苦が多かったであろう」

伊右衛門は、千代の安否を早くききたかったが、それを懸命に我慢し、孫作の苦労をねぎらった。

「途中、危難があったか」

「ござりました。……実は伊吹の山中にて」

とこの男も、鈍感な男である。さきほどの話をまた語りはじめようとしたから、福岡ら老臣が、

「孫作、ひかえろ」

といった。御用の筋をまず申しあげてから、そのあと問われれば途中の物語などするのが使者

の常識というものだ。
が、孫作は、この時代の男である。ぐっと鎌首をもたげ、
「これは福岡殿ともおぼえぬ。なぜ控えねばなりませぬ。腹の立つことをおおせられるものじゃ」
と、喧嘩腰になった。
温和な伊右衛門は、この孫作もなだめねばならず、福岡をも目顔でおさえねばならなかった。
「委細は方丈できくが、奥は無事であるか」
「えい、それがしの出発まではご無事でござりました。あとは存じませぬ」
「あとは？」
「えい。それがし出発のあとでござれば、どのようにおなりあそばしたか、存じませぬ」
「そうかえ」
伊右衛門は、酢をのんだような顔をした。
(なんとこの男は、気はしのきかぬ不愛嬌者（ぶあいきょうもの）だ)
とおもった。あとはどのようになったかわからぬ、などは言わでものことで、
——はい、ご無事でございました。
と、力強くいえばそれで済むのである。そのあと、できれば、
——みなみな様のご家族、足軽衆の家の者にいたるまで無事でございます。
と凜々（りんりん）たる大声で言えば、陣中にいる者どもの耳にもさわやかに聞こえ、どれほど士気があが

るかわからない。
(機微のわからぬ男よ。人の器量というものは、そういう心づかいができるかできぬかで、ずいぶん品がちがってくるものだ)
とおもい、また、
(孫作は、こんどの功は大きいが、加増はよいほどに加減せねばならぬ)
とさえおもったのである。
ところが鎌首を立て不足づらをしている孫作には、別な料簡があった。
(この馬鹿大将め)
と、腹立たしかった。
かねて孫作は、伊右衛門の妻に対する態度がいかにも男としての品がさがるように思えてならなかった。ひそかにそう批判していたやさき、こうして敵中を突破してかろうじて陣中についた自分に、
「千代は無事か」
などというのは、一軍をひきいる大将としてはどうであろう。
(将士の大半は、妻子を大坂にのこしてきているのだ。みな、口にこそ出さねど、そのことのみ気にかけている。それを大将ともあろう者が、いかに奥方御大切とはいえ、ぬけぬけと訊くことがあろうか。士気にかかわるもとだ)
とこの男はこの男で思っていた。

「まず、方丈へ」

と、老臣の福岡が孫作をうながした。

方丈で、伊右衛門は、千代からの書状を披見するため、まず文箱を手にとった。

「あ、いや」

と、次の間にひかえている孫作はあわてて手を振った。

「と、殿、それはなりませぬ」

「なぜだ」

「その文箱はあとまわしでございます。見ていただくのに順序がございます。その編み笠」

と、孫作は殿様である伊右衛門のそば近くまで進めてあるきたならしい編み笠を指し、

「まずその編み笠から」

「ほう、この編み笠から」

それを手にとり、孫作が教えるとおりにひもを解くと、なるほど手紙がないまぜてあった。

(ほう、千代の芸のこまかさよ)

と思いつつ、ひろげた。まぎれもなく千代の筆蹟であった。石田三成の挙兵とそれにともなう大坂の情勢が簡潔にのべられている。

(これは。——風説どおり、三成は挙兵したか)

一瞬、伊右衛門の表情が固くなった。三成挙兵についての報は風説としては諸大名の陣屋にも

聞こえてはいたが、このように諸侯夫人という然るべき地位のある者からしかも書状でとどいたのは、最初であった。

(千代め、やったわ)

と思いつつ読むと、「かなわぬときには自害して人手にかからぬ覚悟でございますから、大坂の留守居についてはゆめゆめ御懸念あそばしませぬように」とある。

伊右衛門が読みおわるのを待ち、孫作が、

「申しあげまする」

と声をかけた。

「申せ」

うなずきながら伊右衛門は次なる文箱をとりあげようとしていた。

「奥方様からのお言いつけでござりまする。その文箱はおあけになりませぬように」

「わからぬことをいう。千代はそう申したのか」

「これだけは口上にて申しあげよと何度も申されました。おあけなされまするな。その文箱にはいまお読みなされたお手紙と同文のものが一通入っております」

「はて、同文のものが?」

「はい。そのほかに、城中の奉行衆から大坂のお屋敷に参った回状が一通」

「回状とは?」

「いまも申しあげましたごとく奉行衆からのものでござりまする。大坂にお味方申しあげよ、と

いう意味のことが書かれております。殿にはすでに徳川殿にお味方申しあげるお覚悟でありますゆえ、ご覧あそばさずともよい、というのが奥方様のおおせでございました」

「それで？」

「そのまま、文箱を封のまま家康殿にさし出すように、とのことでござりまする」

「ああ」

千代の「芸」がわかった。

人の心を知りぬいた憎いばかりの芸であった。これを文箱の封印つきのまま家康にさし出す。すると家康は伊右衛門の律義さ、誠実さ、そして自分に対するそこまでの肩入れに感激するであろう。もし奉行衆の回状を見てからその読み殻を家康にさし出すとすれば、やはり回文に接していろいろと思案した、ということをうたがわれても仕方がないのである。

どうせ家康に味方するなら、文箱を封印ごと差し出しておしまいなさい、というのが千代の心得た作戦であった。

しかも千代は自分の心境をのべた私信を文箱に入れ、それと同文のものを編み笠にないまぜている。

千代にすれば、（律義者の伊右衛門殿は、どうせこういうことしか手柄のたてようのないひとだから）となにもかも見越した上なのであろう。

「よし」

伊右衛門はうなずき、家康の陣にゆくべく馬の支度をさせた。

古河の宿陣にいる家康は、その夜よほど疲れていたのか、早やばやと夕飯をしたため、寝についた。

伊右衛門が千代が送ってきた文箱をもち、その陣中にあらわれたときは、すでに家康が寝所に入ったあとで、だいぶ時が経っている。

「押して拝謁しとうござる」

と、伊右衛門はいつもに似ず、強引に言い張ってきかない。

「さてさてお聞きわけのない。上様はわれらとはちがい、御老体でござりまする。いまお起こし申しあげれば、朝までおやすみにならぬかもしれませぬ」

と、家康付の諸将がいった。そうまでいわれると伊右衛門は気が弱くなり、

「それはこまりましたな」

途方に暮れ、やや、ぼう然とした顔をした。諸将も伊右衛門があきらめたか、と安堵し、

「されば対馬守どの、御用の筋はわれわれがうけたまわり、あすお目ざめを待って申しあげておきましょう」

「そのときではおそい。……」

わざと、つぶやくようにいった。

「天下の一大事でござる」

「えっ」

「一刻おくれれば一刻だけお味方の不利になり、明朝では手の打ちようもござるまい。おのおの、それでもよろしうござるな」

「お、お待ちあれ」

一人が駈けた。家康の謀臣本多佐渡守正信にまで報らせるためである。

さいわい、この老謀略家はまだ起きていてみそ壺をひき寄せ、指でなめながら寝酒を楽しんでいる。

「ほう、対馬守が？」

とつぶやいた。正信があれこれと思いめぐらしているのは、すべて大坂の情勢のことであった。それだけに、伊右衛門がもたらした用件というのを直感することができた。

「余人がいうのではない。ああいう人柄のごじんがいう。この夜中、押して拝謁したいというのは、よほどのわけあいがあるのであろう。わしが」

正信は腰をあげた。

「上様をお起こし申しあげてくる」

正信は、家康の寝所に出入りすることのできる唯一の男である。

廊下を渡り、寝所の次室に入って宿直の者に言いつけ、

「お鈴を鳴らすように」

と命じた。

幸い、というか、家康はねむれずにいた。懸念が多かった。

懸念はむろん、正信と同じく大坂の情勢のことである。三成が秀頼の名によって西国大名に陣触れすれば、おそらく家康がにぎっている人数以上のものになるであろう。

（今夜あたり、伏見の鳥居元忠から三成挙兵の報が入るのではないか）

家康譜代の老臣で伏見城をまもっている鳥居元忠には、三成挙兵を聞くと同時に電発するがごとく使者を関東に発せよ、と命じてある。

それがまだ来ない。

理想的にいえば、家康がまず大坂の確報を得、

「大坂ではこれこれである」

と諸侯に伝えるという形態がもっとものぞましい。諸侯がそれぞれの大坂屋敷から確報を受けとってから家康がそれを知る、というのは統率上、なんともまずい。

とつこうつ、そう思っているときに鈴が鳴り、やがて本多正信が入ってきたのである。

「ほう、山内対馬守がわしに会いたいと？」

家康は意外に思った。

夜中、陣中にきて人の制止もきかずに拝謁を強要するような男ではないのである。

「さては弥八郎（正信の通称）、三成は旗をあげたな」

家康は即座にいった。

寺には小さな書院がある。

家康は寝巻をぬぎ、平服に着かえるとその書院に出た。
伊右衛門が平伏している。
「ああ、これは対州（伊右衛門）どの、夜中ご苦労でありますな」
と、本来なら伊右衛門がいうべきところを、家康は逆にねぎらった。この老人の目下の急務は、大名の心をとることであった。
「ただいま大坂表にある妻より」
と、伊右衛門は問題の文箱をすすめ、
「これなる文箱がとどきました。大坂の情勢がくわしくわかることと思いますゆえ、このままご披見ねがいます」
「このまま？」
家康は、ふしぎな顔をした。夫人からの手紙が入っているはずである。おそらく余人に知られたくない内々のことや愚痴なども書かれているかもしれぬのに、この男はなんと無神経なことをいうのであろう。
（名だたる律義者なのだ）
家康は、ほほえましく思った。
「対州殿、お手前の妻女については亡き織田殿などからもきいていた。貧窮のころ、黄金十枚で名馬を買われた話など、よくおぼえている。また太閤ご在世のころ、聚楽第に天子の行幸をあおぎ給うたとき、そなたの妻女は太閤のお言いつけで美しき色小袖を天覧に供せられた。われらも

陪観したが、あの美しさはいまも目に残っている。しかしいかに対州殿の妻女とはいえ、これは秘状でござろう。他人のそれがしがさきに披見するのはどうもはばかられる」
「いやいや、ご披見を」
と、伊右衛門はこわい顔で主張するばかりである。その顔つきをみているうちに家康には、伊右衛門の意がわかった。
はっと手をたたき、
「早速ながらわれらに味方するとお決めくだされたか」
大声でいった。感動し、かつその感動を大声で宣伝したのもむりはなかった。いま上杉征伐で連れてきている諸大名は豊臣家からの借り物で、かれらはいったん東西合戦がはじまったとき、大老家康につくか、奉行三成につくか、はっきりと意思を表明しているのは、藤堂高虎をはじめ黒田長政、細川忠興、池田輝政、浅野幸長、それにここには居ないが加藤清正ぐらいのものである。
あとの大名は、家康にとって不気味であった。いざというときにどちらにつくかわからないのである。
そのいわば旗幟不鮮明派のなかで山内対馬守一豊が、
——文箱の封は家康殿が切られよ。
とさし出すことによって、まっさきに味方につくことを宣誓したようなものであった。
（これは政治上、重大なことだ）

家康は緊張し、感激したのである。

「対州殿のご好意、たしかに受けました」

と家康はかるく一礼し、

「いつにかわらずお律義なことでござる。ご好意は十分にわかりましたゆえ、その文箱はお手前があけ、声を出して読んでくだされ」

と、家康は、この伊右衛門の文箱の一件を政治に利用しようとした。

伊右衛門は音読した。

その文中、

「右のような奉行衆の反逆をお聞きなされても、一豊さまのお心はつね日ごろからお決まりなされていることでございますゆえ、わたくしから何を申すこともありませぬ。徳川殿への御忠節、よくよくおつくしあそばしまするように」

というくだりまできたとき、一座に声なきどよめきがあがった。

伊右衛門が退出しようとするとき、家康はさらに手をあげてひきとめ、

「対馬守どの。そこもとのお心くばり、徳川家あるかぎり子々孫々にまで忘れませぬぞ」

と声をひそめていった。

伊右衛門は、千代がやったこの一事が、そこまで大きな政治的意味をもつものだとはおもいもよらなかった。

伊右衛門が退出したあと、家康の許可をうけて使番たちを集め、

「対馬守のもとに使者が入った以上、諸陣にいる諸侯のもとにもそれぞれ大坂から急使が入って動揺がおこっているにちがいない」

といった。

当然なことであった。みな大坂表に妻子を置いていて、その安危が気にかかり、

――このまま徳川殿に付き従っていては妻が殺され、一家は絶滅するかもしれない。できれば陣を払って大坂に帰りたいものだ。

とうろたえているであろう。そういう連中をかかえて乾坤一擲（けんこんいってき）の大合戦をしようなどはできぬ相談である。

このさい、人の心に覚悟をあたえることが必要だった。

「さればおのおのはこれから諸陣にゆき、上方の詳報が入った、これこれでござる、と正直に伝えよ。そのあと、いまの山内対馬守が封のまま文箱を出した一件も申せ。されば律義者で通った対馬守さえ二心なくわが君に加担した、ということで、人はわれも遅れじとあらそって忠勤をはげむ心になるであろう。こういうときの人の心の不安は、存外、そういうことで一決し、まとまるものだ。さらに対馬守夫人のわれは自害せんという覚悟のほどをしたためた文面も披露せよ。されば、大方の者も、妻子を思う心を切りすてるであろう」

「承知つかまつりました」

と、夜中ながら使番は八方に飛んだ。

その直後に、さらに重大な情報が細川忠興によって家康の陣中にもたらされたのである。

「わが妻は」

と、忠興は暗く光る視線を畳の上に這わせつつ、

「屋敷に火を放ち、石田の手にかかるよりはと自害つかまつりました」

といった。

これには家康は忠興の胸中を思って声もなかった。やがて、

「愁傷に存ずる」

と、低く頭を垂れた。

「妻は、かねてのそれがしの意中を知り、それがし徳川殿加担の心に乱れなきよう自刃して果てたように思えまする」

この報も、深夜の諸陣にまたたくまにつたわり、

――細川越中守がその覚悟ならば。

ということで、従軍中の諸大名も大坂の妻子への愁いを断たざるをえなくなった。

のちに取り沙汰する者があり、

「関ヶ原の勝利の第一原因は、山内対馬守夫人と細川越中守夫人に多くを負っている」

といわれた。

その夜、大坂での情報が確報として諸陣に入った。黒田如水夫人とその子長政の夫人は家臣の機転によってうまく大坂を脱したことも、加藤清正夫人が水桶に二重底をつくってそれにひそん

で安治川尻(あじかわじり)まで運ばせ、船で脱出した、というはなしも諸陣にひろまった。

(ところで、千代のその後はどうなのであろう)

伊右衛門は気が気ではなかった。

(千代のことだ、自害などするより、うまく才覚で逃げてくれると思うが)

細川屋敷が燃えあがって数日のあいだ、大坂の城下でさまざまな流言がとんだ。

「こんどは黒田様のお屋敷じゃ」

とか、

「すでに浅野様のお屋敷に奉行方の人数がはせむかったという」

などというぐあいにまことしやかに口から口へと伝えられ、ついには「前田様のお屋敷には、お城から鉄砲足軽百人がさしむけられ、夕刻から夜陰にかけてさんざんに弾を射ちこんだ」という流言までながれ、千代までが信じたほどであった。

御留守居役の市川山城もさすがに心配し、

「もはや、大坂には居れませぬ。それがし奈良にしるべがござれば、なんとでもして奥方様をお落し申しあげましょう。おそれながら物売り女(ものうりめ)にでもお身をおやつしくだされますするか」

「途中、きっと露顕するでしょう」

「露顕すればそれまでのこと。ここは千に一つ、万に一つの賭けでございます」

「男は、賭けがすきですね」

と、千代は笑った。
「わたくしは女でありますから、そのような千に一つ、万に一つと申すような賭けは好みませぬ。できるようなことだけを考えます」
「しかし」
その法が無いから苦慮しているのではないか、と市川山城はふくれっつらでだまった。
「それならば、奥方様は、このまま座して敵の人数を迎えられまするか」
「いいえ」
「ではどうなされるのでございます」
「ちょっと考えてみたのです。屋敷じゅうの薪、わらをあつめられるだけあつめてくださいませんか」
「どうなされるのでござる」
「それを、門、玄関わき、書院の軒下に積みあげ、さらにはユカ下にも詰めていただきます」
「ははあ、われとわが手で火を放ってお屋敷を焼かれるのでございますか」
「そうです」
「いま、すぐ火をかけますので」
「山城」
千代は、真顔であわてた。
「そんなことをすれば、今夜寝るところがなくなるではありませぬか」

「では？」
「ただ積みあげておくだけです」
さあ早く、と千代はうながした。
市川山城はその指図をした。屋敷中の人数が駈けまわって、千代のいうようなかっこうになった。
千代は見廻ってみて、
「まだ足りませんね、もっともっと高く積みあげるのです。薪は下から火をつければすぐ火の柱になって燃えあがるようにイゲタ積みにしてください」
「もうこれ以上、薪がございませぬ」
「そこに松があります。庭の木は、萩、南天にいたるまで伐り倒してください。いいえナマ木でいいのです。それを出来れば屋敷よりも高く積みあげるのです」
「かしこまりました」
と市川山城はなにやら面白くなってきたらしい。庭にとびだして人数を指揮する一方、みずからも攻城用の大マサカリをふるって木を伐り倒し、他の者が伐り倒すあとからナタで割り、さらに別の人数がそれをどんどん積みあげた。
日没までにすべて出来あがり、積みあげられた薪の山で、屋敷の景観が一変するほどになった。
「できあがりましたが」
と市川山城が報告すると、千代はごくろうさまでした、とねぎらった。

「これをどうするのでございます」
「どうもしません」
千代は、けろりとしている。
翌日、奉行方から何度目かの使者がきた。
使者は福原佐渡守という人物で、五千石を食み、人数百人ばかりをつれている。
むろん、用件は千代の人質の一件である。
「屋敷をひきはらって城内に移られよ」
というのだ。
その福原が、門を入ったあたりでみるみる顔が青ざめ、足が動かなくなった。
例の薪の山を見たのである。
「これはなにごとか」
山内家の案内の者にきいた。
「存じませぬ。ただ当家の北ノ方が、かようにせよと申されたのでござりまする」
「籠城の支度をしておるのではないか。邸内には人数はいかほどおる」
「二十人でござりまする。そのうち半分は北ノ方の侍女でござりまするゆえ、籠城はむりでござりましょうな」
山内家の者は、ひとごとのようにいった。

福原佐渡守は決心し、案内されるままに玄関へあがり、廊下を通り、小書院に入った。
庭がみえる。
その木のことごとくが伐られ、薪になってそのあたりにうず高く積まれ、どうやらこの小書院の下にもぎっしり詰めこまれているらしい。これに煙硝をぶっかけて火をつければ、この小書院はたちまち紅蓮の焔につつまれてしまうであろう。
「山城」
と、福原佐渡守は市川山城の名をよんだ。
「これはどうじゃ」
「はい、薪でござりまする」
「わかっておる。何のためか」
「存じませぬ。当家の北ノ方が、このようにせよとおおせられましてござりまする。ごぞんじのとおり、風変りなことを好まれるお方でござりまするゆえ、はてこれは何のためになされましたものか……」
「関東の」
と福原は話題をかえた。
「対馬守殿からは、奉行方がまわした回状についてなんの御返事もないか」
「はっ、それにつきまして手前どもも」
市川山城は手をつき、神妙に答えた。

「一日千秋の思いで待っておりまする。手前一存で申しますれば、主人対馬守が奉行方とお同心なさることをひそかに願うておるのでござりまするが」

「ほう、左様か」

福原は、やや緊張が解けたらしい。

「そこでじゃ。お城から何度も使いが参ったはずであるが、北ノ方のお住居をお城にお移しするという一件はどうじゃ」

「それについては、関東の御陣にいます主人対馬守から指図のないかぎりお受けできませぬ、と何度も申しのべたとおりでござりまする」

「秀頼様の御言いつけであるぞ」

「はっ」

と市川山城は平伏し、

「しかしながらそれにつきましても毎々申しあげておりまするとおりでござりまする。北ノ方様は、夫のゆるしがなければ例え京の天子の御命令がくだろうとも居は移せぬ、と申しておられまする」

「北ノ方にお会いしたい」

福原はいった。

市川山城はその旨を千代に取り次ぎ、千代はごく気さくに小書院に出てきた。

福原佐渡守は右の要求をくりかえし述べ、千代も同じ返答をくりかえしのべた。

「福原殿、おなじことを何度も言わせるものではありませぬ。これ以上強談なさるについては、もはや覚悟がございます。屋敷に火を放ち、あなた様もろとも火中で死ぬばかりでございます」

これには福原佐渡守もおどろき、あたふたと千代の前を辞し、かき消えるように屋敷を出てしまった。

家康が、下野小山（しもつけおやま）の宿（しゅく）についたのは、その翌日の二十四日である。

その夜、伏見城をまもらせている家康譜代の老臣鳥居元忠から行商人に身をやつした急使が到着した。

使者は、浜島無手右衛門という者である。途中よほどの難儀をかさねてきたものか、着衣がぼろぼろになり、人の姿とも思えない。

家康は直接引見し、

「申してみよ」

といった。浜島無手右衛門は平伏したまましばらく息を入れていたが、

「大坂にある諸将は毛利輝元どのをはじめことごとく御敵と相成りました。さらに奉行方は伏見城の明け渡しを厳談いたしておりますが、こなたの主人（鳥居元忠）は一議もなく拒絶いたしました。されば奉行方は軍勢を催して伏見へのぼり、はげしく攻め立ててくるでありましょう」

「伏見城の模様はどうか」

「城中一同」

と、無手右衛門は城将鳥居元忠の言葉を伝えた。

「足軽にいたるまで死を決して防戦の覚悟をきめておりますゆえ、上様には御懸念あそばさぬように、とのことでござりまする」

「そうか」

家康は、うなずいた。もともと伏見城の落城、鳥居元忠以下の戦死は十分予想されたところであり、上方を出発するときも暗に元忠に言いふくめ、元忠も、

「この老人が上様のご開運のモトダネになりますならば、得がたき死所を賜わったと申すべきこと、ゆめゆめお心をわずらわせますな」

と答えて、さわやかな覚悟を示した。

家康は浜島無手右衛門をさがらせたあと、側近の本多正信、井伊直政を膝近くまでまねき、それぞれ意見をのべさせた。

若い井伊直政は、

「徳川の天下を取るは、この一挙にござる」

といった。

「三成の挙兵は天の与うるところでござりまする。天の与うるところを取らざればかえってその咎を受く、ということが古書にもござる。お迷いあそばすことなくここで軍を旋回なされ、すみやかに西上して天下を統一なさるべきでありましょう」

「そなたはお若い」

といったのは、本多正信である。

「会津には百万石を領する上杉景勝が、五万の兵に戦備させてわれわれの攻めかかるのを待っておる。お味方は十万、もしこの小山で軍を返して西上せんとすれば、上杉の五万は後方からわれわれを追いくずさんとするであろう。大坂には石田、会津には上杉、敵は前後にいる」

と言い、つばをのんでから、

「あまつさえ、いま上様につき従っている諸大名は豊臣家恩顧の者が多く、気心もさだかには知れぬ。平素上様にいんぎんを通じてきている者でも、いざかような事態になれば心がころりとかわりやすいものじゃ」

さらに、

「諸大名は大坂に妻子を置いておる。石田方はこれをおさえ、関東御従軍の諸侯がことごとく上様にお味方したとわかれば容赦なく殺すであろう。諸侯はみなそれを案じておる。人の心は一夜でかわることもあるものだ。そういう黒白不明の諸侯をひきいて乾坤一擲の大勝負をするなど、危険この上もない」

と井伊直政はいった。

「それで老人はどうするといわれるのだ」

「このさい、諸侯はいったんそれぞれの領地に帰し、上方の軍に対しては当家のみの人数をもって箱根を固め、もって敵の来襲を待ってこれを撃ち砕く以外に手はない。箱根で勝利をおさめたあとは天下はことごとく徳川の旗になびくであろう」

家康は沈黙し、これについてなにもいわなかった。

その夜、家康の手もとからいま一人の使番が先鋒諸将の陣屋にむかって走った。

使番は、鎮目彦右衛門という馬の名人である。闇のなかを左手でタイマツをかかげ、右手で手綱と鞭をもち、

「御用ーっ」

と駈け、諸陣の門前に来ると、ぐっと手綱をひきしぼって、

「使番鎮目彦右衛門、口上」

と馬上で叫ぶ。

「明二十五日」

と区切り、

「朝の四ッ、小山なる上様御陣所において軍議これあり、参集めされよ」

と叫びおわると、ぱっと馬腹を蹴り、タイマツの火を流星のごとく曳きつつ駈けすぎてゆく。

「殿、明朝四ッ、小山の御陣所において軍議でござりまする」

と伊右衛門のもとに駈けてきたのは、乾彦作であった。

「そうか」

伊右衛門はまだ起きていた。諸陣のどの将も今夜ねむっている者はないであろう。

「物頭以上をこれへ集めよ」

と、伊右衛門はいった。

やがて、ざわざわと具足の草摺の音をたてて物頭（諸隊長）以上があつまってきた。

伊右衛門上座。

福岡、乾らをして大坂の情勢を説明し、「当家としてはいかがすべきか、存念あらば遠慮なく申せ」と会議の目的を説明した。

「ただ一つ申すことがある」

と、福岡がいう。

「当家としては、いかなることがあっても徳川殿と命運を共にするつもりである。これは殿の御覚悟で決していることゆえ、さればおのおのにあっては、当家としてどうすればよいかという存念を申しのべられよ」

みな、沈黙している。

悪意でだまっているのではなく、みな、なにをしゃべってよいかわからないのだ。

不安もある。

はたして徳川殿に付き従って戦さが勝てるかということであった。伊右衛門の家来だけでなくどの陣屋でも、下級の者であればあるほど、

——奉行方のほうが強いのではないか。

とばくぜんと思っていた。なにしろ、難攻不落の大坂城を拠点としている。しかも秀頼という幼君を擁し、いちいち軍令は秀頼の名によって出るのである。大坂城に招致されている大名の数、

総石高、人数も当方よりはるかに多いという。

さらには、足軽にいたるまで妻子を大坂に置いている者が多い。自然、

（奉行方に御加担くだされればよいが）

と思っている者が多いのは、当然の人情であった。

いまひとつ、不安がある。

会津の上杉に対してであった。

（いまわれわれは挾み打ちにされる態勢にある。東の上杉と西の奉行方とのあいだに漂っているのが、われわれ十万余の人数ではないか）

「申しあげまする」

と末座から声をあげたのは、渡辺笑右衛門という者である。

「ただいま、徳川殿によりて御家運を開かんという旨の殿の御覚悟を福岡殿からうかがいましたが、はたして徳川殿が勝つというご確算がおありでござりまするか」

「申したのは、笑右衛門か」

伊右衛門は、のびあがって末座のあたりをみた。

「はっ、渡辺笑右衛門でござりまする」

「笑右衛門は、なにが不安か」

と、伊右衛門はやさしくきいてやった。

伊右衛門という男は、自分に才智がとぼしいことを知っている。それだけに他人の意見をきくことには名人芸にちかい能力をもっていた。

部下にはできるだけの意見をいわせ、くだらぬ意見でもいちいちうなずいてやり、意見をいうことに怖れをいだかしめないようにしていた。

「前方の敵は、上杉百万石でござる。謙信公以来、兵馬の強悍は天下にひびき、主将景勝殿、家老直江山城守殿は世にきこえた猛将でござる。徳川殿がいかに老練の武将とは申せ大坂には石田三成、会津には上杉景勝、と前後から虎狼に襲われては勝算かならずしも徳川殿にありとは申されますまい。うかうかすると御家運も尽きるかもしれませぬぞ」

といったのは、むりもなかった。

上杉家の動静については当面の敵であるだけに、情報、流説が多く伝わっている。自然それを過大に計算して物事を判断しやすい。

上杉家は、家老直江山城守の名をもって家康に対し糾弾書をたたきつけ、領国内に多くの新城をきずき、家康をひき入れて一大決戦の用意をしている。

さらに上杉景勝はよほどの決心をしているらしく、

「わしは、家康に対し義戦を試みるつもりである。勝敗は考えておらぬ。もしわしの覚悟が無分別と思う者があれば、譜代、旧功、浪人を問わず暇をつかわすから申し出でよ」

と家臣一同の決心をかためさせた、という報も当方に入っている。

さらに景勝はみずから軽装して予定戦場である白河方面の地形をこまかく偵察し、帰城してか

らおもだつ諸将を、亡父謙信の菩提寺雪洞庵の毘沙門堂にあつめた。

「このたびの戦いは私怨あってのことではない。内府（家康）は去年、故秀吉公が信頼された奉行石田三成および浅野弾正を故なく押し籠め、われら上杉家に対しても謂われなき難題を申しかけてきている。これを黙過し、忍ぶは武士ではない。よってわれらは、汝どもの一命を請いうけて内府と勝負を決したい。われらは若年のころから弓矢をとり百戦して一度も敗れをとったことがなかった。このたび決戦を行なうについては卑怯の者は斬に処し、勇功ある者に対してはかならず賞禄をほどこす。されば汝らも、わしとともに白河口をもって死所とせよ。右違背なきため、毘沙門天王および亡父謙信公の霊前にて誓約したい」

と訓示し、景勝はまっさきに指を切って血を誓紙にそそいだ。そのあと諸将、粛然と順によって進み出、誓紙に血判し、さらに末々の下級武士まで、堂からさげわたされた神水を飲んで決死を誓った。

いわば、死兵になった。全員死を決した場合、世にこれほど強い軍団はないであろう。

さらに参謀長格の直江山城守はこのたびの作戦がいかに勝利の希望にみちているかを説き、

「勝負を測るに、お味方の勝利は疑いない。そもそも国攻め城攻めと申すのは、守る方の五倍、十倍の人数を必要とするものである。たとえ家康の智謀、神にまさるといえどもわずか十万たらずの人数で、五万以上のわが兵を破ることは不可能である」

といった。

景勝と直江山城守の作戦は、敵を白河の南方にある革籠原におびきよせ、そこで一挙に勝敗を

決しようとするにある。革籠原はひろい盆地で、大軍の雌雄を決するには好適地であった。

かれらはこの原の民家を他に移し、家屋が敵の拠点にならぬようことごとく焼きはらい、雑木のたぐいもさかんに伐りとらせている。

伊右衛門らの相手は、そういう敵である。

「押して申しあげまする。殿には、徳川殿が勝つ、というお見通しはござりまするか」

と、渡辺笑右衛門はいった。

一座はざわめいた。

伊右衛門はそのざわめきを十分に観察しようとし、口をつぐみ、目だけを動かした。ひとりひとりの顔をみた。伊右衛門に見られて目を伏せる者もあった。

（みなに不安があるな）

笑右衛門のぶしつけな発言は、その不安を代表したものであろう。

このざわめきを一言でしずめ、家臣団の心を一つに統一するのは、大将である伊右衛門の仕事であった。

（なにを言えばよいか）

わからない。うかつなことを言えば、かえって家臣の心が乱れる。千代ならばこういう場合どういうのであろう。

第一、伊右衛門は、徳川殿がはたして勝つものかどうか、予言できない。

勝つ、と予測できる条件は三つある。

（まず、徳川殿は、小牧・長久手の陣で、故太閤でさえ一敗を喫したほどの軍略家である）

ということである。この点、敵の石田三成はどれほどの軍功があるという男ではない。かつ、三成が総帥に押したてている毛利輝元は名家の三代目で凡庸そのものの男である。とても家康には太刀打ちできない。

つぎに、身代である。

家康は関東二百五十五万石の大大名であり、三成は江州佐和山二十万石足らずの身上で、この点ではくらべものにならない。天下の諸侯を動員する上で、信用がちがうのである。

（おそらく、戦国の世にもどるであろう）

と伊右衛門はおもっていた。天下が乱れに乱れれば、統率力のある、身代の大きい者を押し立てて自家の運をきりひらくのが戦国の作法というものであった。

第三に。

さまざまの情報でわかってきたことだが、豊臣恩顧の武将のうち、秀吉に縁が深かった者ほど、家康に加担しそうであった。加藤清正、福島正則、加藤嘉明、黒田長政、浅野幸長、細川忠興……とこうならべると、いずれも秀吉の正妻北政所に愛されていた者が多い。

（北政所様が、徳川殿に加担せよ、とひそかに指揮しているのではないか）

と思われるふしが濃い。北政所は、家康こそ律義第一の男であると信じていた。家康を頼んで豊臣家を護立してもらおうと考えていた。そこまでは伊右衛門も知っている。

（さればあのひとは）

と、思っていた。

（ご自分の影響下にある加藤清正らに説いて徳川殿にお味方させようとしているのではないか）

それが事実なら、すでに家康にいんぎんを通じている武将の数は、伊右衛門の予想をうわまわるであろう。

（だから勝つ）

ともいえない。

利点は、西軍のほうにもある。西軍の利点をのみ考えれば圧倒的な勝利は石田方にありということにもなる。

（敵の長所を考えすぎぬことだ）

と伊右衛門はおもっている。この教訓は、伊右衛門が織田家の一下級将校であったころから数えきれぬほどの場数をふんでやっとたどりついた自分への教訓である。

（合戦というものは、やってみねばわからぬものだ。最後には賭博である）

さらに伊右衛門は、自分の幸運さを信じていた。

かつては信長に属し、ついで秀吉に属し、たった一度小牧・長久手での戦例をのぞいては一度も負けたことがなかった。伊右衛門がつよいわけではない。つねにかれの最高指揮官が戦いに勝ってくれた。

（おれは運がいいのだ）

おそらくこんどの徳川殿もそうであろう。

「ない。――」

と、伊右衛門は大きな声でいった。

その声の大きさに一座は、びくっと顔をあげた。

「成算などはない」

伊右衛門は、この男にはめずらしくぎょろりと目を光らせ、表情を動かさず、一座を見わたした。一座は息をつめて伊右衛門をみている。

「徳川殿が勝つかどうか、そういうことはわからん。わかっておればもともと合戦などをする必要のないことだ」

伊右衛門は、憤っているようにみえる。ふてくされているようにもみえる。

しかしこの男の胸を占めている感情はそのどちらでもなかった。かれは、ごくきまじめにそれを思い、神仏に祈るような気持でこの言葉を吐いていた。

ほとんど息を詰めるようにして、一座をねめまわしている。

最後にいった。

「徳川殿を勝たせるのだ」

はっ、とみなが頭をさげ、すぐ顔をあげた。どの男もおなじ表情になっていた。

（成功した）

と伊右衛門はおもった。ほっと安堵のため息をつく思いであった。このもっとも重要な場合に、家中の心を一つにすることができた。

「わしは、この座にいるたれよりも合戦の場数を踏んでおる」

と、微笑した。事実そうであった。この時代のたいていの大名は創業の雄で、経験といい、指揮能力といい、情勢の判断力といい、当然のことだが家臣よりもすぐれている。

「踏んできて得たことが一つある。それはどのように味方が苦境に立っていても、味方の最後の勝利を信じきって働くことだ。わしはこの一戦で山内家の家運をひらく。そのほうどもも、この戦さで家運をひらけ。わしがもし討死すれば、弟の子忠義（国松）を立てよ。そのほうどもが討死すればかならず子を立ててやる」

伊右衛門は自分の言葉に昂奮してきた。

「子がなければ兄弟をたててつかわす。兄弟を立て、兄弟がなければ縁族をたずねさがしてでもその功にむくいよう。わしも死力をつくす。そのほうどもも、死を決せよ」

みな、平伏してきいている。

伊右衛門はしゃべりすぎた、と思った。こういう場合の「殿様」の言葉というのはみじかいほうが、より感動を生む。あとは重臣にしゃべらせればよいのである。

急に語調をおとし、

「笑右衛門、わかったか」

と微笑した。むろん笑右衛門は一議もなく平伏し、肩をふるわせた。

(この名将のためには死をもいとわぬ)

と笑右衛門は思ったが、事実、この夜の伊右衛門は名将とよばれるのにふさわしかった。

伊右衛門はみなを散らせ、寝所にひきとった。

(夜明けまでは、まだ多少の刻がある)

とおもい、衣装をぬぎ、すっぱだかになって寝床に入った。夜が明ければ軍議がある。

(すこしでもねむらねば)

と、目をつぶった。ひとよりも冴えた頭で軍議に出たかった。

軍議、軍議、と伊右衛門は呼吸のたびにそれを思った。いままでこの無口な、しかも平凡な頭脳をもった男は、いかなる軍議でもあまり発言したことがなかった。

いつもすみで沈黙していた。

(しかし、こんどの軍議には、ひとをあっと言わせることをしゃべるぞ)

と覚悟した。たかだか六万石の身上にすぎぬとはいえ、ぼつぼつおれも天下を動かすテコのはしくれをにぎってもよい頃だと思うようになっていた。

事実、山内対馬守一豊といえば、大物でないにしてもすでに小物ではない。

文春文庫

功名が辻(三)(こうみょうがつじ)

定価はカバーに表示してあります

1976年4月25日 第1刷
2001年7月25日 第49刷

著者 司馬遼太郎(しばりょうたろう)
発行者 白川浩司
発行所 株式会社 文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102-8008
TEL 03・3265・1211
文藝春秋ホームページ http://www.bunshun.co.jp
文春ウェブ文庫 http://www.bunshunplaza.com

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本
Printed in Japan
ISBN4-16-710519-5